

岳 山

年 二 十 二 第

號 三 第



山 岳

第二十二年第三號

昭和三年四月發行

目 次

表 紙 ツバメオモト

松 井 幹 雄氏筆

本 欄

阿里山より新高東山へ
 次高山(シルグイヤ山)
 次高山に就て
 御嶽より乗鞍まで
 一月の熊野湯附近と澁峠白根越え
 アイガー東山稜の登攀

北 田 正 三 一頁
 鹿 野 忠 雄 二六
 大 橋 捨 三 郎 四七
 マレ・ウオルトン 六六
 吉 澤 一 郎 八四
 渡 邊 八 郎 九七

圖 版

○山に入る時の臺灣蕃人の服装○東埔社前の鐵線橋 對頁
 ○鹿林山より見たる新高主山と新高北山○新高頂上附近の岩壁と新高南山 八
 ○ラクラクの大瀑○新高北山より秀姑巒山及中央山脈を望む 一六
 ○新高下小屋より頂上に至る間の岩壁○新高主山の頂上 二四
 三二

○新高北山の富士標高點より新高主山及び新高東山を望む 四〇

○飛行機上より見たる御岳 六四

○王瀧口常盤橋○鞍坡峽 六八

○田ノ原の小屋附近より見たる御岳○王瀧口中ノ小屋に於ける御岳講の一團 七二

○乗鞍岳南山稜の二峰○乗鞍岳頂上の權現池 八〇

○笠ヶ岳窓岩○一月の笠ヶ岳東面 八四

○横手山松尾根分岐點より笠ヶ岳を望む○赤石山頂より横手山及び御飯岳を望む 八八

○横手の横ツツリ○白根地藏岳の西側 九六

○アイガイ山ミツテルレギ・フユツテにて○ミツテルレギ・フユツテより見たるアイガイ山 一〇四

○チベットへの途上リプレク峠附近○ロードデンドロン 一四〇

雜 錄

自一〇
至一三〇

○臺灣登山界の概観(沼井鐵太郎)○奥羽の三湖に結まる説話(山本徳三郎)○大岳から御前への新道(高畑棟材)○昭和二年十月ばかり觀楓旅行しけるときによめる(田口虎之助)○名古屋の西方の山(黒田正夫)

雜 報

自一三四
至一四四

○秩父宮雪中御臺車○淺間山大噴火○慶大山岳部員遭難○早大山岳部發掘準備○ヒマラヤだより

會 員 通 信

會 報

自一四五
至一四九

○第三十九回小集會記事○會務報告○交換及寄贈圖書目○投稿規定

插 圖 說 明

阿里山より新高東山へ

北田 正三

一昨大正十五年五月五日商船扶桑丸にて三日路の波を越え、多年希望の臺灣中央山脈縱走を期して、基隆島の奇勝に先づ南の國にあこがれの第一印象を喜び、總督府の厚き援助と恵まれたる天候に蕃界三旬の山の旅を終る。同行者二人。事新らしく云ふ迄もなく、臺中を起點として水離坑、ナイホンボ、ナマカバン、トンボ、ラクラク、對關、觀高、八通關を経て北山、主山への四日路の道は、其の登路の比較的容易なると警備の完全なるとに由り、之れを表新高登山道路と稱すも敢て異論あるまじと思はる。

今回は行を阿里山沼ノ平に起し、見玉山の尾根を傳ひ、石山及石水山の密林を辿り鹿林山より、トンボ山をへつりてナマセンケイ、沙里仙溪の源頭を探り、人跡未踏の大森林に迷行すること二日にして漸く之れを突破し、北山より主山へ、更に未調査の東山の岩頭を探踏し、其の驚くべき山岳美に精神を恍惚たらしめたり。今之が思ひ出のまゝを抄録して、後遊の士の參考に供す。

阿里山より鹿林山へ

總督府にて總ての打合せを終り、五月九日快晴を喜びつゝ、直に桃園より大溪へ、翌十日更に角板山より搜天山に向つた。ガオガン蕃社までの二日路に汗を絞り、キナジイ蕃、マルコアン蕃との戦闘に道をはばまれて、白銀の雪嶺を雲際遙かの東に眺めながら、雄大なシルピヤ山に惜しき別を告げて想思樹の黃花咲き匂ふ二十里の道を汽車に遅れじと桃園まで自動車を驅る。氣温八十七度、蛙聲しきりに耳朶を打ち螢火亂れ飛ぶも南國の夏らしい。

暑苦しき動搖の車中に夢も結びあへず、十一日の朝まだき疲れた三人は嘉義驛頭に下り立つた。旅

装を嘉義ホテルに解くと直に郡衙を訪ひ、荒木郡司、大津警務課長の厚き歓待を受け、登山準備をなした。案内及人夫として蕃丁四人、それに護衛の巡查を加へて一行すべて八人。糧米三斗、鹽鮭六尾、糖蜜酒二斗を用意する。山行に酒を携帯するとは實に不思議の感あるも、蕃丁は夕食後一人約五合のチャンチュを飲まぬと元氣出ない、又酒あるが爲めに困難なる山行をも辭しないので、内地の登山と少しく趣を異にしてゐる。此外尙ほ必要の買物を終り、南支那の風物其のまゝの夜の町を見物もそこゝに、一切の面會を謝絶してホテルで休養した。明日は長官と一緒に阿里山に向ふ豫定である。山へ行く者にとりて難有迷惑なるは心なき人々の夜中訪問であるけれども、歓待を惜まぬ人々の好意に悖らじと強ひて疲れを忘れて快談した。

五月十二日。小鳥の鳴聲にもたとふべきヤモリの叫聲に夢を破られ、午前五時嘉義驛に車を馳す。五時四十分發車、後藤長官と同車した。竹崎驛にて休止、車中山岳談に花を咲かせたのも無理はない、堅苦しい挨拶などは、山へ行く者には禁物である。同行した五高出身の兩中島君もさすがに兩三日の疲れにうとくと眠る。

竹崎驛から愈々阿里山へと入つた。山氣身にしむ東洋第一の森林鐵道、獨立山のスパイラル線及びスイッチバックは内地にては見られない。七十餘のトンネルも煤烟に苦しむことなく、標高七千餘尺の阿里山に登る、途中左右山峽の所々に蕃社隱見して風物全く内地と異つてゐる。

忽ち左側に雄大なる塔山の岩壁が現れ、其山姿が宛としてアルパタのやうである。大竹内務部長の一つ一つの説明を聞きつゝも、未見の新高群山の岩の姿さぞかすと車窓から想ひ遣つた。

嘉義を出發してから阿里山沼ノ平に到るまでの十二時間餘は、不安と焦燥のために氣疲れする位であるが、其の通過する沿道の風物は又なく懐かしい、此の山獨特の、汽車がぐるりと山腹を上り、谷を越え、隧道をくゞり、橋梁を渡り、喚く様に轟々と音を立て乍ら喘ぎ上る有様は苦痛の權化のや

うで、誰でも氣を尖がらせずには居られない。

十字路で長官の蕃人引見式を行つた。萬事大名式である。官吏となるなら臺灣がいゝと囁く同行の學生の言葉に打笑みながら、偉大なる體軀を持つた無邪氣其ものゝやうな蕃人を物珍らしく眺めた。私等の案内及び人夫としてララチ社から選出したのは

ベヨン・シ・ユージュク

(二十三才)

トトサナ・アワイ

(二十才)

ニアホシヤ・ヤバスヨグ

(二十五才)

ホイチヨウス、モオ

(十七才)

で、いづれもツウオ族、アリサン蕃である、別に護衛として蕃人出身で新高通の壯漢野田三郎巡査が加はる、いづれも武裝物々しく心強く思はせる。これではまるで探検物語の主人公に似てゐると願みて一人ぼゝ笑むのであつた。

午後三時過ぎ標高七千尺の沼ノ平に着いた。現場作業所、伐木、集材等の模様を見物し、臺灣人の木登り等に興じた。標高八千二百尺のダイヤモンド山側では、車窓から東方遙かに一萬尺を越えた新高連峯の九座の峻嶺が、夕陽を浴びて赤褐色に輝き、溪の巖には淡桃色の雪を鈍く光らせて、動かない雲の海の上に聳立してゐるのを望んだ、主山、西山、東山、鹿林山、南山、北山と姿は見えてゐる筈であるが孰れを夫れと區別し難い。「見たく〜とう〜新高を見た」と學生の二人は手を打つて喜んでゐた。

鷺羽から眺むる立山連山、或は白馬から望む裏立山の二倍の大觀に酔ひながら、靜かに沈む夕照をあびて、山の彼方アリマンシキム蕃奴の事を聞きつゝ、想ひは亂雲の行き交ふ如く胸を打つた、ピョルンソンの山嶽小説のアルネが山の美、山の眺めにうつとりとなつたのも、斯る神祕境ではなかつたか、などとりとめもない空想に耽つてゐるが、ふと下方を見下すと山肌あらはに壞れかゝり、枯渴した巖石は地殻の亡靈の如く曇々と曝され、取り残された切株が卵塔のやうに白く直々とそゝり立つて

ゐるではないか。曾ては檜の原始林、アリサンザサを下草として鬱々と茂り合つてゐたことであらうに。山の中でも矢張り文明が自然に加へた害毒の跡を遊子に見せつける。この夜は阿里山クラブに泊つた、蕃人及び野田巡査は駐在所へ行つた。嘉義では相思樹や檳榔や椰子などの熱帯景觀に気分までも暑い思ひをしたが、此所海拔七千尺の沼ノ平では温袍姿に茶の熱いのが嬉しい位だ。食後長官と快談して明日からの行程を語り合つた。ススキの花が夕暗に白く浮いて蟲の音が秋冷を覺えしめる。氣温六十九度。

明くる五月十三日は、愈々新高山脈の一角に立ち入る日である。早朝長官一行に成功を祝されてクラブを發足した。時に朝霧しげく一行八人沼ノ平を後にし、靜かに舊森林鐵路の棧道をへつりて東方山より水山の大森林に入つたのは午前五時半であつた。一見舊知のやうな親さで盡きぬ話しが若き中島君と野田巡査との間に交はされ、四人の蕃人も亦人なつかしげに、七貫に餘る重荷を輕らかに負ふて進む。彼等は只鹿皮一枚をまとうのみで全部裸體で又裸足である。其の體軀のすばらしさ何れも二十二三貫を越え、蕃刀を帯び十八年式歩兵銃に實彈三發を各自に携帶してゐる。性質は温順で、只酒の飲みたさと銃獵の樂しさにひかされて隨行するのだと聞いて、多少の不安を感じたが、今回先導の爲めに選抜された事を名譽とし、且又海の東の兄弟の國の人と共にバトンクオン(新高山の蕃語)に登ることを喜び勇んでゐるとも聞かされた。野田巡査は新らしい鹿の通ひ路を發見して蕃人等に裝彈を命じた。狩獵に眼のない、又時日の感念などのない彼等のことゝて、自分等は迷惑とは思つたが致し方もない、されど一面には全く遠征氣分になつて了つた。

行く手は名物の老樟や、阿里山檜の大密林で高い梢から露のしづくが積つた腐葉の上にしとくと雨のやうに零ちて來る、水山とはよくも名づけたものと一行大笑した。倒木を越え、アリサンザサを分け、ぐしよぬれとなつて進んだ。道はほの暗く、晴雨の區別も判然しない。其のうちに或る臺地の空

林に達してほつとした。地圖を案ずると兒玉山（標高八千六百五十六尺）の一地點らしく、經過の時間は三時間二十分であつた。水山の大密林を無事に突破したらしい。蕃人の案内なしには到底通行不能であることを始めて知つた。之からは兒玉山の山稜を傳ふことになるので小憩する、蕃人等は野營の燃料の資にと枯木の肌を蕃刀で切り取つたりする。このあたりは彼等の唯一獵場で、そこここに野營の跡を見、散亂する白骨は鹿、猿のものと思ひ、其の多いのに驚いた。山稜傳ひを始めてから二十分、右側は楠仔仙溪の深谷で、一陣の冷風はさつと濃霧を送る。一步は一步より峻険の度を加へ、苦しとも苦しい。谷を越え草原地をたどり、強風に吹き曝された松樹まばらな無名山に達した。途てはなく、只先導の蕃丁をたよりに進むのである。彼等は只前面の山頭樹木の枯株、又は岩崖等を過ぎし日の記憶より呼び起して、歩一步と高きに登るのであるが、決してまごつくやうなことはない。梅の密林をくぐりぬけて岩山に出た。霧の往來しきりにして日の光も見えず、午後天気氣づかひながらとある梅の大樹の下で晝食にした、正午を過ぐる五分。

蕃人は蕃刀を振つて古木を伐り、兒玉山で採取した檜の皮と白骨とを磨擦して直に火を起した。蕃人等は常に山行には淨火を用ふとは聞いてゐたが、見るは今始めてである。表新高に比して絶えて登る人なき裏新高の難路は全く難路には相違ないが、眞の新高登山の快味はこの路に存するのではないかと格別に興味深く感じた。

此地點から上は既に檜の純林は絶えて梅の純林となり、岩根にはドウダンやミヤマツツジなどを散見する。霧の間を縫うて二千尺を登り、又之れを下りて前面の尾根に取り付く。尾根傳ひでないので實に苦しい。幾多のガレを見るやうになると愈々山らしい感じが出る、山側を踏みしめ、脚下遙に楠仔仙溪の細く白く斷續するを眺め、汗をせぼぼりて鹿林山の一角に辿り付いた。標高九千百尺の鞍部で、一面の草地と松樹を散見する工合は、内地の高山と異つてゐる。小憩の後出發。天候次第に險惡

となり、逆風山膚を吹き、石を飛ばして物すごい。されど雨なきを幸ひ急ぎに急ぎて山稜を前進する。裏新高登山路としては、阿里山から此の道程を選ぶのが最も近いのではあるが、この悪路といふより寧ろ道なき山側をへつりつゝ攀ち登る困難は容易なことではない。三十分も進むと左方の一大老樹に向つて蕃人等は祈念を凝らした。聞けば過ぐる年の秋ララチ蕃社の同族、此地に出獵して、アリマンシキムの強蕃に害せられ、其屍を葬つたのだといふ。一株のミヤマツツジの残花色あせてさびしげに打ちふるへるも哀に覺えて、思はずも合掌した。

午後二時四十分鹿林山に達した。行く手にはタータカの鞍部を距て、標高一萬七百尺の前山が黒々と聳えてゐる。楠仔仙溪の源頭に於ける第二日目の露營地や何處と望見するも、山又山に遮られて容易に行けそうにもない。霧の往來は次第に激しく、横なぐりに頬を打つて小雨の様である。昨年臺南州探検家一行六十餘名の露營した大竹山(標高九千四百尺)の鞍部に到ると、始めて岩蔭に珍らしくも残雪の一塊を發見した。蕃人等は争つて渴を醫したが私は兩中島君に之れを口にせぬやうに注意した。小憩中天氣は益悪くなる一方なので、此處に露營しやうとしたが、未だ早いからせめてタータカ鞍部までと云ふ言葉に引かされて、東埔山(九千二百六十九尺)の山側を下り、タータカに向つたのが不覺であつた。暫く行くと蠶豆大の霰が降り出して四邊は忽ち暗黒となつた。其中一陣の風と共に今度は豪雨が渦いで來た。互に聲をはげまして岩蔭に避けてゐると紫電一閃。雷鳴大に起り、山上の平和は全く掻き亂されて了つた。私は幾度か山雨に惱まされ、殊に一昨年 of 立山で遭つた雷雨は一生の中で最も恐怖すべきものと思つてゐたが、これは又何とも例へ様がない。初めは只茫然自失してゐたものの、不圖氣が付いて他の者を見ると皆等しく地面に伏して頭を岩間に埋めてゐる、私も亦同じく半身を岩間に入れてゐた。然しこれではいけぬと思つたので直に猛雨を冒して左側の澤に下るやうに命じた。二百坪あまりの草地は全く一面の沼澤地と化して濁流が流れてゐた、夫を横斷して岩を攀ぢなが

ら三百尺も下ると木の枯林に抱き込まれた。前面に一巨巖がある、恰好の避難所らしいので、其の西側に廻ると、だしぬけに大きな牡鹿と仔鹿二頭續いて羚羊が驚いて逃げ出した。向ふも驚いたらうが今の場合私等も少なからずびっくりさせられた。狩好きの蕃人も野獸には眼もくれず巖を登つて向ふ側に廻つた。何だか洞でもあるらしいので、試に草を分けて覗いて見ると果して想像の通りである。喜んで中島君を呼び、二人の蕃人に入洞を命じた所が野田巡査は之を制し、直に銃をこれに向けて轟然一發を放つた。其の用心の程誠に感嘆の外はない。さて洞内から呼ぶ蕃人の聲に安心して其中に入り一同もほつとする。晴間を待てども風雨収まらず、寒さはじり／＼と迫つて来る。いつか雨は復霰と變つてゐる、夫を見ると寒さが一層加はつたやうに感じた。

蕃人は流石に慣れたもので直に枯木を集め燃した。この荒れでは前進も出来ない。こゝに野營と決し直に準備を命ず。蕃人は喜んで荷を解き枯木を集め、私等は洞内の岩石を排して之が整理にため、野田巡査は銃を持って警戒に任じた。山獵に出た他蕃社の者が避難して来るかも知れぬ、すると争鬭を惹起する恐があるからである。この時前面の懸崖に白龍の如き二條の瀑布が出現した、十分前までは雲に掩はれてゐた岩壁も、こゝに九天より落下する二大銀河を現出して、一躍直下一千餘尺の山側を深谷に投ずるのである。實に壯觀といふよりも寧ろ凄い位である。酒に元氣をつけた蕃人は火を熾にして炊事をいそいだ。午後五時四十分、氣温四十六度。間もなく霰は止んだ。

罐詰を開き蕃人の心盡しの温い飯に舌鼓を打ち、煙たい洞穴の中で共に語り合つた、通譯は野田巡査である、酒に酔うた赤黒い顔に笑を浮べながら、蕃人は私等の新高登山のいはれを聞いた。バトクオンは彼等の神山である、今は昔、彼等の祖先に二男あり、弓を携えて共に新高山に登り、こゝに二人は弓を兩斷して形見となし、東西に別れた。其の一人は海を東に越えて日本人の祖となり、他の一人は西へ平地に下りてララチ社の祖となる。それで先生とは同族であり兄弟である。今度海を

越えて遙に來るは必ず我等の味方となりて怨ある支那人をうたん爲めの祈念であらう、既に今日かく氷雨や雷神の荒れたのは、山神が先生を迎ふる吉兆である。自分も先生と生死を賭して戦ひたいなどと話した。脱線もこうなると愛嬌がある。雷雨は彼等の戦闘に際し英傑の出現を示す前兆とされてゐる、私も亦岩窟王を氣取つて彼等と昔を語り今を談じ、獸骨の燃え盡んとするを知らなかつた。蕃人は私の乞ふ儘に戦捷の蕃歌を高らかに歌つて興を添えた。

幾時過ぎたか知らぬが、寒さに眼ざめて岩間から外を望むと雨は止まない、岩窟の夜の長さには閉口した。他の人々は快い夢路を辿つてゐる。遠く近く岩に激する飛瀑の音が耳に入る。眠れないまゝに消えんとする焚火をまもりつゝ早く夜の明けよかしと願ひながらいつかまどろむ。

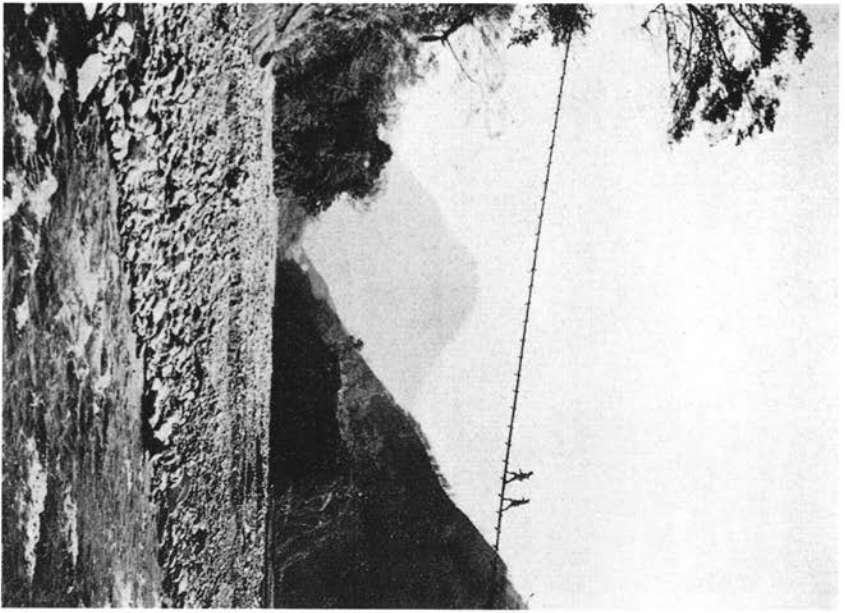
コツ／＼と音する啄木鳥にさまされて一同を起し、朝食の準備をなした。顔も洗はず、一夜中煙にいぶされた黄黒い面を見合せて苦笑する。前進して楠仔仙溪畔の第二日目の野營地に行くことは、昨日來の豪雨に増水した谷の徒渉があるので、不可能であらうと思つて野田巡查と蕃人に相談した所、蕃人等はこのまゝ前進するは墓場に行くも同じだと答へた。運よく溪畔にたどりつけても、西山の前面に横はるタータカの深谷二千五百尺の密林の登りは、晴天の日でもぐしよぬれとなるに、この雨に加へて山びると蟻に襲來されては何人行くとも命はないと顔をしかめる。そこで地圖を案じて一先づ沙里仙溪に下り、トンポに避難し、そして更に千古の大森林を北山の尾根に向ふ事にしようとした。時に五月十四日の午前四時二十分で、氣温は洞内六十二度、洞外四十四度であつた。

沙里仙溪を下る

午前六時一切の準備を終り野田巡查を先頭として野營地を出發し、全く未知の沙里仙溪に下る。沙里仙溪は新高山の西北部から發源し、東北に流れ、トンポ附近にて陳有蘭溪に合流するもので、其の



山に入る時の空欄著人の服装



東埔社前の纜橋(水面上二百尺長百三十五間)

流域は千古の大森林である。これと一山脈を間にして平行して流れる和社溪は既に探査されたが、沙里仙溪のみは未知の溪谷として取り残され、殊に注意を拂はられてゐる深谷である。蕃人の内で一人だけが會て數年前其の西面の溪畔をへつてウブナルの蕃社まで行つたことがあるので稍安心される。豪雨の爲に盆地はすべて湖水化し、懸崖の飛瀑は實に絶景である。道を左に取り、東埔山側より下る事千尺あまり、萌えたばかりの柔かい草原には肥えたる蕨の群生を見た。雨天を喜んでか所々に鶏の如き鳥が二三羽づゝゐるのが目を惹く、野田巡查がこれこそ新高名物のミカドキジであると教へて呉れる。私等は足を止めて仔細に之を見學した。鳥の方でも私等が近づいてもさまで驚かない。羽毛はそれ程美しくはないが學界に珍重される動物であるから無理と知りつゝ、雨中撮影したが、果してこれは失敗に終つた。標本に一羽ほしいと思つたけれども、蕃人達は昨日からの天候と今日の前途を思つてか鳥には目もくれず、且つ山行の門出には決して鳥類を捕らぬ習慣であると聞いたので、強ひて之を捕獲せしめて其氣嫌を損ふもよくない事と思ひ潔く斷念した。石の多い焼け林から梅の森林を過ぎると忽ち前面に驚くべき深谷が現れる、急峻言語に絶すといふ有様で絶対に降れない。右方の切り立つたやうな尾根から谷へかけての大森林の見事さ、スク／＼と生茂る巨木の梢は手を差し延べると届かんばかりで、梅の純林らしく、サルオガセの長さ三尺に餘るものが老女の亂れ髪のやうに枝から垂れ、雨に濡れて青白く不氣味に光つてゐる。こんな密林に入つて果して無事に通過し得るであらうか。この森林と峻嶮な尾根とは、臺灣山岳の特色であらねばなるまい。

ひたすら先導の蕃人に蹤いて、巨木と巨木の間を縫ひながら急坂を下つた。水鹿がガラ／＼と音を立てつゝ、遙の木の間を走つて行く。下る一方かといへばさうではなく、またうんざりする程登つたりする、行けども／＼梅の純林である。脚下の腐葉は數尺の厚さに積つて、杖をさすと、フワリとして一種の瓦斯を發散する。闊葉樹が出て來る頃には樹枝に蔓性の植物がからまつてゐるのを見て、餘程

下つた事を知つた。モチノ樹などがあり、芭蕉蘭が思ふさま葉を開いて繁茂してゐる、名も知らぬ蔓性木本と毒々しい花の香とが愈多くなつた。野田巡查が一株の蘭を手にして来る、見れば珍らしい胡蝶蘭の一種で、臺北で見たものより數倍の花をつけてゐた。都會では高價であらうとも、こゝでは一時の眼を喜ばすに止まつてゐる。足首がいた痒いので靴下を脱いで見ると血でぬら／＼してゐる。首筋や腋の下などが急にむづかゆくなる、改めるとおどろいた、夏グミのやうにふくれた山ビルが附着してゐる、數匹を捕えていま／＼しさに樹に打ちつけてやつた。

然し山ビルは蕃人には一匹もつかぬ、不思議である。兩中島君もしきりに苦に病んでゐる、アンモニヤ水で消毒したりなどして三十分ばかり休憩した、午前九時十分。衣服は全く濡れてぐし／＼である。私は其間に四邊を物色して、三寸大の蛾と二株の胡蝶蘭を得た。しばし雨が小歇みとなり、下方遙に谷川の音らしきを聞き、溪畔に近づいたなと思ふ。温き茶を呑み道明寺を食し中島君を勵まして出發する。幾度か轉んだり迂つたりして二三の尾根を越え、始めて小流を見た。前方に茅で葺いた小屋がある、蕃人の造つた獵小屋であつた。一同喜び勇んで倒木を傳つて下つた。更に一つの尾根を登つて前面の谷を見ると、林相全く一變して、これからは巨大な楠と雑木の林となり、下草は丈餘の雜草である。蔓の類も皆巨大なるもののみであるから、まるで大蛇のやうである。芭蕉蘭や胡蝶蘭等いよ／＼多く、時々蝙蝠のやうなものがスウツと樹下を飛ぶのでよく見るとそれは蝙蝠ではなくて、ムササビの巨大なものであつた。蔓にすがりながら雜草の中を二百尺ばかり下つて清澄な水が靜かに流れてゐる澤に出た。倒木を傳つて渡つた向ふ岸には、形ばかりの小屋の跡がある、又一休みした。蕃人に聞くとトンポはすぐ近い、向ふの山を一廻りすればトンポであると云ふ。私は不思議でならなかつた、未だ沙里仙溪にも出ぬのにトンポが近いとは妙だ。少し不安になつて地圖を案じたがさつぱり分らない。取越苦勞をしても仕方がないからすべては蕃人のいひなり次第だ。足下には鹿の角が堆く

積んである、蕃人の獵場で彼等が山神への供物だといふ。其中からそつと一本を頂戴して發足する。ブヌ族の蕃人が出獵する區域まで下つたのであるから大丈夫との安心と、三四時間の森林通過とで稍疲勞を感じた。又しても山ビルの襲撃に惱まされて、シャツは汗と雨と血でぐしよ濡れである。二つ許り尾根を越したがトンボは更に見えない。蕃人に聞くとあの山の向ふと指されて苦笑する許りである。仕方がない、遮二無二に進むばかりだ。とかくする中に脚下に岩に激する溪水の轟音を耳にしたので、元氣を鼓舞して一氣に下ると岩に激する奔湍が眼に入る。綱をたよりに河原に下つた。探しに探した沙里仙溪畔に出たのである。衣服を脱いで血まみれの體を洗ひ、メンソラを塗りなどして、飽くまで冷い水を飲んだ。地圖を出して記入しやうとしたが餘り間違つてゐるので中止した。火を起し、鹽鮭を焼きなどして晝食とする、時に午後一時二十分、トンボ山側の岩窟を出發してから正に七時間餘を経過してゐる。氣温七十一度。太陽が雨雲に映つて溪の空に虹が現れる。トンボ社までは未だ中々の道程である事を知つてがっかりして了つた。蕃人は只あの山、あの山と云ふが、何れも同じやうな山容であるから全くあてにならぬ。しかし目的の溪畔に出られた事は全く幸であつた、これに沿つて下りさへすれば何日目かには必ずトンボに出られるから安心である。

午後二時十分、一同を促して發足する。これからは、溪傳ひに下ることに決心し、瀑をへつることは勿論、場合によりては泳いで渡ることも念頭に置いて下つて行くと、次第に溪谷は開け河幅は増し水勢は急となる、されど蕃人はなれたもので、荷物を差し上げて水を涉り、岩をへつるにも猿のやうに身輕である。二十餘度の徒渉を繰返した後、一大飛瀑にぶつかつた。傍の岩上に積石がしてある、これはブヌ族の道しるべであるとのことで、蕃人も最早安心であると喜んだ。石を積むことは彼等に取りて唯一の道標であつて、これを辿れば決して迷ふことはないとの事に私等も全く安心した。瀑を右に避けて密林に入り更に溪畔に出やうとする瞬間、銃聲一發轟然として谷にこだました。間髪を入

れず野田巡查先づハタと地に伏す、私等も無意識に雜草の中に伏して固唾を飲んだ。ソツと頭を上げて前方を窺ひ見ると、大木を小楯に長髪の壯漢が二人此方を凝視してゐる。野田巡查蕃語にて何やら二言三言高聲に叫び、携へたる日の丸の旗を打振ると、直に前方からも答があつた。そこで野田巡查は雜草を押分けて岸に出る、他の蕃人は皆荷を投げ出し、銃を擬して進んだ、私等は事の成行如何にと意氣地なくも震へながら見て居る。一言二言野田巡查が叱り飛ばしたかと思ふと續いて笑聲が起つた、ほつと安心の胸撫でおろして立ち上り、近付いて見ると二壯漢の一人は銃を手にして血の滴る二頭の猿の肩に懸け、一人は弓矢を手挟みつゝ私等に一禮した。仁丹を與へると喜んで口にし何事か野田巡查に語つてゐる。聞けば私等一行を誤つて他の蕃社の者が襲撃し來りしものと思ひ發砲したのであるといふ。幸に楯が邪魔をした爲に百發百中である筈の彈を免れた野田巡查の幸運を祝し、ウブナル蕃社への導者を得たのを喜び、一行十人談笑しながら溪を下つた。前面の岩山が雨に崩壊して、黒泥の瀧を懸ける、今まで清澄であつた河水は、見る間に濁流と化して了つた。臺灣の河川が何れも濁水である理由が成程とうなづかれる。此の新崩壊地を如何にして越したのか、濁水は刻々に増加するので寸時も猶豫はならぬ。ウブナル蕃人は手製の葉巻煙草をくゆらして、誇り顔にこの壯觀(?)を指示して居る。私等は全く氣が氣でない。野田巡查を介して何所を越すのかと聞くと、やをら身を起してにやにや笑ひながら、左方の懸崖を攀ぢて綱を下げてくれたので、容易に左岸の安全地帯に達することを得た。足の早い蕃人に後れまいと汗を流しつゝ、ひた下りに下つて一の大高臺に着き、後に轟々たる山崩の音を聞きながらこの臺地を下つた。

元來新高山系の岩質は粘板岩なので其の風化作用に加へて急激の出水の爲に大崩落をなし、次第に山形を壊しつゝ常に河水を濁してゐる。見下せば全く濁濁した溪流は鉛色で、所々に例の黒瀧を眺め、轟音と共に砂礫を飛ばす壯觀に魂を奪はれ、午後一時半雜草の中の路跡を蛇を恐れながら下つた。樟

腦を製造した跡がある、巨大な樟樹の殘骸や土で築いた蒸溜場など、よほど年數を経たものらしい、いよ／＼人里の近いことを思つてほつとした。

忽ち遙か下方に犬の吠聲が聞える、先導の蕃人が何やら之に向つて叫ぶと、暫くして三人の壯漢が急ぎ足でやつて来る、手に／＼弓矢を携へてゐる、野田巡查が手まねで話す、只一重の阿里山脈を越えたと既にブヌン族とツウオ族とは言語が全く通じない。私は交通の不便と従つて臺灣の深山の跋涉が如何に困難であるかをしみてゝと感じた、全くのところこの大きいとはいへぬ島ながら高山國の名に背かず一萬尺を抜く四十七八座の高峯があつて、其大部分が未だ記録ともなきは、嘗に其の山や谷の深いのと測り知られぬ大森林との爲ばかりではなく、實に此の厄介至極な蕃人が未だに深谷の間に住して、殺伐な原始生活をなしてゐることに歸因するものであるといへる。しかし此の純な原始人共は又此の臺東山脈の峰や谷の擁護者である、麓に千古の處女林を擁した人跡未到の山が其故に残つてゐる、私は彼等蕃人に一種の尊敬と感謝の觀念をさへ生じた程、裏新高の山々に心酔してしまつたのである。

三人の壯漢は私に對して手を頭に擧げたので、私も其の敬意である事を知り、手を擧げて答禮した。次で兩中島君へもいと眞面目に敬禮した。何等の飾もなく赤裸々であるのがたまらなく私を喜ばした、私は荷物の中からタオルを出して初見參の贈物にすると、非常に喜んで早速疊んで鹿皮の前袋に入れ、勇んで先登に立つた、時に午後五時二分前で、雨は止んだが四面は薄霧の往來が激しい。一行十三人、手まね口まねで話しながら下流へと下る。間もなく二個のスレート葺の小屋が樟の大樹の下にある岡に出た、愈々ウブナル蕃社の上方にたどりついたのである、先導の蕃人の叫聲と犬の吠える聲とに蕃童蕃婦達が集つて來た。蕃人は皆徒足である、そして鹿皮、熊皮、野羊の皮などをまとつてゐる外一片の布切れをもつけてをらない、殊に二三の蕃婦は只だ前面を布で掩ふてゐるのみであつ

た。小兒が二人弓を持つてゐたので私は近寄つて仁丹二三粒をポケットから出して與へ、食べるやうに手まねで教へると小兒は直に口に入れて其味に驚いたらしく、母親らしい蕃婦に何やら口早に語つた。すると我もくくと大人共まで近寄つて來る、私は仁丹を振舞つてやつた。先の蕃人はタオルを出して誇らしげに見せてゐる、ララチ社の四人の蕃人も親しげに煙草をもらつて休んでゐる、小兒好きな私の僻が斯る所で意外な好結果をもたらして和氣霽々といつた形になつたのである。崖下から四五人の蕃人が上つて來た。私を醫者とでも思つたか、腹をなでて何やら訴へるが野田巡查にも一向に言葉が通じない、私は思切つて胃散を少し出して與へた、兩中島君はにや／＼笑つてゐた。

次第に夕暗が近づいて來る、前途を急ぐ爲に果しない蕃人との應接を切り上げて、地圖に此の小屋の位置を記入し、崖を降りて又河原に出た、蔓と樹との棧道を渡り蕃人等が指さして、トンボ、トンボといふ方向をたよりに下つた、私は何の狐疑するさまも見せず途を教へる純な蕃人を思ひ、其の原始的の生活と何等の統御なさとを考へ、内地のせち辛さを比べなどして、冷氣がひし／＼とせまる沙里仙溪の本流に沿うて急いだ、數十丁にして又三個のスレート小屋を見る、老若數人の蕃人は先導の蕃人等と見知り越してもあるか、何事か高らかに叫んで私の前で手を差し延べる、残り少なくなつた仁丹を出して與へた、時にララチ蕃人が急に前面の山をさして、

トンボ：：へ、トンボ：：へ

と云ふ、又かと思つてゐると野田巡查も、私にあの山脚を廻ればトンボ社であると夕霧立ち込めてゐる深谷を指さした、目測三十分位の距離である。疲れに疲れた一行も急に元氣が出た。紅熟した李を大きな草の葉に一ぱい入れて蕃婦が持つて來る、其の心盡しを謝しつゝ、野獸の白頭骨をアイヌのやうに樹枝にさして小屋の周圍に立てゝゐる所を通り過ぎると、忽ち數十丈の斷崖上に出る、蔓の梯子を傳つて河原に下つた。蕃社と蕃社との境界線には必ずかういふ所がある。そこには逆茂木をしつらへ

て第一の關門としてあるのである。嚮導の蕃人等は名残り惜しげに此所で別れた。皆手を舉げて一齊に叫聲を上げる、谷より谷にこだまして勇ましい。河原は次第に廣く、振り返ると見上げる崖上には尙蕃人等が見送つてゐた、濁水は急激であるが、谷の有様が人里の近いことを示してゐるので安心した。蔓橋を渡り焼畑を過ぎ、斜面にアカザ、芋、粟などを混植した、そして煙草の自生せる畑を通り抜け、前面の茅戸の高地を下り更に坂を上りつめると、一群の部落が現れて夕暗に白く炊煙が上つてゐる、正面の小高い所に三四の瓦葺の家屋は、今朝からあこがれてゐたトンボ駐在所である。群犬の吠聲や蕃人のどよめきはいふ迄もない。蕃童が走り出てこの方角違ひの道から出て來た者共を珍らしげに見てゐる。野田巡查は蕃人に命じて山に向けて一斉射撃をさせた。遠望すると駐在所前にも二三の人影がざはめいてゐる、雨に濡れた橋板が氣味悪くちてゐる長さ百十間餘の鐵線橋を渡つた。中島君は疲労と錯覺とで、此の深谷の物すごい鐵線橋の中央で立往生して了つた、一度に二人以上渡ることとは危険とされてゐる橋なので、實に困つた、すると勇敢なラチ蕃人の一人が漸く辿りついて手を引き／＼渡り終へたのでほつとした、時に午後七時二十分である。前後十數時間の沙里仙溪の下りに全く疲れ切つた一行はトンボ駐在所の椽に腰を下してしばらくは安心と共に全く失神した様で、靴の紐をとく事も嫌になつて了つた、猪瀬警部夫人の心盡しの温かい茶の一杯にやゝ人心地が出て重い荷を下した。駐在所では阿里山と新高郡司とからの電話で、私等が必ず和社溪を下るであらう、此の荒天では或は一昨年「合歡山の遭難」の二の舞をやるかも知れぬから、明日の天氣次第では捜査隊を出す事になつてゐたので、警部は目下ナマカバン駐在所へ打合せに下つてゐるとの事を聞いて、意外の荒天であつた事を里に下つて知つたのであつたが、私はタータカ鞍部からあの黒い前山をつい眼の前に見ながら引返した今朝の口惜しさが頭にこびりついて残念で仕方がなかつた。兩中島君はと見れば今朝よりの行路の難と目まぐるしい出來事とに神経を惱ました上に、全く疲れただでぐつたりとなつてゐる。

蕃人は蕃人宿泊所へ、私等四人は駐在所へ泊ることになった。晴天ならば北山へ向つて出發するときにきめた。氣温六十五度。旅装を解いて快く溢れ流れる温泉に浸ると、苦痛を忘れて同時に空腹を感じ出した。一浴の後夫人の手厚きもてなしに満腹して、兩中島君は採取植物を整理し、野田巡查は駐在所へ電話で報告に忙しい。私は地圖を案じて明日の天候の恢復を祈つた。本日の行程九里弱。降下すること四千尺。夫人は無事下山せる事を天祐であると喜んでくれた。私等の通過した沙里仙溪は年來探査の計畫はあるが未開の地で、蕃人の數とても知れてをらぬウブナル奥蕃であつたそうである。それを思ふと最初の岩蔭の發砲といひ、小屋附近の弓矢を手にした三人の壯漢といひ、そごろに頸筋の寒さを思ゆる事のみであつた。

こゝ新高郡トンボ社は表新高登山道路の中繼所であつて、清澄玉の如き炭酸泉が湧出し、山氣身にしむ避暑の好適地である。背後には郡大の秀峯高く聳え、陣有蘭溪と沙里仙溪との合流點附近は、木曾の峡谷の數倍の雄大さを示してゐる。半空に懸る鐵線橋は蜿蜒として赤褐の山腹を縫へる登山道路に連り、西方一帶の峯巒相重なるあたりは阿里山の密林である。想ふに此の仙境は他日必ず遊子の推賞する所となるであらう。

東埔より八通關まで

十五日。未明に星の輝くのを蚊帳の中から見ではね起きた。昨日の疲勞で他の三人は容易に起きぬ。屋外は朝霧立ちこめた乳白の中に、トンボ山は昨日の荒れを知らぬ顔に青黒く半天に聳えてゐる、新高の群山は少しも見えぬ、只溪流のさわやかな音が脚下千尺の深さから聞えて来る。温泉に浴しながら本日の行程を思ふ。明け放れた空はからりと晴れて、全くの日本晴れである。兩中島君や野田巡查、及び昨夜電話によりて夜行歸宅した猪瀬警部の諸氏と夫人のすゝむる茶をすゝりながら相談



(左)山北高新と(右)山主高新るた見りよ山林鹿



山南高新と壁岩の近附上頂高新
影撮氏夫義岡今

の結果、萬一の事なきやう北山の登山口までは表新高路を進む事とした。一切の準備と米の補給とをなし午前六時半トンボ社を出發する。路は直ちにラクラクの溪谷に沿うて、斷崖上に造られた二尺幅の棧道をたどるのである、即ち最も容易であると聞いてゐた表新高登山路中の難所であるといふ。有名なるラクラクの大瀑布はラクラク駐在所の下方にある。瀑の側で一息入れて九十九曲の惡路を辿り、崖崩れを氣にしながら、午前八時ラクラク駐在所に着いた。氣温六十八度。更に一里十丁を一氣に登つて、十時半に標高六千五百尺の對關駐在所に達した。未だ晝食には早いけれども空腹のまゝに食事した。主婦の心盡しの粟餅に舌鼓をうち、登り來つた難路の工事の模様を所員から聞かされて、警官諸君の苦心になる開鑿の跡を遙に見下しながら感謝の念に心は一杯になつた。況んや此の蕃界の奥深く夫君と共に暮す駐在所の主婦の生活は並大抵ではない。主人の巡視中は小兒と共に留守しなければならぬ。庭といへば猫額大の地あるのみで、一步をあやまれば千仞の深谷に陥る危険がある。語るに友もないことゝて遠來の内地人の懐しさに、さまざまのことを問ひ尋ねられたのも無理はない。思はずも時を過して、陳有蘭溪の源頭にある觀高に着いたのは午後一時四十分であつた、海拔高距は約八千尺。山側の岩崖にはミヤマキリシマ今を盛りと咲き、イタドリ芽立ち紅く、内地の高山の如き感じがした。對關までは楠、ヅナ、ナラ等の闊葉樹を所々に散見したが、觀高では全くそれを見ず、只溪谷にスクスクと立ちならぶ梅の老樹の梢に午後の陽光が輝いてゐたのみであつた。雲はあたりを罩めて間近き陳有蘭溪の深谷と其右岸の郡大山とを見るのみで、あこがれの新高北山は未だ見えない。午前には快晴でも午後は矢張り曇り勝ちであつた。

颯と吹き來る一陣の山風に、茶をすゝることを止めて右手を見上げると、雲途切れて新高北山の眞黒な山肌が見え出した、蕃人等は接待の菓子をつまむに餘念がない。すると突如として雲は拂ひ除けられ、北山の頂がのしかゝる様に中天に聳える、新高主峯は眞黒な大森林の上に青黛色の姿を一寸見

せたが、直ぐ又隠れてしまつた。東の方郡大溪を壓して屹立するのは一萬二千六百五十尺の雄峯秀姑巒山である、其の左方雲や空ともまがふ臺灣中央山脈の山々が波濤の如く重なる上に、一きは白く輝いてゐる麗峯は、確かに次高山であるらしい、其他の大雪山・小雪山・白姑大山・能高山・合歡山等皆指點することが出来る。臺灣脊稜山脈の大觀を一望の中に收むる絶好の地點、觀高とは何人の名付けたのであらうか實にうまい名であると思つた。

然し私等の目的とする東山・北山は、主峯と同じく一寸姿を見せたのみで、間もなく雲の中に消えて了つた。

此の雄大な眺めに時のたつを忘れるたが、ふと傍の岩間を見ると、青白い柔かな葉を持つたニイタカウスキサウが眼に入る。名も知らぬ紅い花をつけた草はたまらなくゆかしさを感じしめた。氣温六十五度。冬シャツを出して身に着け、三時二十分前に此處を出發した。美しい水の流れてゐる岩の上を踏んで、終に八通關——多年名を聞いてゐた——に來た、此處は秀姑巒山と北山との鞍部で、海拔九千三百七十餘尺、東西横斷道路の頂點に當り、北は郡大溪及び陳有蘭溪と南は老濃溪とを限る分水嶺である、五十餘年前に清の吳光亮始めてこの道を開鑿するや三營千五百の兵を此地に駐め守備に充てたといふことである。斜陽靜かに北山の大密林を照らして肌漸く寒く、更に登ること二百尺にして、前面に一大原野が現れた、八通關二子山の裾野で、中央山脈中唯一の草原地である、駐在所は原の中央にありて周圍に堀を廻らし、鐵條網を張り、機關銃さへ備へ付けてあると聞いた。圓巡查と高橋巡查とが數日前から電話で知つてゐたといふて出迎へられた。旅裝を解いて一風呂浴びたがなか／＼寒い。午後四時十分、氣温五十六度。觀高から寺戸部長も來訪され、松茸とミカドキジのスキ焼に白鹿の滿を引いて快談したが、内地の模様を頻りに聞き質されたのは無理もないと思つた。夕暗にきらめく星影は紺紫の天を飾りて明日の快晴を示してゐる。窓より見上ぐる北山の尾根にはまばらに梅らし

い老樹が望まれ、谷は淡青色に光りて雪溪をなせることが知られた。秀姑巒山は押し黙つて魔物の様につくばつてゐる。本日の行程六里。野田巡査は足を痛めたが、蕃丁も兩中島君も元氣であつた。

新高北山より主山へ

十六日未明、主婦の炊事する音を聞きつゝ、窓から東を望むと、星がきらめいてゐる上天氣の嬉しさに早速起き出た。愈々今日は希望の新高山に第一歩を踏み進めるのであると思ふと身がしまる、八通關の圓巡査も高橋巡査も、又觀高の寺戸部長も、共に同行することになつた。在駐八年の間幾度か東山の登攀を思ひ立つたが、岩崖の恐ろしさに未だ果さず、兎に角行ける處まで行つて見たいといふのである。朝食を終り、警丁一人を加へ、一行十二人犬一頭。準備としては二日間の行糧と銃・彈藥・綱十二本及び其他の器具で、其餘は駐在所に残し置いた。母の老樹より成る千古の森林を縫ひて、なだらかな八通關平を見下しつゝ、北山から東に派出した尾根を汗ばみつゝ登る、空には片雲なく、残雪は仄白く輝き、そよとの風の音もしない。この恵まれたる山幸に六根清淨を唱ふるは獨り中島君のみではなかつた。

やがて第一の雪溪を渡る、深さ二尺餘り、幅約二町長さは十四五丁もあらうか、日本アルプスのそれには比すべくもないが、亞熱帶の雪溪と思へば何だか奇異な感に打たれる。表面はツラをなしてゐる。次で第二第三の小雪溪を渡る頃には、汗ダク／＼で上衣を脱がずには居られなかつた。東天が赤褐色に輝き初めた。三百尺許りの岩崩れの跡に出る、さながら粘板岩の石瀧ともいふ可く、残雪まばらに之に點じてゐる、また一汗流さなければならなかつた。四邊何物も見えず唯前の尾根つゞきに黒く主山と、左方に尖つた東山とをちらと見たのみで、一萬二千四百尺の地點に達して一息入れたのは午前五時十分、更に勇を鼓して石山を乗越すと、ニイタカビヤクシンの群生せるガラガラの高峯に著い

た、再び登ること二十分程で、高距一萬二千七百六十尺と測られた北山の頂上に立つことを得た。惜しいことには何時しか罩めた深い朝霧に視界を封じられて、東天の紅に輝くを見たばかりであつた。少時休憩して霧の晴間を待つ、ビスケットをかじり、茶を飲んでみると、静かな谷間で郭公がしきりに鳴いてゐる。霧が霽れさうもないので決意して尾根傳ひに主山へと南進した。粘板岩の破片がザラ／＼してゐる上に、動もするとビヤクシンの小枝に足を取られて危く右方の深谷へ落ちさうになるので、一行十二人互に勵まして進む。蕃人はなれたもので、徒足でザクザクと踏みしめて行く、石楠花やビヤクシンも次第に減じて、岩石の崩落激しくなると、主山の直下に出る。時に午前七時。空腹を感じたので行糧を取り出し、茶を飲みつゝ二十分休憩する。風出で、霧の往來はげしく。主山先づ全容を現し、朝日を受けて肌は赤褐色に染り、數條の雪溪を鑿め、頂上の櫓は蕎麥粒大に見える。ここから尾根傳ひに登ることは前面の斷崖にさえぎられて不可能なので、一旦左に雪溪を傳つて下り、更に右から來る雪溪を登るのである。登り切ると主山岩壁である。黒い岩塊は崩壊し易く、傾斜が急なので呼吸苦しい。休みては登り、登りては休み、今はゆつくり景色を眺めてゐる暇もない。目近く彼方に櫓が見え出したので、心は勇めども足は遅く、雪溪を渡りて更に一大岩塊を一氣に乘越し、十時四十八分。八通關から六時間餘を費して漸く一萬三千七十五尺（測量部の最近の測定に據れば一萬三千三十六尺）の新高山頂に達することを得た。そして一同兩陛下の萬歳を三唱した。

頂上に立つて四顧すると、山麓は未だ密雲に掩はれてゐるが、一萬尺を超えた四十餘の峯は盡く指呼の中にある。遠く次高山を主峯とした大雪山・小雪山から中央山脈の合歡山・能高山を始め、近く東郡大山・秀姑巒山に連る北方の壯觀から眸を轉じて西を望めば、西山・前山・鹿林山・石水山・石山・兒玉山を経て、黒く森林に掩はれた山稜は阿里山の塔山に及び、南を見れば近く南山・南玉山は數條の雪溪をかけて其山姿を誇り、關山・卑南主山より一きは遠く大武山は臺東の天に兀立して獯猛なアリマ

ンシキムの蠻奴を抱擁してゐる様に思はれる。脚下に白く光るは沙里仙溪と楠仔仙溪とで、遠く西の方に長蛇を走らすは陳有闌溪である。寺戸部長や圓巡查は數度の登山をなした人であるが、今日の如き快晴には未だ曾て遭つたことがないと大に喜んだ。

紀念寫眞を撮し、携えて來た兼光の短刀をセメント造りの小社新高神社に奉納し、少し時間は早いけれど晝食とした。これから東山の險を攀ぢんが爲である。

新高東山に登る

新高神社東經二二〇度五七分
北緯二三度二八分に再拜して無事の登山を祈り、社前を辭して東山の登攀に向つた。眼前に雲を突いて眞黒に峙つた岩山の凄さ、岩の色は暗灰色で、所々岩の裂間から土煙を上げてゐるのは、盛に崩壞してゐる爲であらう。其かあらぬか残雪も東山のみは灰色に染つてゐる。新高主山を取り巻く四座の峻峯の中三座は富士山よりも高く、殊に東山は古來より其の山頂を極めし者なしといはれてゐるので、此行是非とも其の絶頂に立ちたいとの希望を抱いてゐた。今其の岩壁を熟視すると、成程人の近づかぬも無理でないとうなづかれる程の險峻さである。然し私の新高登山の眞の目的はこの東山の踏査であつた。總督府でも其の不可能を力説されたが私は動かされなかつた。明治四十年玉水とか云ふ支那人が登つたとの話であるが何等の記録とても残つてゐない。それで後藤總務長官も木下局長も一行に破格の援助を與えられたのである。

午前十一時、出發するに先立つて私は隊伍を次の如く整へた。

第一隊 蕃人出の野田巡查 蕃人二人。第二隊 八通關の圓巡查 蕃人二人。第三隊 寺戸部長中島君及私。最後は中島君及び高橋巡查。圓巡查は鹿兒島出身にて在勤七年の間に幾度か東山登攀を企て、失敗せし人。高橋巡查は信州の出身にて同じく東山に志すこと久しと聞き、特に選抜したのであ

つた。

此方面から東山への登りには二途ある、私は雪溪になれない蕃丁を考慮して、其中の西面鞍部からの道程を選んだ。圓巡査は手を打つて喜び、數年前より自分も亦其の路より外に登る手段はないと考へてゐたと賛成した。即ち主山と一萬二千七百六十八尺の南山との中間から一度谷に下り、迂回して東山との鞍部に出て登るのである。

天氣は晴朗にして微風だにない。第一隊より順次に新高神社の小祠に禮拜して岩の上を降る、私は何だか淋しい思ひで岩蔭に消えて行く人々の後姿を見送つてゐた。寺戸部長の聲に驚いて岩の隙間を手さぐりに降る、それは主山東面の「死の谷」の岩壁に通じてゐる、下ること五百餘尺、小さなビヤクシンの針に足を刺され、三四度小雪溪を渡りて愈々「死の谷」の岩壁に取りつく。息苦しいのと土砂の煙とで喉の渇くこと頻りである。蕃人は私の姿を見て安心したのか、アオーと呼應しながら元氣に降つて行く。かくして主山と東山との皺谷に到着したのは十一時四十分で、更に二つの雪溪を渡り、石楠の花を惜しくも踏みしだきて東山の第一の岩壁下に達することを得た。仰げば東山は主山より見たるとは全く山容を異にし、直立千餘尺、岩は灰色を呈してゐる。岩間に見ゆる苔のやうな青いものは、石楠が地を匍ふて群生してゐるのである。一行の姿に驚いてか三頭の小山羊が岩上を逸走するのが眼に入る。皆黙つて汗をふきながら見送る。雪を食ふことは嚴禁してあるのであるけれども、甚しく渴を覺えるので、携帶せる水筒の既に空になつてゐる以上、どうにも仕方がないので皆貪り食つた。

山羊の演じた餘興に孰れも元氣づいたが、長く休息するは得策でないから、直に第一隊に出發を命じた。野田巡査と蕃丁は私の聲を聞くや無言にて銃をしつかと背負ひ、蕃刀を帯び綱を手際よくさばいて肩に懸け、猿のやうに岩を傳はる、全く上手だ。五十尺ばかりの岩壁を乗り超えた時に、忽ち二

つの大岩塊が火花を散らして落下したので汗も引込むほどに膽を冷した。休憩二十分にして出發。右折して三十分の後に始めて東山の岩壁にしがみ付くことを得た。一行ヨイサ／＼と元氣をつけて、遮二無二岩を攀ぢ、漸くにして第一の岩壁を踰えた。時は午後一時に近い。

緩るりと休んで居る場合でもないので前進を續ける。野田巡査は綱の取扱が旨い、なか／＼合理的である。蕃丁は寧ろ綱をうるさく思つてゐるやうであるが達者に登つて行く。けれども後から續く者には落石が恐ろしくてならぬ。一膝ずり上りては綱をしつかと引き、又一足登りては綱を引くといふ工合にして幾分時か過ぎたが、唯岩を登つてゐるといふ意識の外は殆ど何物をも感知してゐなかつた。それ程夢中になつてゐたのである。

ふと物音に愕いて、と見れば野田巡査が足踏み滑らして將に墜落せんとしてゐる。二人の蕃人の叫聲に續いて、忽ち強い力で腰の綱が引張られ、棒のやうに硬直して私を引下ろさうとする、私は物音を聞いた刹那既にビッケルを傍らの小さなビヤクシンの根元に打込んで必死に支えてゐた。再び起る喜びの叫聲、二人の蕃人は完全に野田巡査を支えてしまつた。脚下三百尺の斷崖を顧みると覺えず慄然とした。

上下十餘人聲を揃えて勵まし合ひ、心を静めて屈せず登つて行く、岩壁に自然に造られた二尺餘の階段状の所でほつと一息する、時計を見ると午後二時を過ぎてゐた。然し最早半以上を登つてゐる。長い間の奮闘に野田巡査は疲勞したので、圓巡査が代つて先登を切る。此邊の岩質は稍堅固の様に思はれたけれども、四百餘尺を攀ぢ上るのは並大抵の骨折ではなかつた。私は頂上を極める快を思ふよりも、早くこの恐ろしい場所から逃れたいと念じてゐた程だつた。それでも努力の甲斐はあつた、午後三時五十二分、遂に頂上に立つことを得た。先着の人々は萬歳々と叫んで帽を振つてゐる、圓巡査は銃口にさした旗を高く掲げて小兒の様に躍つてゐる。

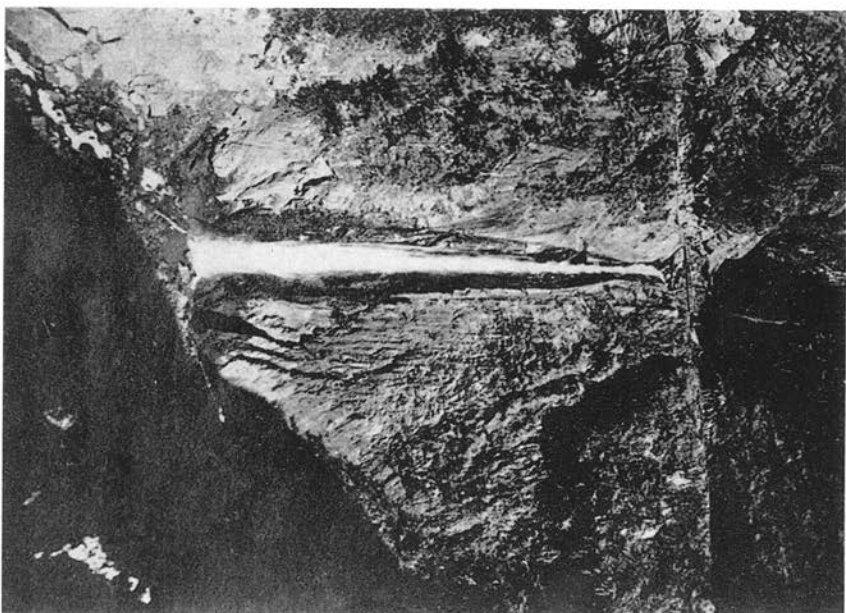
野田巡査は血と土とにまみれた顔で無言のまま、私の手をしつかと握つた、見ればその眼には涙が光つてゐた。蕃人は一發又一發と三發の祝砲を放つ。寺戸部長は帯ぶる所の日本刀を抜いて小供の様に躍り廻る。高橋、兩中島の三君は疲労したのか只黙々と頂上の岩に腰を下して主山の東面を望んでゐた。

一萬二千八百十六尺の東山の頂上——數日前から望見してゐた——に立つて、人間の努力の悔り難いことをつくづくと味つた。私は今まで十餘年の山登りに於て、これ程感激したことは始めてである。頂上は東西の二峰に分れ、東峯は約十五坪西峯は約二十坪の廣さである、其處に圓陣を作つて再び兩陛下の萬歳を三唱した。氣温四十四度。峯頭は岩塊の堆積するのみであるが、然し岩陰には残雪あり、東面の岩間には白花石楠の點在するのを見た。雪は灰色に汚れてゐるけれども花は純白である、思ひ出の爲に一花を手折り、又石を積みて記念とした。午後四時十分である。東峯へも往復した。脚下千尺の斷崖に續く梅の大森林を通して、遙かに表新高登山路が絹絲のもつれを見せてゐる。阿里山は主山の岩壁に隠れて見えない。北山は今朝登つた長い尾根を東に曳いて秀姑巒山と呼應してゐる。

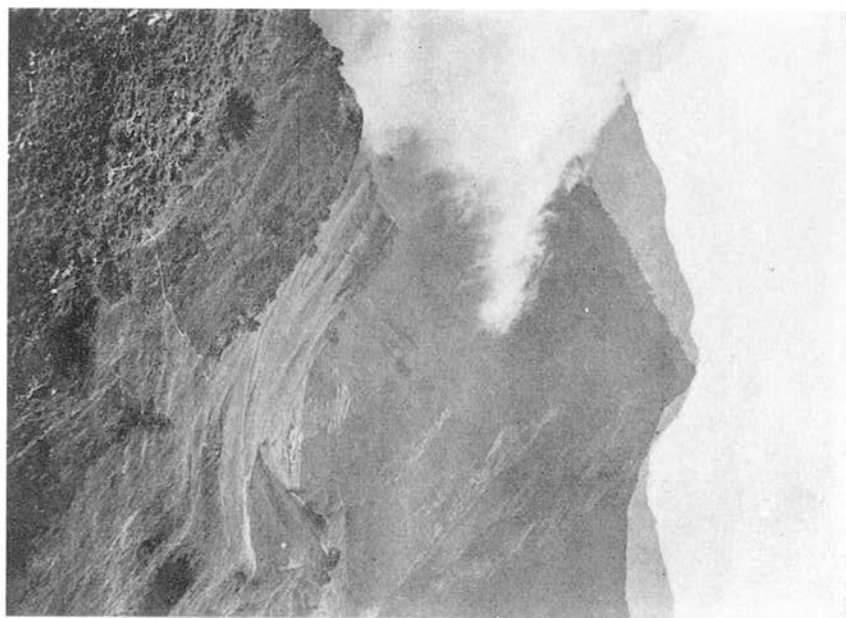
老濃溪に下る

名残は盡さないが歸路も心配であるから、一同に向つて其勞を謝すると共に、残りの行糧に舌鼓を打つてゐる蕃丁等を促して出發することとし、東山の東直下に發源してゐる老濃溪の源頭に下り、其處に野營することに決めた。それには是非とも日のある中に梅の密林を突破する必要があつた。老濃溪の源頭から八通關に行く路は、圓巡査は數度の經驗を有するので安心であつた。其上夜中と雖も三時間を費せば、八通關駐在所に歸ることを得るといふ。

直に荷をまとめて粘板岩の急崖を一氣に二百尺程下つた。歸心矢の如くなれども手強い急崖なので



ラクラクの大瀑（上瀑四百尺餘下瀑六百尺餘）



新高北山より秀姑巒山（手前）及中央山脈を窺む
中央右の人家は八通關駐在所

北田正三氏撮影

油断は出来ない。殊に安心して氣の緩んでゐる時には事故の起り易いものであるから、成る可く崖を避け、バックシンや石楠の多い岩間を下るやうにした。雪溪に出ると蕃人は直に雪で渴を醫やしてゐる。これで岩の危険は無事に越したが、これからの密林の突破が又一困難である、各自の顔を見ると汗と泥とで眞黒である。五時二十分森林帯に入つた、ひやりと冷氣を感じたが日脚は未だ高い。二ツ三ツ尾根を越して下方を見下すと梅の木間に白く泡立つてゐる溪流が眼に入る、程なく水音も聞えて来る。仰げば木の間の空遙かに秀姑巒山が半面は斜陽に照され、他の半面は青暗色にかげりて美しい姿を見せてゐる。氣澄み渡り何となく秋の思ひがする、三十分許り斜に山側をへつりて倒木をくゞりながら茗濃溪に下り立つた。梅の純林の美に酔ひながらひた下りに下つて行くと、忽ち巨大なる水鹿が二頭、意外の闯入者に驚いて飛び出した、美しい角を伏せて邪魔する樹枝を押し分けつゝ走る、一蕃人はすぐ荷を投げ出して跡を逐ふ。忽ち響く一發の銃聲、「しめた」と叫ぶと、側の蕃人が手を振つて「いや、當り彈の音ではない」と云ふ、果して打ち手は空しく歸つて來た。意外の暇つぶしにいよ／＼道を急ぐ。又しても一頭の大羚羊が岩頭に立つて一行の來るを知らぬ顔に背を向けてゐる、然し蕃人は距離が遠いから彈丸が惜しいとて發砲しない。茗濃溪上流の密林は人跡稀にして熊・羚羊・鹿・猿等多く、内地の山に見られない大群に遭ふことがあるといふ。時しも夕陽漸く低く、前面の秀姑巒山又赤褐色に燃えて頗る美觀を呈する。すると下方に瀑の音が聞えて來た、岩頭を廻りて之を左に避け、丈餘の阿里山笹の密生せる藪に入つた、實に不快である、谷川の水音を便りに互に呼び合ひながら下る、漸く溪畔に出ると五丈許りの斷崖である。遙に二子山が望まれる、皆甚しく疲れた。圓巡查は尾根を一つ間違へて意外の近道に出たものだ、あの二子山の裾を通れば八通關まで二時間の行程であるから是非とも強行しようといふ。兎に角向ふ岸に渡らなければならぬので綱で崖を下り、次で急流の徒渉に移つた。圓巡查は足をさらはれて水中に倒れたが、蕃人が飛び込んで救ひ出した、そし

て向ふ岸に上つたので、これ幸と綱を張り渡して一同無事に涉り終つた。それから更に二の溪を横切り、二子山の下の谷に出ると一小徑を發見したのでほつとした。夕暗は次第に迫り來り空には星がまたたき始めた。一行疲勞甚だしく、一時間半を費して二子山の西部の岩頭に立ち、前面に八通關の燈火をなつかしく眺めたのは八時二十分頃であつた。

駐在所に着くと直に東山登攀の成功を通電した。一杯の温かい茶に一同漸く元氣恢復する。折返し州廳から祝電が來たので皆歡聲を擧げる、十八九人から成る八通關駐在所の喜びの夕食は、空塞く牙え渡る上弦の月が傾くまで續いた。

斯くて翌十七日にはナイホンポ、十八日には臺中、十九日には臺北に着き、二十四日に乗船して歸郷した。

次高山（シルヴィヤ山）

鹿 野 忠 雄

大正十五年七月十四日及十五日。同行秋永肇、西尾善夫兩氏。臺灣東海岸方面からヒヤナン鞍部を越えて平岩山（イガンゼン大甲溪上流）に泊り、シカヤウ社からシカヤウ大山を経て次高山（舊名シルヴィヤ山）に登降し、夫より霧社に越えた。此一文は次高山のみの紀行と觀察とである。

參照地圖は臺北市臺灣日日新報社發行の五萬分一蕃地地形圖中、羅東、叭哩、ホンホン山、ヒヤナン社、ゴロコツ社、シルビヤ山、畢麻山、ハツク大山、寄菜主山、霧社、萬大、埔里社等。

山をなす荷物は物々しくも縁側に並べられた。荷物運搬と警戒の爲め行を共にする蕃人との交渉は濟んだ。明日から護衛に銃を携へて附いて呉れる巡查三人は最早夢路に入つたと見える。明日の旅は餘程體力の餘裕を要するのだ。加ふるに僕一人には普通の登山に於ける期待以外に、動植物の採集と寫眞の撮影といふ仕事がある。されど十幾年の憧憬、久戀のシルヴィヤに對する敬虔の情は、此の未知の山に對する智識慾を伴つて、何時の間にか自分の若い胸に波打つて居るのである。

警部の人——蕃地にあること廿幾年、其間蕃人の統御に曲折の艱苦を経験した此の猛者——が次高の險を説き、又其の一旦山神の荒れたる時の慘忍性に就て語り出すのを聞けば、長年の山歩きに自信のある自分の脚も未知の山に對する戰慄を感じて來る。

今し戶外には大風が唸る。木立を鳴らして吹く。あの美しい夕燒の輝いた夕方に、遙か南湖^{ナホ}大山^{ダイサン}の頂^{イガンゼン}に群つた雲の大軍も吹き飛ばされさうな突風が荒れる。此の附近一帶の蕃地の要塞である平岩山は、小高い五千尺の山上にある爲に、風は一入猛威を揮ふ。不安は胸に波打つ。

ともすれば興奮する頭を無理に眠りに誘ひ入れて幾時間か微睡む内、三時の時計は鳴る。咽喉に入らない飯を強いて幾杯か流し込んで、支度をする。草鞋を綿密に結んで居る時、闇を蹴破つて蕃人が來る。お早やうといふ意味の蕃語を云ひながら横構へに縁に座る。暗がりをすかして見ると數は五人だ。彼等の巖丈な體格、流し髪にした頭、入墨のある顔、鋭い眼、其が闇に浮び出てゐるのは警部の人と話して居るからだ。彼等の腰には尺餘の蕃刀も見える。

萬事用意が出来て警戒所の廣場に集る。巡查三人も早い寢床を蹴つて闇の中から銃を携げて來る。其内に蕃人も露營の用意品を背負つてどや／＼現れる。僕等三人、都合十一人である。

天氣は如何？言ひ合はした様に皆天の色に見入る。圓い平岩山の輪郭をかきつて、深い紺黒の地に

百千の星が明滅して、天の無限大の存在を語る。靜かに音もせず星はまた々く。昨日の風で雲はその姿を消したのだ。山、草木、住居、蕃人、あらゆる物が黒い塊として寂に沈む時、僕等のみが時ならぬ沈黙を破る。丁度夜討の前氣分見た様である。

出發となつて皆が並ぶ。午前三時半と云ふのに警戒員一同が見送つて呉れる。警部の人の「では御大切に」の挨拶も、普通の山旅の門出とは違つた或るものを認める様に思つた。

警戒所から急な長い段々を下りて、晝間では脚下に小さく見えるシカヤウ駐在所に向つて、羊腸の道を降りて行く。早朝の膚寒い冷氣と緊張した氣分を感じず。夜間巢穴を出でて横行する恐るべき毒蛇攻撃も、此の緊張の前には左程の注意を呼び起さない。次第に路は我々を谷底に導く。黒い残骸をして蟠る大地の隆起が、惡魔の様に我々の背後前面からそゝり立つ。この威壓的な地の威に對して、天は高貴なる清徹の氣を漂して星の光を降りかける。

かなりの坂を降り、赤榛の林を抜けて、シカヤウの蕃社を過ぎたのは四時半であつた。もう四邊が夜の幽暗から醒めて、今日の光は又もやシルヅイヤの籠を照らすのだ。草葺の丸太小屋の蕃社は未だひっそりして居たが、時ならぬ侵入者に驚いて、蕃人の飼て居る瘦せた小犬がけたましい叫びを擧げる。家並の不秩序な蕃社を抜けて、一寸した坂を登ると、シカヤウの駐在所である。石垣を嚴重に廻らした要塞は、下に位する蕃社の鎮護の様に根を張つて居る。此の石垣を廻らした廣場にも朝の透明な光は流れてゐる。其の中に巡查の人が他の蕃人と共に我々一行を待つて居た。

此處で一行は最後の用意を整へる。これから奥は次高山彙の幽暗の支配する所で人の香さへも嗅げないのである。裏の畑に枝も焼む程實つて居る桃も澤山もぎ取つて荷に加へ、次高の山懷を指して此の駐在所を出發したのは五時半であつた。

遙かに次高の峯をうかゞへば、シカヤウ大山（一一八二三尺）の後に隠れて見えない。シカヤウ大

山こそは早朝の晴空に雄大な容姿をくつきりと浮び出して、朝の黙禱を續けて居る。あの六十度(?)もある様な急な圓みを帯びた斜面、何のとり着き所もない様な大地の塊、あの一萬尺以上の峯頭までひた登りに登るのかと思ふと、氣が遠くなる。

日の内に目的の地に着いて露營の支度をすまさうとて、我々は歩一步と足早に運ぶ。其は毎日の様に群り起る寒冷の雲海に閉ぢこめられまいとするにあるからだ。蕃社前の闊葉樹の茂る急な小山を、蕃人の獵の路を辿つて登り、又一層の危さを以て降ると、下にはシカヤウ溪の激流が渦を巻いて流れて居る。此頃はきまつて午後になると山嶺は濃い雲霧の巷となり、太い夕立のたゞく所とさへなる。その山の滴を集めて勢を増して流れ下るとの溪流の水は寒冷其の物である。北緯二十四度の領域に居る占める熱帶の臺灣は、寒帶性魚類の棲息を許さない。然るにこの三千尺の山奥に流れる此の附近一帯の溪流には、鱒の一種が住んで居るのである。我々は昨夜この魚を好奇と美味を感じて食べた。此の鱒及びセイバンゴヒの他には全く魚族の棲息するものはないのである。此珍奇な魚は動物地理學上の興味として、淡水魚類の權威大島正滿博士が此の附近一帯に集喰ふ兎蕃サラマオの名に因んで、サラマオマスと命名された。苟もこの様な低い緯度に寒冷を好む魚類の産する所は世界中にないであらう。

一種の恐怖と非常な決心を以て此の溪を涉り始める。幅は約十間。太い木の枝に十一人つかまつてごうつと押し流さうとする流に逆らひ、寒冷に震へながら一歩々々慎重な踏方をして對岸の淺い砂地に着く。此間非常な困難で、深さ腰に及んだが、乳の下まで浸つた水は立つて居る土を一面の水溜りにしてしまふ。然も水を搾る暇もなく前に越した位の小山を越す。すると溪は再び白い泡を立て、流れて居る。河は彎曲して居るのだ。これからはシカヤウ溪の溪底を傳つてシカヤウ大山のとりつきに達するのである。一方が平な砂地や礫地を露して居るかと思ふと、片方は斷崖である。一方が斷崖なら他方は平である。我々は絶えず徒涉せざるを得ない。我々はこの寒冷に震へ、泡立つ白泡に恐れ、深

い水の色に躊躇しながら進んで行く。兩側の山肌は黒い許りに茂つた森林なので、朝の陰影と相俟つて崖下に淀む淵は黒い。白い礫の重り合ふ河原を歩く時は非常に安慰な気分にする。折から今日の最初の日光に榮えた○○山（蕃名を聞いたが失念した）が其の胸を露はに深呼吸をしてゐる。紫つぼい崖、赤味を帯びた茅戸の山脈、其等は今其懐に入り行く我々に力強い激勵を與へて呉れる。誰の注意からか後を顧ると中央尖山がそゝり立つて居る。早朝の澄み切つた空に尖つた頭を振り上げて、今通つて來た暗い谷の上にツンとすましてゐるのである。

我々は斯くして未だ日光の射し込まない溪底を縫ひながら徒渉する事十三回、シカヤウ大山が蹈み止る事の出来ない急斜をこの谷に落ち込ます稜線のとりつきに達したのである。

水に濕つた草鞋を乾かす暇のある筈もなく直ちに登りに取かゝつた。松の生えた恐しく急なとりつきを一寸登ると、傾斜は少し緩かになり、松も疎らになり、アベマキの大本も點在する。これからは緑の茅戸で、見上げればこの大地の隆起は止る所を知らず上空に登つて行く。息は次第に弾む。遂に問はず語らずに皆は妥協して、傾斜地もかまはずに腰を下してしまふ。其時巡查の人が桃を出して呉れる。少しの餘裕を恢復して我々の前に展開された大きなバナラマに見入る。太陽は既に昇つた。緑の斜面に流れた日光はうらゝかに相反撥して夢幻の發光體となる。一撫での風もない。然し快い適度の温さに幸ひされて、我々は一様に幸福感を抱く。緑の床に咲き出たとりづゝの花——桔梗色の可愛い釣鐘を着けたツリガネニンジン、黄金色の人懐しげなキンポウゲ等——が温さに顔を上氣して今にも笑ひ崩れ様として居る。其ののどかな光景は花模様のヴェイルのカアテンに朝の日光が溶け合つた様である。蝶はこの構圖に入の興を添える。全世界緯度・經度・土地の高低を超越したコスモポリタンのヒメアカタテハ、又、アヲタテハモドキが奔放自由な飛行を續ける。谷は其の響を力強いリズムを以て朝の歓迎に加はる。日光の射し込まない谷合は未だ昏々の眠にあるかの如く黒い扉を閉ざして、

明光に榮えた斜面との對照が素的である。上はと見ればシカヤウ大山の方に當る一峯が朝化粧を濟まし、谷の寢坊を笑ふかの如くに見える。

疲れた肉體よりも急ぐ心が勝つて、遂に其處を立出で、尙も登る。二分位づゝ休む、その度毎に谷は次第に深く堀られ、その音樂は次第に薄れ、遂に陽光と明るい寂莫が四邊を領する。今朝立つて來た平岩山の駐在所は小高い丘陵の上に置物の様に見出される。全く晴れ上つた空は平岩山の上に中央山脈の波濤をくつきりと描き出し、それ等の山々は我々の地點が登れば登る程張り合つて、己が高さ誇るかの如く見える。尙も其の尾根を傳ふ事幾分かの後、とある地點に休息する。

其處には松の木が生えて快い影を投げてゐる。右手は若い緑が割合に緩かな斜面をなして滑つて行く。其の上には〇〇山が最早陽光を全身に浴びて突立つて居る。其の露な山肌、赤味を帯びた懸崖、それが金字塔の如く輝いて居る。その斜面を風に吹き飛ばされる木の葉の様に走り飛ぶ蝶を何かと探ればモンキテフであつた。左手を願れば急な斜面に松の大軍が屯して、颯々と涼風に吹かれて居る。人里遠く離れた山岳の重疊の中に此の松の心聲を聞く時は、郷愁が起らずには居られない。此處からは南湖大山が望見出来る。中央尖山、更に屋根形をしたブシカガ(蕃稱)、畢祿山等が連つて中央山脈の屏風を造つて居るのが判る。

其時松籟は幽かな銀鈴の様に鳴つて、遠い海の波音を思はせてゐた。蕃人はその赤黒い露な肌を日に輝かしながら、愉快げに語り合つてゐる。心持よき彼等の聲音、恰かも文明人の洗練された音聲と同等な爽快を與へるではないか。或者は巡查からもらつた桃を食べて居る。或者は背負つて來た銃を玩ぶ。總てが健康な美しい光景であつた。

此の陶醉の境を惜しくも離れた我々は、更に高きを目指して進んで行つた。道は此處より登る事暫時にして右にそれ、尾根の頂上より稍下を傳ふ。急な斜面に刻まれた路を進む我々は、右手に松の簇

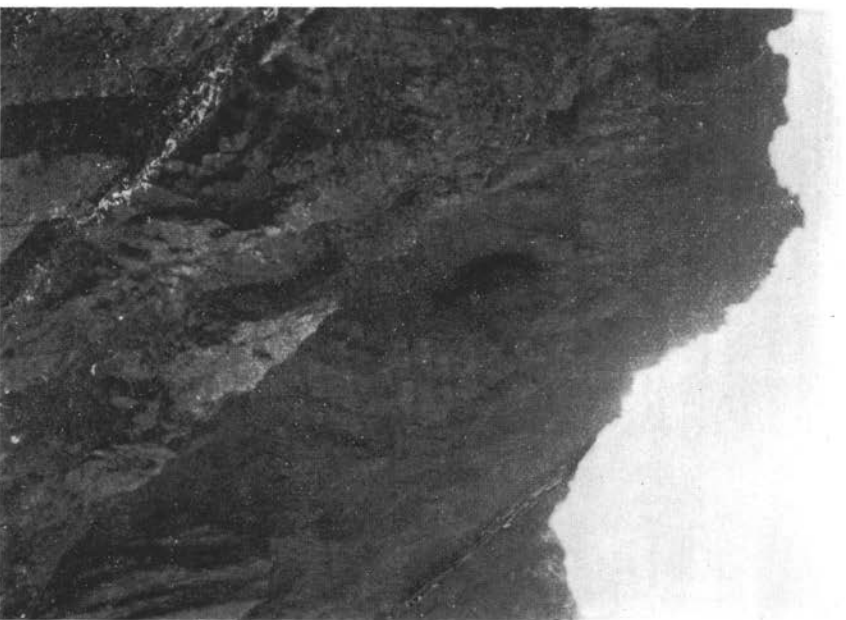
生した深谷を窺き見る。此の路を傳ふ事十數分にして遂に第一の水溜りに達する。

其處はシカヤウ大山が急ななだれを打つて降り來り、一の階段を造つて居る所である。丈の短い茅戸で、廣さも相當あり、大體に於て平である。一方は今窺き見た深谷が刳れ、中央山脈の波濤が見える。他方は大雪山方面の山々が連々と四邊を壓して西走する。見上げればシカヤウ大山が緑の衣を着けて崩れ落ちんとしてゐる。大體八千五百尺の地點と思ふ。時正に午前十時、我々は松影涼しい所に腰を下し、山の色に見入り、松聲を聞き乍ら第一回の辨當を平げる。

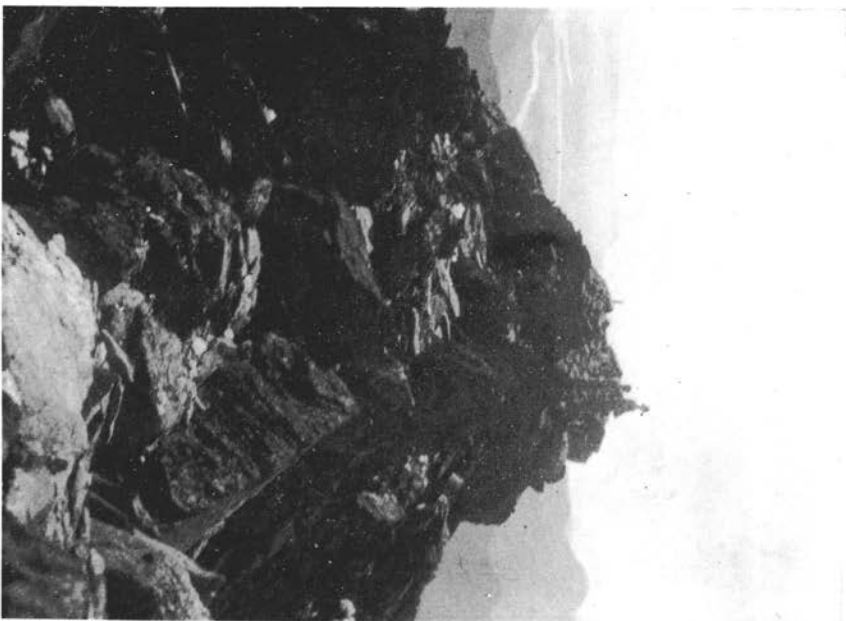
此の松林の傍に略々一坪の沼地性の浅い水溜りがある。水はよくないが、いざといふ時には此處で露營するに良くであらう。中にはマメゲンゴロウの一種 (Agabus) が多數底の泥を濁し乍ら泳ぎ、ヤントの一種 (Aeschna) が此の水溜りに戀々として力強い羽音を響かせて居た。

此の附近で採集した蝶類に次のものがある。ホッポアゲハ、タカムクテフ、モンキテフ、ミドリヘウモン、タイワンミドリシジミ、アリサンキマダラヒカゲ、アサギマダラ、皆高地に發見される種類である。

此處で休息する事幾分かの後、更に高きに登る可くシカヤウ大山の絶頂目がけて出發したのであつた。茅戸の急な斜面を登りにかゝる。滑かな緑の床である。此處でカナヘビの一種を採集する。平地には見られないものである。斜面には松が點在し、下にはツツジの小灌木も見出される。夫は今丁度花を着けて居る。登攀の疲勞と強い日光の直射に、一行は皆喘ぎ出す。蕃人は流石に、重い荷を背負ひ乍らも休む様な事はない。僕は此時つくゞソローの言を思つた。果して吾人は蕃人の強健と文明人の叡智を共有出来ないものかと。我々は右手から走つて來る傾斜に合し、此の尾根から更に上へと登り續ける。茅戸の所々は赤白い山肌を露出し、此に松の落葉が散り敷いて非常に滑り易く、大に我々一行の進行を妨げる。左手の斜面を見ると、急な傾斜は雄大なる弧を描いて下方に落ちて



新高下小屋より頂上に至る間の岩壁



新高主山の頂上

行く。其の短い茅戸に所々に紫色を帯びた岩が露出し、黒い小灌木が點々と斑點を表して居る。

其の大規模な傾斜を幽に通ふ路を汗にひたり乍ら遂に第二の水溜りに着いたのは非常な激闘の後であつた。時計を見ると十一時半を指して居る。後一息でシカヤウ大山の頂上に達すべく、此處で暫時の休息を取る。シカヤウ大山の裾は此處になだらかな廣場を造り、左手に隆起する小隆起との間に細長い長さ十數間幅二間位の水溜りを抱いてゐる。瓢形をして居るので瓢池と呼ぶとの事である（○大橋捨三郎氏によれば此は天ノ池と稱する由）。空は青く輝いて居る。熱帶地に於ける高山の太陽はその強烈な光りを餘す所なく注いで、見る／＼萬物は強光の亂射亂撥に夢幻の中に消えやうとしてゐる。此の氣も狂ふ許りの光の洪水の中に、眼に見えるあらゆるものが活潑に動いて居る様に見える。輝く光線に沐浴する中央山脈の大城壁は、崖でなくて光の殿堂である。

ふと心付けば、前にあれ程澄み切つて居た青空のその奥から白い色の雲が滲み出てゐる。中央山脈の奔放な山波の上に、其の波の飛沫とも覺える白い斷雲が生れ出る。そして是等が非常な速さで擴り出し、相呼び、相應じて、虚空を航して相集り相群る。此の突如とした雲の現出に山は一層その潑刺さを増す。

自然の變化と共に僕の方も急がしかつた。此のまぶしい程の光に満ちた斜面を飛び廻る蝶の影を追ふ。ホッポアゲハは此處一萬尺の高所にもその青藍色の翅を輝かす。黒い見慣れぬ蝶の居るのに氣がついて追ひかけ、遂に網に入れて見ればナガサハジャンメであつた。此の蝶はこれより下には居ない様で、今迄新高山に産するより他記録のない珍種である。傍には先きの水溜りが青い空と附近の山に生えて居る針葉樹林を寫し出し、自分を誘惑する。此の水溜りにはサンセウウツが居る筈なのである。現に此の附近では能高山、立鷹で得られて居る。此の臺灣に於ける動物地理學上面白い動物も、追つて來る時間の爲に斷念しなければならなかつた。我々は早速より以上の勇氣を以て登りにかゝる。

絶頂は眼前にある。急な尾根を一步步運ぶ度に、四邊の山々は次第に其の影を増して、初見參の一萬尺級の高山が現出する。志良節駐在所も認められる。我々は歡喜し、快哉を叫び、應答する暇もなくひた走りに絶頂目がけて登り續ける。左手は黙々として千古の過程を語る森林が黒い許りに茂り、その太い木立の間に次高ノ峯——蕃人の尊崇措かないバポー・ハガイの斷崖——が胸襟を開いて我々一行を歡待する。此に一層の勇氣を得、尾根に咲くミヤマコケリンダウの花に慰められて、午後十二時半遂にシカヤウ大山の絶頂に立つた。

絶頂は茅戸で低い笹が交つて居る。兩側はニヒタカトドマツ、タウヒ等の針葉樹が茂りに茂り、白骨の様な枯木立が幽立して、其の下には倒れた殘骸が相重なり合つて居る。今、遙けくもやつて來た方を振り返ると、只方角を推知し得るのみで、重疊錯綜する山岳の波に没して其の經路を明にしない。後を顧るとシルヴィヤの大懸崖が此處より二千尺の高さを示してそゞり立ち、呼べばオウと應へさうである。今日の行程の露營地まではさう大した登り下りもないと、多少の氣安い氣分に歸つて、残りの辨當を開き、四圍の山々に見入る、靜かな日だ。一萬一千尺の地點にあると云ふ感じも、日本アルプスを見た様な眼で四邊を見れば、起らない。その雄大な山皺の大きなスケールを見ると、その偉大な自然の彫刻の壓迫を感じるとき、又その比較的單調な變化を思ふとき、内地の高山の人懐しげな美並に偉大とは異つた、臺灣高山の長所を始めて了解し得るのだと思つた。山を歩く人の中には、臺灣の山岳を凡山凡水論ずるに足らずと一言で片づけて居るのを見る。その様な人は臺灣の山岳に日本アルプス等の美をそのまゝ求むる人々である。樺太、北海道、秩父等の地味な自然、寂の自然をみつめて來た人々には、必ず臺灣の山岳美を了解する者がある事を信ずる。臺灣の山を輕蔑する人々は全くの山に對する門外漢か、又は偏狹な郷土詩人か、何れかである。此の見捨てられた臺灣の山岳に埋れた美を覺知する事こそ、臺灣の山に登る眞面目な者の務であらねばならぬ。僕は辨當を食ひ終つて

四邊の山々に眺め入る間にその様に思つた。

先きに群り起つた白雲に一片の陰影がほのめくと見る間に、其の暗い蔭は次第にその勢を増して次高山の絶壁指して集る。此處で昨日の次高山を占領した雨雲の姿が腦裡をかすめて過ぎる。早く露營地に着かなければならないと、一行は急ぎ足に其處を立ち出でたのであつた。路は樂な尾根傳ひである。兩側は幽林蔓立、下にはクマザサが簇生して居る。此の平な尾根を傳ふ事暫時の後、尾根は次第に低下して、更に再び滑かな茅戸を登る。左手は矢張り太古より鳥獸の蹂躪に委せ切りの深い森林で、梅も見出される。遂に其の長い斜面を一氣に登つて、可成り遅れた蕃人の來るのを待つ。此の地點は五萬分一地圖上、一一五八四尺の箇所と思ふ。此の山とシカヤウ大山との間は滑かな茅戸で、黒い森林がシカヤウ大山の左手と尾根の右側を被ふて居る。

荷物を背負ふた蕃人は銃を手にして尾根の降り口に愚圖々々して居るのが、小さい乍らも手に取る如く見える。巡查の一人が鹿を見付けたのだと云ふ。胸を躍らし乍ら芝居見物の積りで見て居る中に、蕃人の一人が森林の中に入つて行く。他の一人が銃を構えて待つ。一發の銃聲が四邊の山に反響したと見る間に、第二の銃聲が轟く。鹿狩はどうも失敗に終つたらしい。前から怪しかつた雨雲は益々險惡の度を増して來る。光の殿堂は幽暗の巷と化した。こんな所で雨に遇つた慘さは一通りでないので、蕃人を後に残して一先づ我々六人露營地に向ふ。

路は一一五八四尺の峯の稍下より西側の斜面を傳ふて森林に入る。足數歩を出でない内に森林の嚴肅と沈黙は身を襲ひ、ニヒタカトドマツの荒涼たる幹に懸るサルヲガセは青白くして仙人の髭を思はせ、樺太の凄慘に似た氣分を現出する。その中に路は何時しか尾根上の出でたかの如く、大木の散落轉在して青苔の古りたる上を傳ひ、スグリの棘に辟易し、尾根の右側に沿うて進んで行く。ニヒタカトドマツの純林、その幹の直線の林立、其の間に立ち置めた幽暗の氣は恐ろしい許りに我々を威壓する。

寂とした此の林氣の中を機械的に踏み行く一行の滅入つた氣分は、時ならぬ銃聲に再び我に歸る。と同時に歡聲が上る。僕は直覺的に蕃人の狩獵の成功を感じた。路は急ぐ。倒木を乗り越し、大岩を避けて進んで行く時にも、獵獸の期待は益々加はる。四足を棒に、倒に吊された鹿の體、之を料理して赤い火にかけた時の音と、その香氣、その腿肉の大きな所へ食ひついた時の味覺、さては之を食ひ盡した時の満足までも想像して、獨り今日の成功を心の中で祝したのであつた。路は可なり尾根の右側を傳ふ中に次第に下降する。飄々と風に乗つて走り來る雲の爲に、露營地一帶は將にその灰色に塗られやうとして居る時、前に眺めた次高山の懸崖の一部がニヒタカトドマツの林立の間から恐ろしくも我々一行を壓して立つ。露營地は此の絶壁の下なのである。之に勇氣を得て進む内、遂に大岩の累々とした非常に狭い空澤に降る。少い乍らも水は透明で申分ない。此が○溪(名失念)の水源地なのである。此の空澤を渡つて一寸登ると、絶壁の稍傾いて居る直下に出る。其處は細長い割合に平な空地で、崩れかゝる絶壁が半ば傾いてその一部を被ふて居る。前の坂を一寸降ると水源地、其の近邊にはニヒタカトドマツの大木が天を摩して聳えて居る。(○此の露營地は大橋捨三郎氏によればカケシヨハアガイ、譯して笈河原といふ由)。

荷物を崖下に下し、薪を集めて火を造る。追つて來る寒氣は靜止を許さない。先の暑熱と今の寒冷、その大きな變化に驚き乍ら、大童になつて薪を集める。走り來る雲の小さな分子が松葉の先に宿つて、美しいと思ふ間に、強風に煽られた椴松は髪をおどろに振り亂して、其の形相がすさまじい。蕃人の來るのが遅いので迎ひに行かうかと云ふと、巡查の人が道が判つて居るから今に來ると云ふ。その内に天の灰色の中から白い玉が素敵な勢で無數に落ちて來て、地面の上を轉び廻る。雹なのである。臺灣に渡りてから始めての寒さの表象に、高山の崇高嚴肅に驚く。間もなく愉快な聲を交しながら蕃人がやつて來て荷物を下す。鹿はどうしたと聞くと失敗だと云ふ。先の期待も此處に於て美事に

裏切られる。

冬シャツ二枚に加へて全部の防寒になるものをまとひ、大急ぎで天幕を張る。下にクマザサを切つて敷きつめる。火を盛にする。蕃人はその恐ろしい蕃刀を揮つて薪を造る。皆大童になつて働いた甲斐あつて薪も山と積まれる。未だ二時過ぎと云ふのに、四邊は昏々冥々、平地の六時の暗さである。

天幕の中に入つて飯の支度をする。焚火は一層の烈しさを以て燃やされる。煙に辟易して蕃人の所に行く。彼等も焚火をして飯を炊いて居る。飯と云つても粟である。鐵の鍋に入つた粟をこげつかない様かきまぜてやり乍ら、手眞似で話をしたり菓子をやつたりする。其の内に飯の用意が出来たので、天幕中に入つて今迄の空腹を一氣に恢復すべく、腕によりをかけて食ひ始める。罐詰は開けられる。暖を取るべくウキスキーの栓は切られる。

外には闇が迫つて、背後の崖を傳つて流れる雨水も止んだ様である。天幕内の焚火は一層赤く照り榮える。満腹に満足した皆の顔が赤鬼の様の色づけられる。

毛布の上に横になつて、今日過ぎて來た境域、或は明日の登攀に幸あれかしと祈つて居る内に、蕃人が遊びに來る。イワノミ、シダノミ、ヤウイン、ガイ外二名である。いくら蕃人と云つてもあの岩蔭で焚火では寒いに違ひない。大に同情して、狭い乍らも天幕の中で一夜を明かさせる事にする。彼等に話す間にも芋を持つて來て焼いて呉れたり、消え細る焚火を獨特な吹き方で起して呉れたりして大に役立つ。蕃人の一人がシルキアスピアツムと上の方を指すのを見れば、天幕の大きな破れ目から、鎌の切先よりも鋭い三日月が懸つて居る。空は晴れたのだ。大喜びで外に出る。森々と更ける夜、蟲の音一つ聞えない静寂、耳を凍らす寒氣、紺黒の地に輝く星の透明な光、その夜の帷たばよりも黒い絶壁の威軀、是等を謹嚴な態度で眺めた時、天地の悠久嚴肅に襟を正し、荒涼寂寞必ずしも空虚無意でないと感じたのであつた。振り返つて後を見れば、焚火に明るい天幕が人懐しげに

燈り、自然の懷を借りて存留するか弱い人の姿の如く感ぜられた。間もなく僕も此の幕の中に吸ひ込まれる。

明日は天氣だと云ふ安心と、登攀の原動力たる體力の必要に、一行は希望ある眠に就いたのであつた。

猛烈な寒氣と焚火の暑熱の思出の中に夜は明ける。時計を見ると午前五時である。昨夜四邊を塗りつぶした暗冥は未だ低迷して去らない。朝食をすまし、輕装して直に絶頂指して露營地を出發する。時に五時半。

昨夜水を汲んで來た空澤を傳ふて登る。非常に狭い澤であるが、兩側には大岩が連り、雪解の水が流れ下る跡にも大岩が累々として胸を突く。六月中は此の澤に雪が澤山残つて居ると云ふ。早朝の肌寒い冷氣も、此の急な岩登りをやつて居る内に暖くなり、遂に汗さへも出て來て、四邊は漸く明るくなりて來る。岩角の地にはニヒタカハンシヨウヅル、ニヒタカクリン、グンダイモジズリ等の高山植物がつまじやかに生えて可憐な花を開き、我々一行に一層の山上の期待を大ならしめる。後を顧れば太陽が己に昇らうとし、今日の最初の日光に絶壁はその生地を露し、亭々と千古斧鉞を入れない森林の果しない擴がり、其の頭を淡いヴァーミリオンに染め出す。中央尖山は其の冠を蔷薇色に輝かした空、次第に明けて行く高山の朝、それは美しくも平和な情景であつた。

我々は再び岩登りにかゝる。小鳥も鳴かない静寂に、岩を踏む足音が開拓者の斧の音の如く刻まれる。その足音に聞き入り、夢幻の境を進む内、又、キヨンが居るとの事に足音を忍ばせて行く。蕃人は銃を持つて猿の如く音も立てず追ひ登る。其の内に路は此の空澤を左に分れて、ピヤクシンの太い

大木の林をくゞつて登り出す。下は美しい緑の草が茂り、美しい花も咲き出て居り、スグリの棘が蔓る。此の時輝かしい日光が森の梢を洩れて落ちて来る。晴天の幸福を感謝し乍ら、遂に此の空澤の終りに着く。

絶頂は近づいた。尙もその右手にあるスレートの斜面を登り出す。先のと違つてスレートであるため、ともすれば崩れ出す。胸を突く傾斜の兩側にはハビビヤクシンが匍匐し、又盛りを過ぎたニヒタカシヤクナゲの花が我々一行を迎へる。その坂は長い。激しい努力の後、我々は遂にその終りにへばり着く。頂上は稍右手に、磊々たる岩石にハビビヤクシンの枝をからませて、蕭然として聳え立つ。四邊一面にのさばり茂るハビビヤクシンに腰を据えて、其處此處に咲き誇る高山植物の可憐さに恍惚とする。黄金色のフクトメキンバイ、シルヴァイヤのエーデルワイスなるカハカミウスユキサウ、紫のミヤマコケリンダウ等が、太陽の暖い光線に深呼吸して居る。

絶頂はもう直きである。十幾年の憧憬も今や達せられんとして居るかと思ふと、胸の躍るを禁ずるわけに行かない。縦横無盡に錯綜するビヤクシンの波を泳ぎ、岩角に捉つて苦闘を續ける事暫時、懸崖を攀ぢ登る事幾尺、遂に我々一行は臺灣の雄大な山岳の波が最大飛躍を試みた其の絶頂(一萬二千九百七十二尺)に立つたのであつた。八時稍前の事である。

絶頂は可なり廣く、築山的の圓みを帯びて居る。ハビビヤクシンが所狭きまで生ひ茂り、所々には風雨にさらされた山の肌が露れて居る。

昨日の焼けつくやうな炎暑や、痺らす様な嚴寒の忍耐も無駄でなかつた。自分の體力に鞭打つて、此の山の有する美の感得も、博物學的情熱も、此の頂上を以て始めて満足する。

僕は太陽の輝く寒い此の絶頂に立つて、此の周圍を取巻いて起伏する山脈、其の奔放な波濤のうねりを貪りて見た。風一つない静かな日、太陽の晴れやかに照し出した、悠久そのまゝの天地、熱帶國

に於ける光の境土を、肌寒い冷氣を感じながら眺めた。

蕃人はと見ると、彼等は絶巔の一角に腰を下して快く指呼しながら談笑する。彼等タイヤル族の境域、その同族の分布地たる臺灣北半の山岳は、彼等に遠きそのかみの神話、傳説の想起を強ひるの如く展開する。

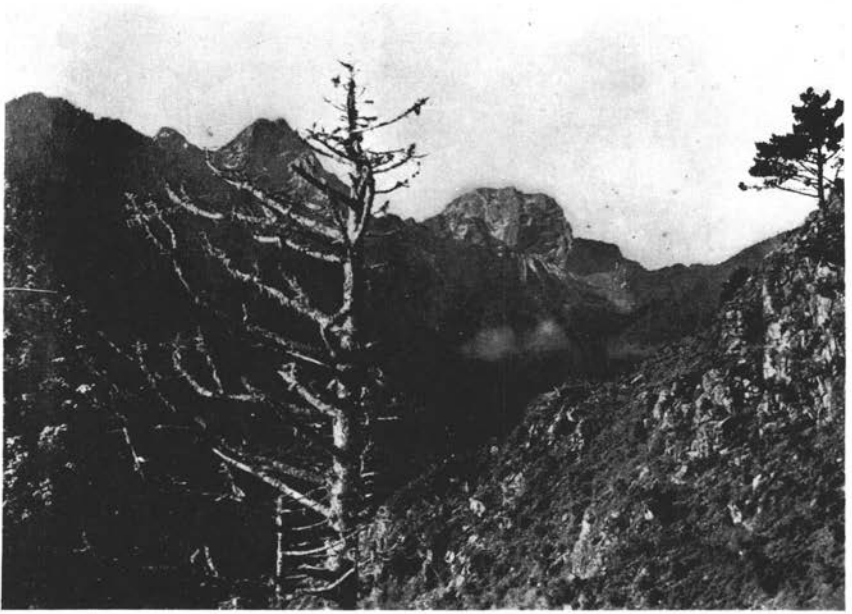
中央山脈は指呼の間にある。東北より西南を指して滔々と押し寄せる波濤、カラサン(七七五五尺)、グリロー(八〇九〇尺)、バトノーフ(一〇〇六三尺)を従へて、南湖大山(一二五三一尺)は白雪の様な閃きを示し、獨特な恰好をした中央尖山(一二二六〇尺)、屋根形をしたプシガカ(標高不詳)、畢祿山(一一一五一尺)、北合歡山(一一二〇〇尺)、合歡山(一一二〇〇尺)等中央山脈の勇士の面々が肩を怒らして並び立つ。その下は大甲溪の深谷が食ひ入つて、百千の山皺を造り、ビヤナン越の道路は其の山岳の起伏の中を心細くも見え隠れして抜けて行き、松嶺の小高い丘陵上に姿を没して居る。

眼を南に轉ずれば、大甲溪本流の深谷が地獄の如く深く刳れ、それを隔て、ハック大山(一一〇九二尺)、サラマヲ蕃の蟠踞する眞黒い山々、其の奥には能高山(一〇七三二尺)が頭をもたげて居る。

更に遠く南を望めば、新高山(二三〇三五尺)、近くは西南に大雪山(一一八八〇尺)、小雪山(一〇〇四三尺)等の山々が各々居を占めて、其の雄大さは筆紙の盡す所でない。

尙も北に轉ずれば、次高の一峯が圓錐形に聳え、やゝもすると自分の地點より高い感じを起さしめる。その岩の露な斜面は少量のハヒビヤクシンをからませて、深谷の底に落ちて行く。此の峯は更に北に續いて、桃山(一一一八八尺)に連る。その凹凸した山稜の蔭からは大霸尖山(一一七九二尺)が、あの奇怪な頭をもたげて——此の山の巨岩から北蕃タイヤル族が發祥したと傳へて居る——こちらを窺き見る。

誰かゞ大屯山が見えると云ふ。其の聲に驚いて北北西の方、雲煙の幽なる所を見れば、大屯山と稍



21 望む山東高新及び(右)山主高新りよ點高標士富の山北高新
 流上の溪濃老は溪深の央中



りあ雪残に々所 山東高新るた見りよ山主高新
 影撮氏三正田北

離れて觀音山が見える。臺北に住んで朝夕眺めたその山を今、人里離れた此の高山頂より見ては懐しの情が油然と湧くのを感じる。

山上に三十萬分の一の地圖を擴げて周圍に展開する山々の名稱を見、更に寫眞は此等の山々に向つて一廻轉して取られる。もう八時過ぎといふのに、一萬三千尺の峯頭は尙寒冷の境を脱しない。山の薪を集めて焚火をし、暖を取る。九時に出發する事にする。最も貴重なる場所に、今迄の努力の結晶たる此の絶頂に、僅か一時間とは情けない。僕の全感覺は急がしくも働いて、此の絶頂の印象をより深く吸ひ取る。

寒冷な高山の氣に惱む高山植物の採集、その生育状態の撮影、さては昆蟲の採集から山々のスケッチ、一人以て數人に當る勢で絶頂の記念物を摘み集める。

自分の短い一生に於て又再び此の絶頂に見ゆる事が出来るかどうか測り知れない、と思ふと勇氣のほとばしり出るのを感じる。

緊張の思出多い此の瞬間にも終りが来る。時計は九時を指す。我々一行は周圍の山々と絶頂の臺地に今一度眼をやつて、遂に惜しい別れを告げて出發する。それから一氣に平岩山の駐在所迄下るのである。絶頂直下のビヤクシンの渦を前より一層の困難を以て降り、スレートの急な斜面を滑り下り、更に狭谷を経て露營地に下つた時は十時半であつた。少し早い乍ら晝食を濟まして、露營地を出發する。ニヒタカトドマツの森林の中を通り抜けるとき、願れば昨夜の宿を貸して呉れや絶壁は、木立の間から未だ見えて居る。急ぎ足で森林帯を抜け、茅戸の峯に出で、更にシカヤウ大山の頂上に来る。次高山は桔梗色の空に晴れくると其の容姿を浮ばせて、我々一行を見送る。これからずつと下り許りである。走る様にして下りて行く。美しい景色の片影をもと寫眞機向けて居る暇に、一行との距離は數町に隔たる。走つて之に追ひ着き、又撮影する。その忙がしい奮闘の中にシカヤウ大山の急な坂を

下りる。途中約一萬五百尺の箇所、蟻が松の落葉を集めて火山狀の巢を造つて居るのを發見する（後記參照）。

遂に第二の水溜りも過ぎ、更に急斜を走つて、第一の水溜りで暫時休息する。時に午後一時半。涼風と松籟は行きと同様一行をいたはる。更に一層の勇氣を振ひ起して降り續ける。脚の關節が痛み出す頃、遂に昨日の登り口に着く。これ迄の道はひどい急斜に松葉が落ちて居るので、滑る事甚だし

す。昨日と同様の徒渉をして、疲れた姿を勢よくシカヤウ駐在所に現したのは四時半であつた。遙か次高山の方を見れば雨雲が群り起つて、昨日の幽暗を思ひ出させる。駐在所で出された桃をかぢりながら。二日間の天候を感謝し、最大限に於て成功を收め得た事を心中で祝つたのであつた。

後 記

私共の登攀は案外簡單に片づいてしまひました。それは一に天候の良かった事と人數が少かつたので、行動が捗つた爲と思はれます。臺灣の山は實に容積が大きい。登る量は他の日本の山に比して較べものにならないと、次高山に登つてつくづく感じたのです。次に貧弱ながら今回の登攀に依つて得た博物學的收獲の大略を掲げて置きます。

一、植物學的採集品

此の様な大きな題目で記録する程の事はありませんが、私が昆虫の採集や、登攀の苦しい最中に、獨力で採集した植物を次に記録して置きます。次の二十九種の植物は皆露营地から上の崖から始まりて頂上に終る間、大約一萬一千尺乃至一萬二千九百七十二尺に於ける間で採集したものです。今迄次高山が植物分布上全く未知である時に、僅か乍らでも、次の植物が同山に産する事を明にされた事

は、私の喜びでなければなりません。標本の鑑定は臺灣植物分類學の權威、佐々木舜一氏を煩した
で、此處に感謝の意を表します。

1. カハカミウスユキギク (*Leontopodium microphyllum* Hayata)
2. ニヒタカフクロ (*Geranium uniflorum* Hayata)
3. ロダマギク (*Anaphalis Nagasawai* Hayata)
(○日本植物總覽は之をニコタカウツメギとす。)
4. ニヒタカモリイバラ (*Rosa transmorrisonensis* Hayata)
5. ニヒタカハンシ+ウツル (*Clematis insulari-alpina* Hayata)
6. ニヒタカクワガタ (*Veronica morrisonicola* Hayata)
7. フクトメキンバイ (*Potentilla leuconota* Don. var. *morrisonicola* Hayata)
8. ハタザホの一種 (*Arabis* sp.)
此は次高山に稀つながら、南湖大山にも産し、佐々木氏に依ると新種なまうてある。
9. トキハハセ (*Mazus japonicus* Kuntze)
10. ニヒタカクリン (*Primula Miyabeana* Ito et Kawakami)
11. タイونسベメノヒユ (*Luzula spicata* D C)
12. ニヒタカヌカホ (*Agrostis flaccida* Hack. var. *morrisonensis* Honda)
(○日本植物總覽には (*Agrostis morrisonensis* Hayata とす。))
13. ニヒタカシラタマ (*Gaultheria bornensis* Stapf.)
14. ニトベヨモギ (*Artemisia oligocarpa* Hayata)
15. タイロンアカバナ (*Epiobium roseum* Schreb.)
16. フリサンヤブガラシ (*Vitis arisanensis* Hayata)
17. キクガラクサ (*Ellisophyllum pinnatum* Makino)
18. タンダイモズリ (*Habenaria Hayataeana* Schultz.)

(○日本植物總誌にはナンダトキヤハリ *Aerides Tomimagai* Schultz. とし、タイワンサギサウ *Habenaria Hayataeana* Schultz. ナホ。)

19. *タカサコイナモリ* (*Sarcopyramis delicata* C.B. Robinson)
20. *ニヒタカハタザホ* (*Arabis alpina*, L.)
21. *ニヒタカヘビノホラズ* (*Berberis morrissonensis* Hayata)
22. *タイワンココメダサ* (*Euphrasia borneensis* Stapf.)
23. *ニジウチササウ* (*Cerastium trigynum* Vill. var. *morrissonense* Hayata)
24. *ニヒタカジホガマ* (*Pedicularis transmorrisonensis* Hayata)
25. *シヤマコケリンダウ* (*Gentiana arisanensis* Hayata)
26. *モンマノ* (*Osmunda regalis* L. var. *japonica* Milde.)
27. *ニヒタカジヤウチナゲ* (*Rhododendron pseudo-chrysanthum* Hayata)
28. *ニヒタカスグリ* (*Ribes formosanum* Hayata)
29. *ニヒタカヒヤクタン* (*Juniperus squamata* Lambert.)
(○日本植物總誌にはニヒタカヒヤクタン *Juniperus morrissonicola* Hayata とあり。)

二、昆蟲學的收穫

昆蟲の採集は大いに努力した割合に、時間の僅少の爲失敗に終りました。次に今回得た收穫中主なるものを擧げて置きます。

(3) 高山蝶 此の高山といふ言葉は 嚴密な意味ではない。

1. *キツネアゲハ* (*Papilio hoppo* Mats.)
第一水溜りの下、八千尺附近より、シカヤウ大山頂上まで飛翔す。
2. *タカムクデフ* (*Betaporia mollerecht* Oberthur.)
第一水溜り附近に飛翔す。
3. *コシキチフ* (*Colias hyale poligraphus* Motsch.)

六千尺乃至八千尺にかけて居る。

4. *プリキニキタラヒカゲ* (*Neope pulaha didia* Fruhls.)
八千尺附近にて採集する。

5. *チカカハジノメ* (*Satyris nagasawae* Mats.)
第二水溜りよりシカヤウ大山頂上まで産す。

6. *ヒドロンチオン* (*Argynnis paphia paphioides* Butler.)
第一水溜り附近に産す。

7. *タイウンシロシジミ* (*Zephyrus taiwanus* Wilem.)
七千尺乃至八千五百尺に亘りて飛翔す。

私がビヤナン越沿道で得た高山蝶、アケホアゲハ、オホゴマダラシジミ、シノタテハ等は姿も見せませんでした。臺灣の高山蝶で北部に居ないものに、イワヤマヒカゲ (*Lethe nitakana* Mats.) があります。此が北部に於ける産否は興味ある發見です。其の他の蝶は皆北部に産するのが明にされました。(詳しくは「臺灣博物學會會報」第八十八號拙文参照。)

高山蝶でなく、平地にも普通に産するもので、次高山八千尺附近まで目撃されたものに次の種があります。

1. *ヒメアカタテハ* (*Pyraonis cardui* L.)

2. *アヲタテハヒキ* (*Precis orithya* L.)

3. *ジノメタテハヒキ* (*Precis lemonias* L.)

(ろ) 蟻の火山状落葉堆積巢

此はシカヤウ大山より稍降りた所、大約一萬五百尺の地點で發見したものです。傍に生えたニヒタカアカマツの落葉を集めて高さ一尺位にまでも堆積し、火山状の巢を造つて居ます。中を發くと實に多數の *Formica* 屬の赤蟻が群り出ます。よく見ると、此の巢は此の近邊では可なりあるのを見まし

た。

元來此の型の蟻巢は北米、カナダ、サイベリア等の寒い地方の森林に營まれるので、該地方では珍しいものではありませんが、高距の地とは云へ、亞熱帶の臺灣に發見されたのは實に興味ある事です。

尤も本州の亞高山帯には私共山歩きする者は屢々見る所で、私も三峠山、四阿山、吾妻山其他信州や福島縣の山々で目撃した事は數回あります。

尙、昆蟲の採集品は少々ありますが、一般的には大して興味もないので、研究の後夫々特殊な形式に依つて發表したいと存じます。

『臺灣山岳』第一號(昭和二年四月)所載、秋永肇氏筆「次高山旅行記」及び本誌所載、大橋氏筆「次高山に就て」並に沼井氏筆「臺灣登山界の概観」参照。

左の記文は臺灣教育界に長年盡力されたる大橋捨三郎氏(現臺灣山岳會幹事)が雜誌「臺灣教育」に寄稿掲載された次高山關係記事——ヒヤナン越と松嶺(臺灣教育二五五號、大正十二年九月)、次高山(同二五六號、同十月)、次高山補遺(同二五七號、同十一月)及び二六三號、大正十三年五月)、大甲溪沿岸道路と次高山(同二六七號、同九月)——を集め且つ改正増補して「次高山」なる五十七頁の小冊子を印刷し知人に分たれしものより、其許諾を得て主要部を轉載したものである。右の「次高山」なる小冊子は非賣品で部數も少く、其寄稿の雜誌も内地迄普く行き渡らないものである故、斯の如き日本領土中の巨嶽の調査文献として臺灣のみに埋むるを頗る惜しいものと考へ、別稿會員鹿野氏の記文と共に特に本誌に掲載して紹介することにした、これは幹事沼井氏の盡力によるものである。

次高山に就て

大橋捨三郎

一、山名の由来

イ 玉山

玉山とは新高山の原名なるも、次高山にも亦之を稱へしこと、噶瑪蘭廳誌（咸豐二年、西曆一八五二年）、淡水廳誌（同治十年、西曆一八七一年）の記載に徴すべし。

〔噶瑪蘭廳誌〕 玉山在應治西南二百餘里、以自得名、通臺之表障也。三峯竝列、中頂如孟、左右如柱、終歲雪封、如紗籠香篆、春夏晴霽、乃得遠望、有頃則雲霧復合、非風必雨、實爲人跡罕到之區、蘭由大叭哩沙喃、作三日程、繞出生蕃界、可至其地。

〔淡水廳誌〕 玉山在猫裏溪頭山後萬山中、一晴霽乃見、巖巖峭拔、疊白如銀、可望不可即。相傳僞鄭自率步卒、往至山麓、遙隔一溪、毒甚、涉者多死、遂止、或袖白石數枚而歸。竹塹亦時見、或以爲雪山。

右の位置より見れば正しく今の次高山に當れり。然るに兩書共に其形容詞は諸羅縣誌（康熙五十六年、西曆一七一七年）陳夢林的望玉山記（此の玉山は新高山を指す）を引用したるにより、此の南北兩山は同一の如くにも見へ或は別個の如くにもあり、久しく混線状態に在りたるもの、如く、淡水廳誌編纂責任者陳培柱は諸羅縣誌中の玉山詩を其儘轉載し、爲に淡水廳誌訂謬（廳誌同年の出版）に於

て著者林豪より痛く笑殺せられたり。乃ち林豪は玉山を唯一山と信ぜるものに似たり。若し次高の其れを指して問ひたらんには蓋し雪山と答へしならむ歟。

〔淡水廳誌訂謬〕 玉山在內山嘉彰之交、距淡已數百里矣。培桂於周鐘瑄望玉山詩、何暇錄之。

然し事實の存在には必然争ふべくもあらず、何時しか南路玉山北路玉山の稱あり。梅陰伊能氏は曰、北路にありて玉山の名を稱する高峰（淡水廳誌、噶瑪蘭廳誌）の存在の如きも、蓋し南路の玉山に對するため與へし漠然たる文雅の概稱に係るかの觀あり。北路玉山の記事が時として南路玉山の記述と混淆するを免かれざるも、要するに之れに因るなるべし。

玉山問題は斯く錯雜すと雖ども今より百十四年前閩浙總督方維甸に依て己に判決は下されてあり、即ち淡水玉山と呼ぶことにて、淡水とは當年臺灣北部の總稱なり。此名は最も明瞭にして且つ適切と覺ゆ。臺灣通誌は清領末年の事業なりしが未完成の稿本なり中に左の記事を收む。

嘉慶十五年、總督方維甸、巡臺至艋舺、有蛤仔難蕃土目及民人潛入墾田者、呈送戶口清冊、請照則陞科設官彈壓、維甸乃覆奏、淡水玉山之後、地名噶瑪蘭、係蕃語、閩音不正、訛爲蛤仔難、云々。

因みに玉山は是れ西王母の居ます所として漢族は古來之を神聖視せり。故に廣き支那にても其名の山は僅に三座に止る。斯許りに貴重なる名を一小島に二座までも有せしこと蓋し臺灣の誇とや謂はむ。

○ 雪 山

雪山の名は前記玉山の部に於て引用せる淡水廳誌の末段「竹塹（新竹）一帶亦時見、或以爲雪山」とあるにて明なり。古より本島中雪を戴く最久しきは獨り當山のみなれば事實上當然に生ずるの名稱とも見らるべし。大日本地名辭書にも左の如く云へり。

漢族の稱して雪山（又は雪翁山）といふもの亦西部の平地より遠望せる命名に過ぎざるも、此山峯が萬岳の中に秀出し冬天に早く白雪を戴く景觀は、漢族をして此の命名をなさしめし起因なるべく、云々。

昨年七月余等の蕃界縦走旅行は地點の高くなるに隨ひ次第に寒冷を感じつゝあり、同月七日志良節警戒所にて次高山には兩三日前降雪ありしと聽かされ實は心中怪訝に堪へざりしが、後に至り臺南新報の新竹電報を見るに「次高山に雪降る」として

新竹州下大湖郡蕃地モギリ方面は五日午前十二時から氣温七十四度に低下し、雷鳴甚しく僅に驟雨を見たが午後二時頃から快晴となり次高山は七合目から山頂にかけ降雪多く白雪皚々として壯觀を呈して居る。

疑ふまでもなし果して降雪ありしなり、勿論斯る現象は毎歲必ず有とは稱し難かるべきも、臺灣を單に暑熱の地とのみ思へる人々に對し此の事實は一のよき鑿なるべし。

連雅堂氏の臺灣通史（大正九年出版）は、單に雪山とのみ記して他名を排せしこと亦一定見ならんか。

夫新竹爲_ニ北臺之奥區、羣山崒嶽拱若_ニ列屏、巍然而獨立者則雪山也。

此の如く今の新高を玉山に次高を雪山とせば頗る納りの良きわけなるに、従前の記載は兎角次高が新高のお株を奪はんとするに似て、淡水玉台北路玉山などの稱も出でたるが、茲に面白きは新高が却て次高のお株を争ふ彰化縣誌（道光十二年、西曆一八三二）の逆襲的記事なりとす。

雪山在_ニ水沙連内山、經年積雪、瑩澈光明、晴霽望_レ之、輝如_ニ白玉、即諸志所_レ謂玉山也。高插_ニ天外、常隱不_レ見、奇幻莫_レ測。

因みに雪山の名は輒ち釋迦牟尼を聯想せしめ漢族も亦之れを靈場視するの傾あり。支那に在るは概して寒き地帯に屬するを以て格別に珍とするに足らざれども、印度と臺灣とは熱國にして之れ有ると

ころ其奇や相通ず、憾らくは後者には未だ苦行難行を試みて其の名を發揚する人なきを。

ハ 雪高翁山

(一) 雪高翁の出處

雪高翁の名稱に於ては既に理蕃誌中に左の記事あり、詳細を知るに便なれば繁を厭はず左に之れを轉記す。

大正二年九月中旬、西侍從武官は書を三村總督祕書官に寄せ、シルビヤ山を一に雪高翁と稱するの由來を問ふ。同官事の自己の管掌にあらざるを以て、之を蕃務本署長に移牒す。本署長即ち一面理蕃課員に調査を命じ、一面巖手縣に在る囑託伊能嘉矩に照會して、其答申を徵し、十月十七日、西侍從武官に回答せり。其の全文左の如し。

三村祕書官ニ對シ御照會相成候、シルビヤ山ノ別名ヲ雪高翁山ト名ケタル件、同官ヨリノ移牒ニ由リ取調候處、參考トスベキ文書無之モ調査ノ結果、別紙ノ通蕃語ヨリ出テタルモノト思料セラレ候。右回答ス。

蕃務本署長

西侍從武官宛

(1) 別紙回答文

シルビヤ山ヲ雪高翁ト名ケタルハ何レノ時ニ始マルヤ文獻ノ徵スベキモノナキモ、光緒十二三年ノ頃ニ至リ、騷人墨客ノ往々此ノ名ヲ用ウル者アリ、是ヨリ以前ハ玉山又ハ雪山ト稱セリ。由テ雪高翁ノ文字ノ出處ヲ釋ヌルニ、支那人ガ北蕃即チ「タイヤル」族ノ語「セツカアン」ニ近音譯字ヲ充テ雪高翁（支那福建省泉州地方ニテハ雪高翁ヲ「セツカウアン」ト發音シ同漳州地方ニテハ「セツカウオン」ト發音ス。臺灣人ハ多ク泉漳出身ノ者ナルヲ以テ少數ノ廣東人ヲ除クノ外ハ泉州又ハ

漳州ノ語ヲ採ル)ト書セシヲ始トス「セツカアン」トハ割レタル義ナリ。而レハ何ヲ以テ「シルビヤ」山ヲ呼デ「セツカウアン」ト曰フニ至リタルカ、惟フニ同山ト大霸尖山トノ鞍部附近ニ巨巖ノ虧隙アルモノ有リ、「タイヤル」族ハ此ノ虧隙ヲ始祖ノ出現セル所ナリト信セリ。而シテ之ニ關スル傳説ニ曰ク「太古山上ノ巖石自ラ割破シ其ノ中ヨリ男女出來テ夫婦ト爲リ爾來子孫蕃殖シタリ」ト、故ニ支那人ガ此ノ巨巖アル山ヲ指シ其名ヲ問フニ當リ、蕃人ハ「セツカウアン」即チ割レタル所ナリト答ヘタルニ由リ、發音ノ近似セル雪高翁ノ字ヲ用キタルニ始マリ、自然ニ汎ク使用セラル、ニ至リタルナラン。明治三十年陸地測量部ニテ刊行シタル臺灣假圖ニモ雪高翁ト標記シアリ。

(2)伊能囑託ノ答申書

雪高翁山ノ名稱ニ關スル件

臺灣北部ノ最高山ナル「シルヴィヤ」山ハ古ク漢人ニヨリ玉山ト呼バレタルコト舊志ニ明徴アリ。(即チ新高山ノ漢稱玉山ト全ク同一名ヲ以テ呼バレ南路玉山北路玉山トシテ區別セラレタルモノ、如シ)光緒年間臺灣省獨立シ劉銘傳ノ巡撫ニ任セラレ、ヤ先ツ理蕃ノ施設ヲ以テ政綱ノ一ト爲シ、兇蕃ノ討剿ヲ斷行シ、之ニ次グニ撫慰ヲ以テシタルガ、事ハ豫期ノ籌畫ト違ヒ殆ンド失敗ニ了リタリシモ、蕃地地理上ノ智識ハ從前ニ比シ較明確ナルヲ致シ、其ノ地名ノ如キモ略實際ニ近キモノアルニ至レリ。雪高翁(後ニ略シテ雪翁又ハ雪山ト書スルモノアリ)ト稱ヘラル、ニ至リシハ此際ニ在リシコト明ニシテ現ニ光緒十二年ニ成レル臺灣通志ニ同山名ノ記載アリシト記憶ス。

雪高翁トイヘル名稱ノ意義ニ至リテハ、蓋シ蕃語ヨリ出シナラン、赤坎集ニ云、臺地諸山本無正名、皆從蕃語譯出ト、此經過ハ亦近代ニ至ルマデ踏襲セラレタリシト覺ユ。雪高翁ノ臺灣語音ハ「セエコアヌアン」ナレバ、恐ラク之ニ近似セル或ル蕃語ノ音譯ナルベシ。現ニ北蕃中此ノ方面ノ一ナル汶水蕃ニ屬スル社名ニ「セツカオン」ト曰ヘルアレバ、類推溯源ヲ試ルトキハ明瞭ナル解説ヲ得ベ

○次高山に就て 大橋

五二

キカト思考ス。

右御下問ニ對シ概要答申候也

大正二年九月二十一日

伊能 嘉矩

(二) 蕃語セツカアン

雪高翁の原語セツカアンは各蕃を通じて祖先の靈地とせるものにて普通之れにビンの二字を加へて呼べり、即ピンシブツカアンよりシブツカアン又シブウカアンとなり、更に轉訛してセツカウアンと傳へられしを之に近音の漢字雪高翁(又雪姑翁)を當填めたるや明かなり。然して各蕃族により發音種々ある左の如しと雖も是亦當時の通譯者若くは聽取者の如何等により其間自然轉訛を免れざるべし。今舊慣調査會の蕃族調査報告書に據れば、

ピンシブカン 溪頭蕃 ピンシブツカン 溪頭蕃 ピンシバカン 風尺蕃

ピンサバカン ガオガン蕃
マリコワン蕃
キナジー蕃 チンシブツカ 司加耶武蕃 ビンスバカン 白狗蕃 チンスバカン 沙拉茅蕃

ピンは二重過去の如くシブツカは自ら破裂せる義、アンは過去を示す義なりと云へり、即自然に破裂して祖先の出現せし靈地と稱するの意なるべし、生蕃傳説集にもピンサバカンを註解せる左の如し。

ピンサバカンも同様(タツカ)で發音その他少しづゝ異つてはゐるが要するに、

一、岩石の裂けたる 二、その場所 三、祖先發祥の靈地 四、女陰など、解せられる。

(三) 蕃族祖先の發祥地

タイヤル蕃族が創世神話として傳へらるゝもの種々ありと雖も何れも大同小異にして、概するに我等の始祖は巨巖の破裂又は虧隙より男女現出せりと云ふに一致せり、而して其發祥の地を説くもの二あり。

其一、ピンシブツカアン(雪高翁)

前既に述べたるが如し、而して其位置に至りては甚だ明確を缺けり、バツバクワカの大覇尖山たることは動すべからざることなるも、此のピンシブツカアンは前記蕃務本署回答書にも同山と大覇尖山との鞍部附近にある巨巖とのみある如く、只漠然と大覇尖山以外の處を指せし名に過ぎず、然るに當時直ちに取つて此の山の蕃語と信じ雪高翁の譯字を定めたり。蓋し當時質問者の目的は山脈中の最高處にありしにも拘らず蕃人は其意を悟らずして單に名高き俗稱を以てせしを其儘傳へられしならん。

其二、バツバクワカ(大覇尖山)

右は耳の義にして全山が兀立數十丈なる一大巨巖なれば何處より遠望するも耳の如き特異の形狀を失はず、而も最高雄大の次高連嶺よりも却つて四圍の目標となり従つて一般の尊崇を高めしことならん。牛蕃傳説集にも左の如く解せり。

バツバクワカは蕃社によつては色々訛つて居るが耳か峯の義で山容から來た蕃名即ち其處に巨巖があつたからである、今の大覇尖山(一一、七九二米)を云ふので一部のもがシルビヤ山(一一、九七二)米とするは誤りである。

(四) 其他の蕃語

バポーハガイ(又ハアガイ)とは白狗、沙拉茅、司加耶武の諸蕃人間に稱へらるゝ語にして「バポー」は山頂「ハガイ」は砂積又は破れたるの意、即山頂に岩石の崩壊せる狀を表はせるなり。別に「バポー」ルギヤフ」と云ふものあり「ルギヤフ」は峯の意と云ふ。但し必しも次高山に限れるにあらず。是亦「シブツカアン」(雪高翁)の如く質問者の強ひて問へるに對し、蕃人は其固有稱呼なかりし場合斯く答へしこと當然なり、然して此れを聞きしものは誤りて當山の蕃語は「バポーハガイ」なりと得意に宣傳せしこと前記雪高翁と相同じと雖も、其意味の適否は大に差あり。斯く格別なる意義無きを思へば

今後此の蕃語を使用するの要なかるべし。

(五) 雪高翁の名稱に關する所感

以上要するに蕃語ピンシブツカアンの轉訛より、雪高翁の漢字を出すに至れり。但し其原語と意味の如何又實際の位置如何等に就ては今更問題とするべき要なし。只其偶然にも祖先發祥の義と多時積雪の狀とを含め、雪高翁の佳名を冠せしめたることに實に不思議の適合にあらずや。

雪高翁の漢譯文字を初めて使用せし時代今詳ならず、淡水廳誌(明治十年)に無きこと勿論にして、臺灣輿地圖說(光緒六年西曆一八八〇)には大霸尖山の名稱あるも其他見當らず、想ふに此より數年を経て劉銘傳の蕃界開發に着手したる、其次に於て定められしものなるべし。

加之次高山より西南東勢に向つて走る一支脈中に大雪山(一一、八八〇)小雪山(一〇、〇四三)あり、臺中附近の平野よりは三山相重りて見え、後奥なる高峯雪最深く初夏五月に入るも猶消えず、即ち大小兩雪山に對し雪高翁の稱豈相應はしからずや。

宜なり爾來普通シルビヤを呼べるにも拘はらず、文人墨客間には久しく此の雅號を棄てざりしこと、其れ雪翁の稱呼は專用の時期殆んど幾許もなかりしとは云へ、シルビヤ山の別名として傳へられしこと久し。今や御命名の榮に接せしと雖も別名は依然別名なり、希くは次高山の芳名の庇蔭に於て因縁深き雪翁も其壽を保たしめんことを。

北の空聳ゆる山は多けれど雪の翁と仰がるるか
北のそらに雪の翁と仰がれて御名に戴く次高の山

二 熬酒桶山

新竹平野の方面より能く全山を眺望し得るだけ同地の者は特に山影の印象を深くし、自然俗稱の附せらるゝこと當然にして新竹竹東方面の俗間多く熬酒桶山又酒桶山を稱す。但し彰化縣誌既に此の名

を擧ぐるを見れば臺中方面よりも斯く見えたるものか、新竹縣採訪冊(光緒二十年以後の編纂)の記事最詳細を極む。

〔彰化縣誌〕 大員山在縣治東北七十餘里、山頂員形似熬酒桶、故俗呼酒桶山、與水底寮大湍山、罩蘭山、大茅埔山、俱在東勢角左右、

〔淡水廳誌〕 又南北十餘里曰銅鑼山、內有熬酒桶山、南與後壠山、相連極大、淡水各船、赴福州一遇霽、兩旁見山即此。

〔新竹縣採訪冊〕 (原書ハ漢文ナレド良參考資料
タレバ特ニ之レヲ譯載セリ)

熬酒桶山は縣の東南百餘里にあり、其山は淡水縣の蕃界中東南方より來り諸山の上に在り、突起せる一峰は頂平にして圓く上稍穿つて下漸く寛く形熬酒桶の如し、高く雲霄に插入し人迹到らざるの區と爲す。(山上の積雪年を経て消えず盛夏と雖も寒氣人の肌骨を砭す生番亦敢て近づかず)之れを遠望すれば一峰直豎し形家(又堪輿家トナス俗ニ風水先生ト云)は呼んで冲天木(木ノ正高昇、天ニ冲ルガ如シトノ意)となす、此れ縣治の太祖山なり。

山の旁一峰あり形旗を展べたるが如く或は木火通明格(木ハ高昇天ニ冲シ、火ハ蒸騰天ニ透ズ)と呼ぶ稍南の一帶には大樹天を挿し枝幹雲に連り晴時に見ゆべし。其の下には片々たる飛瓊・山に滿てるの瀑布・巉巖の削壁・白石の瑩々此れ一大觀なり、常に霧歛まり雲消ゆるの時に於て彷彿として之れを睹るべし、蓋し所謂玉山に近似せり。

彰化縣誌卷の一なる封域誌の山川に曰く、「大員山は縣の東北七十餘里に在り、山頂圓にして形熬酒桶に似たり、故に俗に酒桶山と呼ぶ、水底寮山・罩蘭山・大茅埔山と俱に東勢角の左右に在り。」而して山川全圖に、又大員山は熬酒桶山と大甲溪上游の南に並列せり。

苗栗縣の舉人吳子光が一肚皮集卷の七なる雙峯草堂記の一に云ふ、「五指峰より南一支を分ち、勢

猶尊き者を酒桶山となす、則ち石叢境に入れり。」

彰化縣誌に據れば、熬酒桶山は當に彰化縣の内山に在るべし、即ち今の臺南縣の境なり。一肚皮集に據れば、又當に苗栗縣の境に在るべし。

今新竹縣東門城上に於て、羅經(針羅)を以て之れを按ずるに正に巽方に在り、内山の客人(廣東種族)にして蕃社に出入し形勢を熟悉する者に訪詢するも、皆云へり新竹縣の境にありと、偶々一二生蕃に詢ふも亦然りと云ふ。應に此の山を以て新竹縣に屬するを是となすに似たり。第一此の山は高ふして仰ぐべからず、常に新竹より行きて嘉義縣の境に至る沿途より猶遠く之れを望見すべし。

蓋し特に新竹縣の太祖山たるのみならず、其中・幹を壁ち支を分つ、亦即臺灣臺南諸府縣の祖山なり。唯人跡到らざれば究むるも其然る所以を確指する能はず、今姑く見聞を略舉し以て採擇に備ふ。尙異名同山に關しては梅陰伊能氏も嘗て左の如く云はれたることあり。

淡水廳誌の熬酒桶山(封域志)と玉山(古蹟攷)と兩者一致を缺ける類の記載に至りては、當時實際の地理に明通せざりしに因る自然の錯誤にして、臺灣のみならず支那の諸志に通じて屢々見らるゝ事實に屬す。強ちに拘泥を須ひざるべし。

ホ シルビヤ山

シルビヤ山と云ふ名稱の起源に於ては、西曆千八百六十七年英國軍艦シルビア號の臺灣東海岸を航行せし時、遠く艦上より望みて測定し初めて命名したるや明かなり。此のシルビヤの語に就ては嘗て金平林學博士は左の如く云はれしことあり、(臺灣山林會報)

シルビヤとはラテン語の SYIVA (林の意)と云ふ語の形容詞で、羅馬では姓に用ひ後には女性の名前にも用ふる様になつた。

本島にて既に早くより玉山雪山の名を有せりと雖も西洋人の命名は例も出版されて廣く世界に紹介

さるゝ爲めか、領臺後最初の陸地測量部刊行(明治三十年)の臺灣假圖には雪高翁山の名を採用せるに拘はらず明治三十三年臺灣總督府出版の臺灣豫察圖はシルビヤ山一名雪高翁山と兩様に記載せられ、爾後遂にシルビヤの名稱のみを専用傳汎するに至れり。今や復何をか云はん、高木博士の歌意豈喜ばしからずや。

しるびやの異國衣ぬぎかへてたちよそひたる次高の山

へ 光榮ある次高山

皇太子殿下の臺灣第二の高山に對し次高山なる御命名を賜ひし時、總督田男爵は、「仁厚英明なる東宮殿下の行啓を拜して」との一篇を臺灣時報に於て發表せられたり。特に此に其一節を轉載するは御命名の由來を審にするを以てなり。

偶々御歸航の途中四月二十九日殿下第二十三回の御誕辰に當り殿下は臺灣行啓の記念として、シルビヤ山に命名せらるゝに「次高山」を以てせられ、其旨電知せられたのは重ね々厚き思召の程感激の至りである。シルビヤは新高山に次ぐ臺灣第二の高山で富士山よりも五百餘尺も高く五十餘年前英國軍艦シルビヤ號が海岸航行に當り之を望見し、艦名に因みて名けたるもの、今や先帝の新高山に命名あらせられたるに對し殿下の思召を以て次高山の御命名あらせられたことは、誠に本島として因縁の深いこと、今後在島官民は此の高山を仰ぎ見る毎に殿下の御高德を慕ひ參らせて、益々朝廷御仁愛の鴻大なるを感ずる次第である。(五月一日稿)(臺灣時報第四十六號所載)

大正十二年四月二十九日の臺灣總督府告示第八十二號左の如し。

本日皇太子殿下ヨリ臺灣第二ノ高山シルビヤヲ次高山ト稱スベキ旨御沙汰アラセラレタリ。

二、主山の位置（略）

三、最初の探検

1 探検の嚆矢

本島北方の雄鎮たる次高山は其位置の餘りに僻在して而も山脚附近には兎蕃の久しく跳梁せしより從來人跡未踏の山地として實相を究むるものなく、只崇高なる雄姿を遠望するに過ぎず、當局に於ては曩に蕃界整理上大概の高山は皆地形測量を施行せられしが獨り此山に限り蕃情の關係と斷崖絶壁の多きを以て最後まで取残されたりき。

大正四年七月、總督府財津技手一行、種々調査の結果宜蘭溪頭蕃に屬するビヤナン社は當山を以て狩獵地域として屢々登りし經驗あるを確め、此の蕃人を嚮導となし遂に實測を決行するに至れり、是れ實に登山者の嚆矢なりとす。

ビヤナン社は羅東より濁水溪の上流十二里餘の處にして溪の左岸にあり。此れより溪岸を遡ること二里二十五町にして分水嶺に出づ、財津氏一行は此れをビヤナン鞍部と命名せり、同氏の談に附近悉く蒼鬱たる針葉樹あり、所々草原滑かに水澄み山形優美なり、幾流の溪水あるも其南流せるを避けて桃山稜線を迂回し次高山より流るゝキャワン溪（大甲溪源頭）に下れば溪底廣く松樹能く伸長して草丈は短くて青氈に似たり鞍部より約三里半此地に露營し、夫れより六時間を費し約一萬尺程上りし處に好池水（現に黄金が池と稱す）を發見し此處に第二の露營をなせり、絶巔は手に取る如く見ゆるも猶ほ相當の距離ありしと云へり。

□ 財津氏一行の踏査談

當時の財津氏が踏査談を臺灣時報七十六號に發表せられたるもの、一部を擧げれば左の如し、

（大正五年）

(1) 第二露營地の發足

愈絶巔に登るには雲霧に遮らるゝ虞があるので翌日は午前四時に結束し松火を點して頂上に向ひ發足した、近く手に取る如くに見えて居ても仲々に遠い、殊に此邊には匍杉即ち「ビヤクシン」が時を得顔に縦横に繁蔓して、九合目邊からは石楠木も混生して恰も鹿柴の如く頑丈に生ひ茂り居る故に殆ど足は地に著せず、約三十分程は全く枝條を傳ふて一步宛進むので甚だ歩らぬ、辛うじて此の鹿柴を通過すると今度はスレートの破砕せしものは落々滑り合ひて歩行頗る困難を感じた、之より絶巔迄は殆んど火事後の燒石に似たる石塊を以て充たされて居る、一面南投に向つて居る部分は斷崖絶壁の峻嶮を見る、幸ひに此日は天候極めて佳良なりしを以て發程後三時間半にて絶巔に達することが出來た。

(2) 山上の標高

直ちに器械を整へて測量に取り掛り周密なる用意を以て測定せし結果、シルビヤ山の標高は實に一萬二千九百七十二尺を算出し得たり我帝國第一の高山たる新高山の標高一萬三千七十五尺に對比すれば僅か百三尺の差を見るのみである、世人が兩山の高さを想像して實際何れが高きやは未知數であると云ふて居る如く、更に精密なる測定が行はれたる曉には如何に確定さるゝか判らぬ、兎角兩山の標高相伯仲すると云ふのが當然であらう。

因に大正十二年五月一日、臺灣日日新報に陸地測量部中島可友技師の來臺せられ記者への談話を左の如く紹介せり。

陸軍では昨年から本島の二萬五千分の一測量圖を作成すべく技師四人技手七人を派遣し三角測量を行つてゐるので其監督のために来たが、大體は總督府で作成した二萬分の一圖を基礎として實査の上二萬五千分の一圖に縮むるのである。(大正十六年度に完了の豫定)(中略)

今回の測量は右の修正縮圖する計りてなく、より精確なる測量法で念入りに實査するのだから起點測量の結果は總督府の原圖よ

りいくらかの差違を見出すかも知れぬ、従つて新高山次高山の海拔に差違を發見し新高が次高より低く次高決して次高でないことになるかも知れぬ、旅順の爾靈山(二〇三高地)も其の後の測量で二〇六米あることを發見された例もあるから云々。

同技師を出迎へた野呂技師は右の談話に註釋を加へ測量の困難と海拔起點決定の容易ならざることを説き尙將來地圖は總てメートルで表示さるゝ日が來ると信ぜらると、尙中島技師に可及的速に新高山と次高山の標高を決定すべきことを依頼してゐた。

(3) 山巔の展望及び風致

測量隊一行の山巔に達した日は天候平穩なりしのみならず、一天雲霧を見ざる好晴なりしを以て、展望極めて自由自在にして北部一帯の地は山でも平地でも一瞬の下に瞰望され、平地は南投以北は全部を眼裡に集め得たのは頗る快感を覺えた、殊に新竹市街の如きは明かに眸中に見ゆるのであつた、從來新竹街よりシルビヤ山を仰望するのは最好地位であつたと共に、山巔より瞰下するの尤も好目標である、此の山巔よりは獨り北部の諸高山や平地を望見し得るのみならず遠くは新高山の雄姿をも望見し得る。

地形上よりシルビヤ山を觀測すれば既に宜爾廳管内を離れて南投廳のシカヤウ社の上方に突起して居る山にして、中央山脈より少し西南に突出して居る、大雪山を経て東勢角の鳶嘴山に至りて止まつて居るのである。

從來登攀の途なきものとして最後まで取残されたるシルビヤ山も、此の踏査によりて案外にも左程の困難なしに登攀するの途が發見せられた、將來は更に便利な捷徑が發見されるかも知れぬが、只今の處にては今次の一行の登攀したる溪頭蕃を廻るのが安全の途である。

臺灣に於ける他の高山とは大に趣を異にして居るのは、此の山に登る通路の地形極めて穩かに而かも優美の勝に富み水も空氣も清澄透徹の氣を帯びて居るので恐らく富士山に遊ぶよりも快感が多からうと想像される、殊に古雅なる躑躅花や優婉なる櫻花もあり、蕃語にては「チルン」即ち清澄

なる水を湛へたる池水（黄金が池）もありて臺灣の山界としては實に珍らしき奇勝を具へて居る。
 （下略）

ハ 新竹方面より探險の實況

大湖郡管内モギリより踏査をなせしは大正十二年の秋にして是新竹州より探險の初めとなす。乃ち同年八月下旬先づ第一回到蕃人十名をして試みに探路をなさしめ、次で警察隊は九月十月及同月下旬の三回登山實査を行へり。其大要を聞くに左の如し、

モギリは最終の警戒所にして此れ以上は宿泊する所なきを以て皆露營なり。

（一）九月八日モギリ發、神崎（健）警部補一行六名蕃人十名にして二日目無名溪に宿す、途中嶮崖ありて一步踏誤れば忽溪底の鬼たるべく危険云はん方なし、加之溪谷増水せば徒涉頗る困難を來すの恐れあり、三日目七合目に宿す、途中シルビヤ溪大安溪の源頭を遡る諸所殘留の流水路を遮り歩行容易ならず、一帯は松の密林にして嶮崖崩壞の處も多く風景絶佳なり。

四日目（九月十一日）次高山の南角に攀ぢ午前十一時絶頂を極む、大石技師外二十餘名の名刺を見る、途上眺望實に壯絶にして歩行亦容易なる所多し。

（二）十月五日モギリ發、中間（市之助）警部の一行五名蕃人六名にして四日目大霸尖山最底鞍部に出で次高北角に向ひたるも風雨に遭遇し己むを得ず無名地に引返せり。五日目は風雨猶歇まざ濃霧四方を罩め咫尺を辨せずして探險亦不可能なれば滞在宿泊す、六日目十日天候回復したるを以て次高山北角に向ひて出發したるも兩面大斷崖にして恰も馬背の如く岩石崩壞し危険にして歩行する能はず、僅に匍匐して九合目即ち次高山北角絶頂より約二町下方に達することを得たり。但同所は非常に危険なる巖崖にして到底普通にては登る能はず、僅に中間警部及び蕃人一名のみにて他五名の蕃人さへ追隨する能はざりしが如き其嶮岨の狀推知するに難からざるべし、蓋し此れより以上は

如何にしても絶対に頂上に登り難ければ憾みを飲んで引返せり、若し一、七、七、二尺の高地より大安溪上流附近に下る約十町間の道路を發見するを得ば其れより以南次高山北角へは勿論同南角頂上へも約半日行程にして達し得べし、如之緩傾斜なれば誰にしても歩行容易のこと、思はれたるも不幸第四日目及第五日目に暴風雨にて豫定を妨げられ食糧缺乏を來し、且豪雨の爲心身疲勞甚しくて皆前進を肯ぜざるより已む得ず歸還せること返す々々も遺憾の至りに堪へず。

(三)其後同月下旬前記中間警部神崎警部補巡查四名警丁一〇 審人一五等前九月と同一路(但八合目は稍下方)を辿り十一月一日絶頂を極めたり。

尙神崎警部補の話によれば中間警部の取りし次高山北角下方よりは如何にしても登られず、又北角頂上より何づれの方面に向ふも下降する能はず、乃ち新竹方面よりは只南角に登る一路絶頂附近へ西方より登るものある而已と。

四、登山道路

イ 次高登山者

斯く人跡未到の峻嶺は一度探險せられしも、蕃地奥深き所に躊躇し又道路未開のことなりし故、容易に之れに續ぎ登るものあらざりき。

大正四年七月前記財津技手が第一回の探險に次ぎては同八年四月十九日總督府井澤(眞氏)警視の蕃地視察として登山せられ、同十一年四月十七日總督府大石(浩)技師は森林調査にて登山し、其翌十二年七月十二日總督府伊藤(太右衛門)技手の治水調査一行は始めて司加耶武蕃社より登山し、同年八月二十四日總督府高橋(春吉)技師地質調査の爲め復同所より登りて實に第五回なり。勿論探險のため或は搜索或は護衛のため警察官の各方面より登攀せられしは屢のことなれば之を省けり。

□ 羅東よりの道

(一) 辟南ヒクナンよりキャワソノ溪經由 前記の登山者最初より第三回目迄は羅東より入りて辟南鞍部を越え、此れより蕃路を辿りキャワソノ溪と黄金ヶ池とに露營を重ね、歸路はキャワソノ溪一露營にて歸りしなり。

但し大正十年四月辟南鞍部越の道路完成と、昨年より司加耶武社登山道の發見とにより、此の道路の不便と徒勞に屬するに至れり。

(二) 司加耶武經由 羅東より天送埤まで輕便臺車あり夫れより蕃界道となるも、但し現時は森林鐵道の便乘によりて羅東よりタポー八里二十までは徒歩の要なし。タポーよりシキクンを経て辟南鞍部此間七里。次で四里行けば平岩山警戒所若くは司加耶武駐在所兩所間に到着するを得三日の行程なるべし。

ハ 東勢よりの道 (司加耶武經由)

此道は最初東勢より大甲溪左岸の新道路を遡りてより輕便臺車東勢より楓樹脚即ち白毛里。久良栖より烏來里。次ぎ佳陽里。次ぎ司加耶武里。最適當なるべし、尙歸路は二泊にて充分なりとす。

ニ 埔里よりの道 (霧社及び司加耶武經由)

霧社羅東間道路即辟南越を南よりするものにて埔里眉溪間四里十。輕便臺車あり、其れより霧社を經七町。白狗七里三十。次で松嶺六里二十。次ぎ司加耶武三里二十。即ち三日行程たるべし。

ホ 司加耶武蕃社より頂上まで

未だ道路の開鑿なければ警察官の保護と蕃人の嚮道とに依るは勿論、尙搜索隊編制の要あること後述登山記文の如し、而して蕃社よりは司界欄溪を遡り約一里十町にして右岸に攀ぢ、次高支脈の稜線を辿り箕河原(カケシヨハアガイ)に一露營して、翌朝頂巔を究め終らば直下司加耶武社に歸着し得るなり。之れを現今唯一の最捷徑登山適路となす。

へ 薪竹方面よりは容易ならず

從來新竹州にては險阻と蕃情との關係上全く未踏の地域とせられし次高山も、大安溪上流に避難せしシカロー蕃人等は山を越え臺中州下の沙拉茅蕃人と交通せることあるより、理蕃上の踏査と共に次高山の頂上を極むる必要を生じ、御命名後初めて數回の登山探險を試みしこと前既に述べたり。

順路として現今の處將來南庄モギリ間の道路出來することあるべし。大湖より二本松を経てモギリに到り約十六里。此れより斜に大

安溪源頭を横切り次高山南角に攀づる一路あるのみ。(北北大霸尖山よりは蕃人の狩獵路あるものゝ如し——沼井附記)

但しモギリより先は全く道路絶え又遠隔にして容易に企て及ぶべからざること、前探險記の如く、先づ蕃人のみを以て搜索探險せしめしによりても知らるゝなり。即ち普通人には絶體に不可能事たるべし。唯新竹州にては光榮ある管内の名山なるを以て斯く冒險的の探險を行ひしものにあらざらん乎。

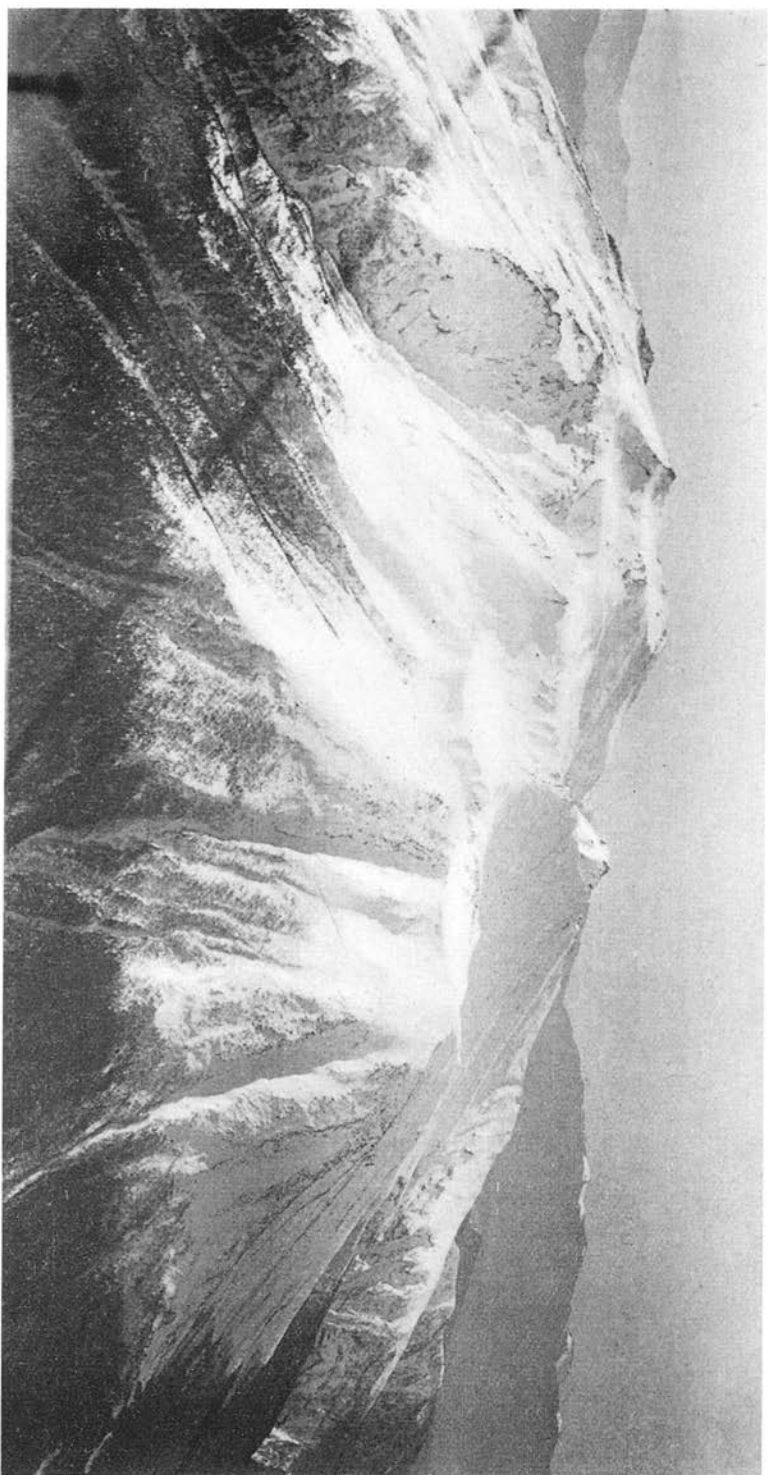
五、登山記行 (略)

六、觀望の好地點と時季

遠距離の眺望にて東方なる宜蘭方面にありては、頭圍羅東間孰れも望み得べけれど殊に宜蘭四結間の眺望を推さざるべからず。次に西方よりは新竹以南鹿港邊までの間に於て所々隱見せるも、就中新竹附近と臺中彰化間の平野等宜しく何づれも雪時を最可なりとす、但臺中附近よりの眺望は連峰重疊(小雪山大雪山次高山と相重なりて見ゆること亦一奇なり、即最奥右方に久しく雪あるものを次高山とす)山姿雄大にして其晴雪の美觀は新高山よりも多く且久しきに亘れること雪翁の名に背かざるなり。

近距離地方としては新竹州大湖郡奥のモギリ及び辟南鞍部を南に越え第二次の警戒所臺中州能高郡

白草山
 高天原(織子岳)↓
 四ノ池
 織摩利支天(北星山)
 三ノ池↓
 一ノ池
 二ノ池↓
 銅ヶ峯



志良節の眺望等最絶佳の處と云ふべし、殊に志良節は恰も御殿場又は吉田の富士に於けるが如く、全姿滿眸に開展し巍然として雲漢を突くの大山は南方より聳立して一二凹凸を刻み緩く東北に延び宛然屏風の如き碧嶂を繞らし、大雪小雪の峯頭は西に隱るゝも前には一萬數百尺の層巒を峙て、松林疎密其間を點彩し、頂巔は高く削岩嶮崖を所々に表出せしめ、壯巖雄偉譬ふるに物なし、其冬期に於ける一大雪巒の實相果して如何ぞや。

沼井附記。現在はモギリ(七二〇〇尺)より更に東方のマダラ(七五〇〇尺)結城(七八〇〇尺)を経て檜山(七六〇〇尺)に越え甲村臺又はサカヤチン社に通ずる道路開通せるより、次高山の展望地は敢てモギリのみにとゞまらず、モギリ結城間及び曙・淡水間の峠道などいづれも可なり、次高山北角の眺めは稜高の或部分を想起せしむるものあり、總じて竹東・大湖兩郡を連絡する此の道路は大崩尖山、次高山、龜山、大雪山、小雪山等の展望旅行に最好適なりと信ず、なほ曙附近より簡單に登り得るといふ鹿場大山(八八五六尺)は更に好き好展望臺ならん。

臺北と次高山とにつきて 從來臺北方面より見たるもの少く又知らざるもの多かりしが、近來草山(湯原)の開れしため自然觀望の機會を興へらるゝこと多くなれり、乃ち誰も秋晴には味爽草山竝に草山道路に注意したきものなり。彼の草山の 貴賓館を始め公共浴場療養所及び其下方等皆眺望を得べし。又北投道の中央なる迎日欄(四阿)と士林道の新斷崖草山公學校の下方とは最眺望絶佳と謂ふべし。頂北投(北投道)より同斷崖迄の間なる坂道にては正面に遠望し得るなり。

觀望の時は夏季にありては快晴の曉天二三時間に限り、秋天は年中の最好時たる云ふまでもなし。但遠望は概して午前中ならざるべからず。

沼井附記。昭和二年九月十八日余等は草山の北なる竹子湖駐在所(海拔約二千二百尺)にて午前八時半頃迄次高山、桃山、南湖大山等の好展望を縦にしたる事あり。

七、歌 (略)

○次高山に就て 大橋

御嶽より乗鞍まで

マレー・ウォルトン

上

日本の山は形などの問題を別にして天下無比の特色を持って居ると云ひ得るのである、それは宗教的觀念である、支那其他に於ても著名の山で神聖視されて居るものはある、古史の研究家にとりてはシナイやオリムパスは靈山の異名とも云へる、又西藏ではエヴェレスト探險隊は先づ祭司に依て山靈の御機嫌を伺ふことを便利と考へられて居る、然るに日本の山は富士、御嶽、筑波は言ふに及ばず其他のさほど有名でない山でも其の頂上か麓に特殊の神が祀られてあり、其祭日が一定して居る。

○山の神

此山岳と神靈とを結付ける觀念は一度高山に登れば直ちに之れを了解し得るのである、其偉大、其孤立、其靜寂、日出日没の莊嚴、登攀に要する努力、此等凡てのものが山岳に特別の地位を與へる、高山は世間的の係累、生活上の鬭争等一切の事物に超越して雲表に聳え、征服者はこゝに其靈性を自由に活躍せしめ得るのである。

前述の如く日本では多くの山は或る神道の神と結付けられて居るが、又特に神聖視されて居るものがある、其隨一は勿論富士山である、富士の頂上には一の神社があつて祭官が仕へて居り、山の開閉には特別なる宗教的の儀式が行はれる、而して其登山者の大部分は宗教的動機に出づるものと謂つても過言ではあるまい（但、一九二一年に余の登りし時日出を無關心に眺めて居るものゝあつたことに驚かされたこともある）、高山中で之に次ぐものは恐らく御嶽であらう。

○御嶽

御嶽山(一〇、〇五〇呎)は飛驒山脈の南端に在つて長野縣と岐阜縣の境に立つ、其南方が深さ約五千呎の谷に依て主要山脈と分離して居るから、或點では御嶽は孤立した山である、又此山は所謂中央アルプス即天龍と木曾の溪谷の間に連る長き山脈とも劃然離れて居るのである、其分界が深いばかりでなく、距離から云ふても中央アルプスの最近點より乗鞍の方に數哩近寄つて居る、加之御嶽と乗鞍とは同系の舊火山であるのに、中央アルプスは全然火山ではない、故に若し御嶽をアルプス系に屬せしめようとするならば、寧ろ北アルプスの南端とせなければならぬ。

御嶽登山者にとり交通は問題でない、中央線の木曾福島又は上松から強行すれば一日で頂上に達し得る、登山家にとりても宗教研究家にとりても御嶽は頗る興味深いものであるに係はらず、外國人にして登山を試みたもの、甚少ないのは不思議と云ふべきである、一九二四年に余の登山した以後、其翌年獨逸人三人の一行を除いて頂上に關する西洋人の記録を見ない、しかもウエストン氏は日本アルプスに關する最初の著書中に、一八九四年に於ける氏の實驗を頗る名筆を以て記述し、大に登山慾を唆つて居るのである、尤も日本人にとりて御嶽の吸引力は頗る強く、所謂御嶽行者が年々三四萬人に上るのである。

○同行者、準備、計畫

今年我々の旅行の前期に於ける目的は御嶽と乗鞍(九、九三〇呎)であつた、今回の同行者は東京のトラスコン鋼鐵會社常務取締役アール・エフ・モッス氏と神戸醫師アンドリュウ・バード博士であつた、モッス氏は日本と米國に於ける登山の經驗に富み、去年の南アルプス行に同行した、又バード博士は屢瑞西の諸山に登り、一九二一年には余と共に富士山に登つたのである。

準備に關しては前記の記述に可成り詳記したから今回は新に經驗した二つの點を擧げるに止める、

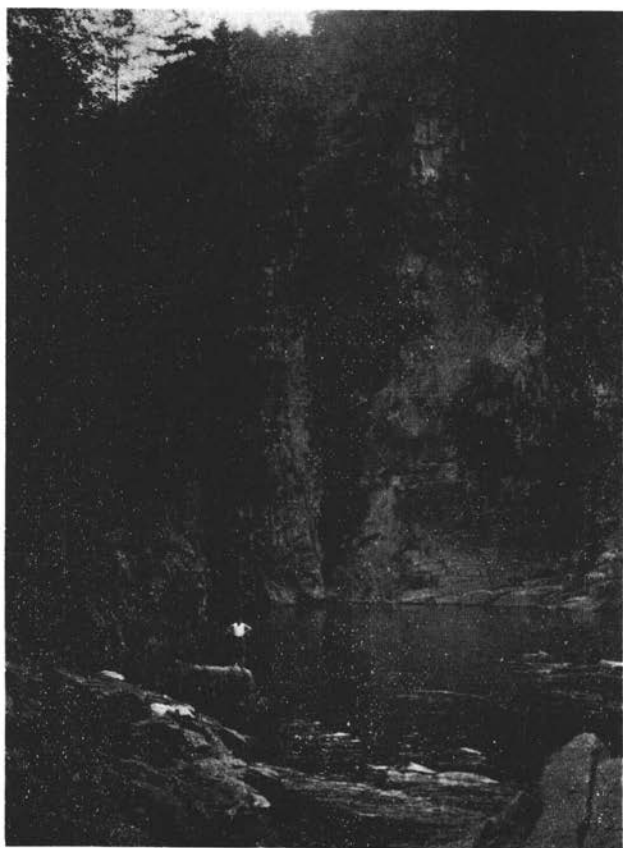
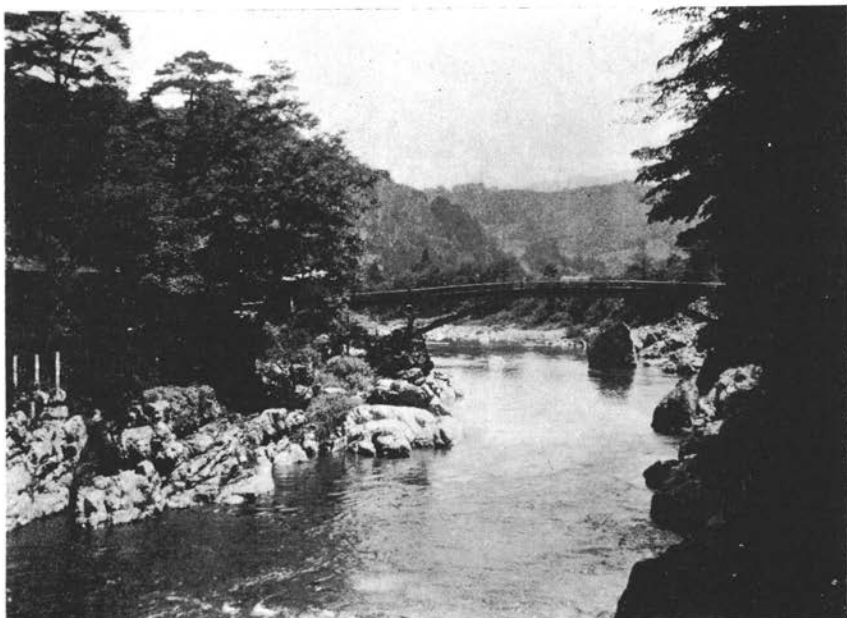
其一はモッス氏に依て發明されたコックテール燗の新用法である、去年はクリーム（牛乳粉）が大に役に立つたのであつたが、其製法が一間題であつた、然るに今年にはコックテール燗を用ゐて大成功を収めたのである、其二是登山用寝袋で、是れ又モッス氏に其功績が歸せらるゝのであつた、それはコロラド山岳クラブの工夫に依る「寝袋」を改良したものである、此袋は元來容積の點でも保温の點でも模範的のものであるが、更にそれに四つの骨を附けた空氣蒲團を縫着けたのである、隨て餘り荷物の重量を増すことなく、且 TENT を張る場所の如何に拘はらず安眠を得せしむる效能があつた。

偕我々の會合地は中仙道の木曾福島と定められてあつた、余は曾て宿泊所を得るのに困難を極めたことがあるので、今回は豫め同地教會の傳道師に宿所の周旋を依頼して置いた爲め、俵屋と云ふ好適の旅館に泊ることが出来た、先年は行者の宿屋に泊り、彼等が登山の歸途往路の辛酸を慰むる爲めの酒宴に廻り合はせて、登山前不眠の苦痛を嘗めたことがあつたが、幸のことには俵屋は行者を泊めぬので大に助かつたのである。

併し今年特に前以て準備をしたことは、三月前に同地の大半が火災により焼失した爲めである、町は狭き谷間に位し、其東方に鐵道が走つて居る、原因が機關車から噴き出された火の粉に歸せらるべきか否かは明瞭でないが、五月の某日鐵道線路に接する物置から發火し、火は忽ち近所の寺に移り、消防隊の盡力も效なく、強風の爲めに火の粉は谷を越えて町内四五ヶ所から同時に火の手を揚げ、遂に其の三分の二が烏有に歸したのであつた。

○案 内 者

余は一行に先だつ一日即土曜日の夕福島に到着した、それは一は經驗上案内者に一日の餘裕を與へて、其計畫を立てしむるを得策としたことにあり、一は余自身が出發の前日たる日曜日を靜かに送りたい希望があつたからである。



上 王瀧日常盤橋（王瀧川に架す）
下 鞍 坡 峽（王瀧に至る途上王瀧川） 岩の高さ約十三丈

ウオルトン氏撮影

余の夕食が終ると直ぐ案内者の清水が來た、彼は五十五歳位の頑丈な男で、日清日露の兩戰役にも從軍して居る、其登山の經驗は殆ど御嶽に限られて居るが、二三度乗鞍迄行つて兩山の案内人たる資格を得たのである、今度の經驗は、彼が最良の案内人とは言へぬが運搬夫從僕としては優秀なる者であることを示した、此案内人又は運搬夫たるには警察署の免許を要するのである。

費用は少しく問題となつた、御嶽登りの運搬夫は賃銀と祝儀で一日五圓を要求した、從來は其半額と食費で足りたのであつた、そこで交渉の結果一日一人五圓とした代りに、彼等自身の費用は彼等の負擔とすることに折合つたのである、清水は案内人兼運搬夫たることを承知したので、全行程に對して他の二人を要するのみであつた、而かも三人目のものは一日後れて出發し、途中で一行に加はることにしたのである。

バード博士は日曜の夕食時分、モッス氏は床に就く時分に到着した、其夜は三人相並んで日本の床の上に明日の發途を豫想しつゝ、安らかな眠に就いた。

○御 嶽 講

我々の記行に入るに先だち、御嶽講に付て一言して置かう、これは信徒三百萬人に上ると云はるゝ、神道一派であつて、特に農夫、商人及遊郭業者に信者が多い、其祭神は病氣快癒や商賣繁昌に御利益があると信ぜられる、信仰は中央日本に於て最も熾烈であるが、其「講」は全國に擴がつて居る、余の記憶に依れば筑波山上の小祠は御嶽講中に依て建てられてある、かゝる講中は年齢や男女の區別を問はず、二三十名乃至數百人を以て組織され、毎月幾らかの掛金を積み、毎年抽籤に依て參詣者を決めるのである、此仕組は頗る少額の費用で旅行を可能ならしむる、名古屋の或る大きな講に屬する一婦人の話に據れば、八十哩を距る名古屋からの參詣が往復の汽車賃其他一切の費用を合せて八圓で足りるのである、各團體には必ず一人の「先達」と一人の「中座」が附く、先達は先導者であつて先端に

鐙の附いた登山用の棒を持つ、又中座は山靈と特別交歡（通語を以てすれば「神移し」）をなす職務を持つて居る、此中座の地位は今日では婦人にも開放されて居るが明治以前は許されなかつた、無論御嶽の頂上は女人禁制であつたからでもある。

○最初の婦人登山者

最初の婦人登山者（後記の例を除く）は尾張侯の婢女であつた、婦人の登山は一百日間の節食其他嚴格な準備を必要とした、此掟は日本の他の山にも適用された、併し今日は其神聖なる頂上に婦人の足跡を許さぬは唯大和の或る山ばかりである、「中座」は普通御幣を其襟に挿して居る、先達は種々の宗教的修法を以て中座を虚心状態に陥れ「神移し」をなさしむる職務がある。

前述の如く山詣の主たる目的は、或種の一時的祝福を受けんとするに在る、余の登山中子供を背ふた人に出逢つたことが二三回あつたが、質問の結果此等は或願を果す爲であることが分つた、即ち昔のハンナの話のやうに子供の授けられんことを祈り、此願が叶へば子供を伴ふて御禮詣をすることを誓ふた結果であつた、此習慣は第十一世紀の頃白河天皇が其妃を伴ふて登山せられたことに其淵源を發して居る、併し御嶽の神聖視せられる眞の起因は時の推移によつて不明に歸した。

○靈神

宗教上の目的で三十三回以上登山した者は特別に表彰されるやうである、兩方の登山路の傍に多くの記念碑が此目的の爲めに立てられてある、其中で一人の男は六十一回登り、一女子は三十三回登つたことが記されてある、此等の登山者は靈神なる宗教的名稱が附けられる、此一群の石碑の中には「秋香」「百代姫」「玉瀧」等の名が讀まれる。

參詣時期は七月十五日から九月十五日迄で、此期間本社は頂上に置かれ、期間以外は麓に移される、黒澤道にある社は五百年以上のものである、頂上の社祠は少彦名命と大己貴命とを祀る、年祭は

七月十八、十九の兩日に行はれる、此外最初の登山者、覺明行者の爲に特別の祠がある、此人は頂上で死し、後日搜索に出た其弟子等に依りて遺骸が発見されたのである、此祠には一心行者及普寛行者の二聖が合祀されてある。

○御嶽登攀

御嶽に登るには二つの路がある、一を黒澤口と云ふ、此道はウエストン氏の「日本アルプス」に記載せられてあるもので、余は前年此道を取つたのである、其二を王瀧口と稱し、今回撰んだ道である、前者は後者に比し眞直であるが、後者の方が恐らく興味に富み、且實際の登り道が短い利益を有する、それは麓に於て十五哩の間自動車の便があるからである、兩者とも一般に取られる道で、前者は名古屋方面からの行者に依て主に選ばれて居る、兎も角我々は王瀧迄徒歩の勞を避くる爲、最初の六哩間常盤橋迄バスに依つたのである、自動車を下りて王瀧川の溪流に架せる奇麗な橋を渡つて、半時間後には澤渡峠に懸り、橋を過ぎて一時間半で頂上の小屋に達した、随分暑くはあつたが海拔千二百呎の上で御嶽の偉大なる景色に酬ゐられた、背景には乗鞍及穗高、槍の諸峯が聳えて居るではないか、小屋は多くの講中の手拭で面白く飾られてあつた、其手拭は爰に泊つた團體が一本づゝ記念として残して行つたものである、小屋に接近して最初の鳥居が立つ。

○東京の行者

暫く休憩して居る間に行者の一團が到着した、東京本所の清運講と知られた商人の一體であつて、其中の三十人許は毎年來るとのことである、各人は型の如く白の行衣を纏ひ、先達と中座とを伴つて居る、小屋から上は小山の裾を通り御嶽の美景を眺めつゝ上る、暫くして道は急下して鞍馬橋に至る、これから道は王瀧川に迫られて細く峻しくなる、兩岸は高さ百呎の絶壁屹立し、其下には水流紺碧を湛へて我等を誘ひ一浴を禁ぜざらしめた。

此所を立ちて間もなく右方に當り地藏尊の一群が置かれてある長い低い小屋を過ぎる、これは小供許りでなく、馬の神なる馬頭觀音であると案内者はいふ、此地點は昔時住民が馬市を開いた所であるとの話だ。

二三町の急な坂を上つて王瀧村に達した、此村は特に記すべきものはないが御嶽登山の眞實の登口であつて、宿屋は良いのが一軒と行者向のが數軒ある、福島から自動車で一時間半かゝり料金は二圓である、こゝで荷物の取纏に少時を費して出發した、村を離れて數分行くと古い鳥居があつて、金文字で「御嶽表口」と彫られてある、こゝから數百ヤードにして道の横手に御嶽神社の里宮がある、境内には多くの記念碑が立つて居る、其中の一つは御嶽の名草「百草」の發見者の爲に建てられたものである、神社の入口には千葉縣の或る講中が獻納した新しい大幟が二筋立つて居る、本社までの道は杉並木によつて小暗くなり尊崇の念を深からしむる、石壇を登り盡すと斷崖を背にした社殿が建てられてある、本殿の奥の靈廟は窟の内にあつて其側から水が噴出して居る、本殿の兩側には種々の末社や天神様の像を入れた祠がある、前者は獅子や蛇や獾などの彫刻で飾られてある、社は甚だ古く其創立の時期は不明であるが文中二年（一三七二年）に修理が行はれた記録がある、全景は自然美に人工美を配して頗る宗教的氣分を濃厚ならしめる、蓋しこれが一宗教としての神道の特色と云へやう、余が莊嚴なる感に撲たれて立つて居る間に一の行者團が到着した、彼等は本殿の前に立止るや直ぐ嚴かな祝詞を唱へ出した、頗る印象的な光景である。

○ウ ル サ イ 蛎

半時間の後に第一日の宿舍と決めた大又小屋に着いた、常盤橋から約八時間かゝつたのである、我々はテントを携帯したのでこゝにキャンプすることに決めた、これは蚤を避ける爲であつたが其代り蛎の犠牲になつた、此一事を除いては此地點は樹木茂り浴すべき川もある申分なき好い場所である。



尺百二千七約高標の屋小 岳御るた見りよ近附屋小の原ノ田



團一の講岳御るけ於に屋小ノ中口瀧王
影撮氏ントルオウ

翌朝は午前八時半に爰を立つた、大又小屋の特色は國常立尊の社である、其祠は三百七十段の石壇上にある、併し頂上の近くに傍道がついて居る爲め參詣者は更に段を下り返す勞から救はれるのである。

副祠の一は三寶荒神と名づけられ、三面六臂を有し、猪の上に踊つて居る、此れはまぎれもなく印度系の神である、元來御嶽講は名義上は神道であるが山の社は佛教の感化を受けて居ることを示す例が少なくない、面白いことには此等の像の手には皆花が插してある、恐らく行者の所行であらう。

社からの横道は本道と新瀧（又は王瀧）道とに合する、そこから二十分にして瀧に達するのである、此瀧は一五六呎の高さを有し潔めの特別の場所である、行者は裸となり瀧に打たれつゝ、祝詞を唱へる、彼等の一隊が殆ど衣服を纏ふたときに我々は到達したのであつた、茲に特別の興味を引く岩窟がある、西藏には普通だが日本には稀にあるもので、行者が苦行の爲に自ら閉ぢ籠る窟である、此窟屋の口は格子戸で塞がれ、内には二つの穴がある、閉居の期間は一十日で其間外出しないやうに思はれて居る、併し此規則は何れほど履行されたかに付ては異説がある、即ち行者は王瀧迄米を買ひに出たと云ふのである、果して然らばこの行者は身延のそれと對象さるべきものである、後者は殺人罪を犯して同じやうな窟に閉籠り、十年間隠れさせて遂に逮捕を免れたのであつた、併し彼は十年間の黙想に依て罪を悔ひ、後の十年を其贖罪の爲に捧げんと決心したのであつた、此様な窟も現在は警察署の許可なくしては入ることが出来ない。

○「神 移 し」

こゝから尾根を越す近道があつて他の聖瀑清瀧（王瀧より六呎短い）に導く、其傍に大きな小屋があつて本道に近い爲繁昌して居る、我々の第二の休憩所は鼻戸であつた、爰で行者の一隊に追ひ付いた、此一隊は余の舊住所であつた東京牛込の區民であつたが、會話の中に其中の一人は余の地主の親

○御嶽より乗鞍まで ウォルトン

類であることが分つた。

こゝで林が途切れて草路となり御嶽の頂上が明かに眼に入ることゝなつた、草地の頂上には黒石小屋が立つ、こゝで下山する行者の一群に出會つた、其時彼等は「神降ろし」をして居る所であつたが、一回の「行」が濟むと失神状態にあつた中座は瞬時にして常態に復したのである、二度目の「行」が始められやうとした時、卒かに驟雨が來たので行者達は忽ち吳茱萸を纏ふて散り々々になり下山の途に就いた、其時小屋の亭主は今しがた行者が各神前に供へた餅（其亭主の賣つて居るもの）を取集めて持歸つたのを目撃した。

雨は直きに止むので我々は行程を進めた、が、又間もなく大降となつたので大急ぎで「中小屋」に飛び込み、雨具を取り出し之を被て再び進行を續けた、此地點の直下より三哩間の森林中を登つて田ノ原小屋に着いた、中小屋の少し下から左に曲る道があつて御嶽の支峯たる三笠山（七、四〇八呎）の頂上に通ずる、併し此れは特に名あるものではない。

下

當初の計畫では此日の夕方迄に頂上に達する筈であつたが天候の爲めに計畫が齟齬した、併し其結果屋根の下で安眠を取る僥倖を得たのである、我々の到着した時此小屋の客は僅に數人に過ぎなかつたが續いて數組の團體が入り込み、夕方には大分賑やかになつた、我々も彼等に伍して雑話を交した、其中に六十九歳と六十五歳の老夫婦があつた、病氣全快の御禮詣に來たものである。

夜に入つて雨が霽れ御嶽は二千七百呎の姿となつて我々の頭上を壓迫して居る、何たる偉大の光景！進行を止めたことを悔んだのであつたが時已に遅かつた、道は矮樹の一帶を貫通して狭き平地に出で漸次急峻となり、磊々たる岩石を経て遂に全山を壓する一大巖頭に達するのである、其所に雪溪

があつて雪崩となつて落ちんとするのを無形の手で押へて居るやうに見える。

愈夜になると各行者團は夜の勤行を始め出した、それ々に靈神の畫像を前にして先達の背ろに小團を作り祝詞を唱へる、其熱の高調した頃先達は奇妙な身振をし、奇聲を出し御幣を打振りて自ら感情を興奮せしむるやうに見へた、其間に一團のものは單調な祝詞を續けて居る、忽ち一坐が沈黙に落ちると中坐は所謂「印を結び」自制を失つた有様で活潑の運動を始めた、其の發音中聞き分けることの出来たのは潔めの言葉と神道の神の名のみであつた、かくて漸次靜肅に歸り御勤めは終つた。

○信仰と努力

一坐が靜肅になつたとき中坐の督促に應じて一人の青年が特別の加治を請ふ爲列前に出た、其男を坐らせ兩脚を開かせた中に中坐が跪き、再び「行」が始められた、中坐は呪文を唱へつゝ全力を盡して男の身中から不淨を抜き出さんとする動作をなし、了ると狂亂的に其男の上に御幣を振り、一同は各自珠數で男の脚を擦つて居たが、遂に病魔は逐ひ出されて其男は元の坐に戻された、其次には子供身の代として携へられた着物に對して同様のことが繰返へされた。

夜が更けて凡てが鎮まり、我々も寢袋に這入つた、バードはモッスに、職業上の義務を免れ自己の醫師たることさへ忘れて居る安逸さを囁いて居つたが、俄然我々の隣りに寢て居た一團が熱烈な祈禱を始め出したと思ふ間もなく、小屋の亭主が余の所に來て「御同伴の方はお医者様ではないでせうか、病人が出來たのです何が何とかして下さいませんか」と願ふのであつた、バードは既に多數の靈的の醫者が附いて居るのに自分などが出る必要はあるまいと遠慮をしたが、其一團の先達が來て懇願したので遂に診察することになつた、病人は五十位の婦人で軽い心臟病であつたから、小量のウキスキと二三の注意と通風の效果とで忽ち全快した。

自分達も偶然に新鮮な空氣を得て爽快を覺えた、翌朝は其婦人を先だて團體の全部が來て感謝を表

した、蓋し婦人の病氣に依て全員の眞劍なる祈禱となり、彼等の中にある不淨の一切が潔められたものであらう。

○松明に依る登攀

此日余は頂上で日の出を見る爲に午前三時に起きた、一二の團體は既に出發し、其他は余と共に小屋を立つた、夜がまた暗いので彼等は松明を以て道を照すのであつた、松明の光に照らし出される白衣姿！それが互に黒き影となつて跳躍する光景！上方遙に聞ゆる咏歌の聲！それが山側に落ちて起る反響！深い々々印象を余に與へたのである、半途迄上つたとき幾つかの檻がある、其一つを懷中電燈で照らしたら猪の像であつた、此地點は「ハキカヘ」と稱せられ、參詣者はこゝで其草鞋を更へるのである、山側には幾萬の古草鞋が堆積せられてあつた、上ること少時にして雲が起つて來、風もだん／＼冷たく且烈しくなつて來た、四時半頃に頂上にある小屋に着いたが雲の晴れる見込で尙烈風の中を半時間絶頂に向つて突進した、併し此等の努力は無益であつた、風雨や雲霧が益劇しいので何物をも得ずにその小屋に這入つた、小屋の亭主は三年前に訪れた余を記憶し大に歡待したのである、其時十一位の子供が居たが亭主の息子で夏休を爰に暮らすのだと云ふ、此小屋は王瀧・黒澤兩道の合する地點に在つて御嶽の絶頂劍ヶ峯にある奥の院の直下である、爰には覺明靈神を中心にして數多の像が立つ、行者は絶えず爰に參詣して様々の供物を獻げて居る、彼等は先づ此祠に詣つてそれぞれの祈願をなした後、小屋に戻つて茶をすゝつたり休んだりして、それから隣家で金剛杖や白衣に記念印を押して貰つたり、記念ハガキを出したりするのである、郵便局は登山期間中置かれるものである。

御嶽は死火山であつて數個の舊噴火口には水を湛へて居る、一二箇所煙を噴いて居る所もあり、王瀧口から頂上に近づくに従ひ硫黃の臭氣を感じる、併し噴火したのは最早人の記憶に残つて居らな

い、此山は地質學者、植物學者並に登山家、宗教家に大なる興味を提供する。

モツスとバードは十時頃に遣つて來て、自分共の取つた行動を可しとし、頗る得意であつて之を説破することが不可能であつた、それから我々は天氣の回復を待つ爲め約三時間止まつたのであるが豫測は全くはづれて遂に失望に終つた、そこで我々は遂に山の北西側にある嶽ノ湯温泉に行くことに決した。

○御嶽より乗鞍に至る

黒澤道を三四町行き、二の池に出で其左方にある暗い小屋に着き、爰で前日福島で約束して置いた強力と出會つた、嶽ノ湯の道は地圖通りでなく北方の屋根に沿うて摩利支天山(九七〇九呎)の頂上を超えねばならなかつた、此の邊には黒澤道の開拓者たる覺明の石像や王瀧道の發見者普寛の石像が立てゝある、頂上の少し下で乗鞍へ出る道と合する、此道には頗る危険な斷崖がある、兩道の合する所に遅ましき不動像と天狗鼻を持つた摩利支天像があり、山の頂上には小祠や槍形ものが立つて居る。こゝから先は急峻な降りとなり、湯の谷の溪谷を瞰下する山側に沿ひ、假松帯を経て森林中に入り、目的地に達した時は午後四時半であつた。

宿は至極簡素なものであるが湯殿は立派である、湯は硫黃と鐵を多量に含み、湯槽は湯の花で縁取られて居る、併しこゝの交通が便利であつたら恐らく非常に繁昌するであらう、此時の同宿者は御嶽登山の學生數人に過ぎなかつた、此宿では宿帳を額として保存して居る、余等も亦經路と姓名を記入した、英字の初筆である。

○五十三峠

之より乗鞍に出る道に付ては案内者と宿の亭主と其説を異にして居るし、地圖も亦異つて居る、而して我々の實際取つた道は又別のものであつた、雨は夜中強く降つたが朝になつて霽れた、併し道は

濡れて歩行困難である、我々は午前九時少し前出發し、五分許を行いて左折數ヤードにして緋ノ瀧の壯觀を見、數百呎下に流る、濁川の右岸上の路に沿うて秋神川の溪谷に出た、こゝで油紙の即席テントを張つて辨當を遣つた、其の時恰度山雨が一過して上天氣を豫報した、雨の止むのを待つて腰を上げ、五十三峠を指して進行した、併し行けども行けども目指す峠に出でず、其道を誤つたことを發見したときは最早引返すには餘り來過ぎて仕まつたのである。已むなく宮前村迄行きそこから尾根を越す道を取ることに決した、前夜宿屋の亭主が己の經驗で一番の近道として教へて呉れた道を取つた筈であつたが何う間違いたか頗る不明である。

宮前に達するのに前後六時間半を費した、此村は一の典型的山村で山側は悉く開墾されて畑となつて居る、余の興味を引いたことは縣の佛教團に依て次の如き格言を列記した揭示板が立てられてあることであつた。

一、朝 禮拜

一、晝 汗

一、夜 喜悅と休息

之を見て思ひ出すことは英國詩人ブレイクの「朝には考へ、晝には働き、夕には食ひ、夜には休息」の詩句である。

此村から仰ぐと乗鞍嶽の麓に至る途中の鳥屋峠が狭い溪谷の上の右に見える、此邊からの眺めは頗る佳い景色であるが惜しいことには乗鞍は雲に包まれて居た、此村を出て猪ノ鼻と云ふ加奈陀の平原にもありさうな奇妙な名を持つ村を経て、下り道となり、終に松本富山間の國道を中宿と稱する小村に着いた、我々は十時間近く歩み日も急に暮れて來た上、炳の來襲を恐れて居たのであつたが宿屋のあることを聞いて喜び合つたのである、其小さき旅籠屋米倉の主人は、一行が七人であり其中に三人

の外國人のあるのを見て頗る當惑顔であつたが、我々は食事も寢床も要せず唯屋根の下で寢られ、ば可いことを話したので主人夫婦はやつと承諾して二階の小室に案内した、我々は爰に二十哩の強行に疲れた身體を休ませる暇もなく晚餐を攝つて空腹を癒したのである、時刻が既に遅かつたので風呂は最早抜かれた後なのであつたが、モツスはバケツ一杯の湯でも欲しいとて進まぬ亭主にせがむた、廳て湯の準備が出来たと云ふのでモツスは下に降りて行つたところ、其準備は戸外の往來になされてあつた、幸ひ夜も暗く村人は殆ど皆就床した後であつたから、大道でも安穩に沐浴の快を取ることが出来た、村人の言葉は頗る解り難い、殊に著しく耳立つのは句切の多いこと、頗に「ナア」と云ふ音を入れることである、「ナア」は語氣を強めるが美感を殺ぐことと少なくない。

翌朝我々は宿屋の裏を流るゝ益田川で水浴を試み、我々の白哲の皮膚を以て村童を驚ろかした。

報復的に不廉なる米國式宿料を取られて、五哩上の上ヶ洞村に向け宿を出發した、上ヶ洞村の郵便局で英國宛の手紙を出さうとしたら局員に動搖を起し、日本文字が書いてない理由で受付を拒絶されやうとしたのである、此村には子供帽子、酒、煙草、髪飾品、傘、菓子、反物、罐詰、靴、茶瓶、饅頭、麥酒、提灯、タオル其他の物を賣る田舎の三越があつた。

村を去ること約八町で本道は山水畫を實地に見るやうな溪谷を通つて右折し、乗鞍道は左折するのである、數時間登り續けて峠の頂上に達した、中宿より千五百呎上で海拔四千三百呎である、此地點から山の表面を急に左方に上ることとなり、乗鞍表口を示す鳥居と朝日大神の像を過ぎる、これから上は大分樂になり、丈低い樹林や牧場を通つて更に二千五百呎を登つた、此間に犢を伴れた一群の牝牛や一頭の放駒を見た、山中の生物は之のみではなかつた、昆蟲學の素養あるバードは六分間にヒョウモンテフの六種類を發見した。

標高六、八〇〇呎で道は暗い濕けた森の中に進入する、其所此所に腐敗した樹や水溜がある、森の入

口には鳥居が寂しく立つて居る、道が再び険しくなつて來ると木は活氣を加へ、水溜がなくなつて熊笹が之に代る、或場所には木樵の明小屋があつた、二時間と十五分で森を離れた、次の努力は假松を渡り岩を越ゆることであつたが頂上に近づくに從ひ眼界が開け大に勇氣を鼓舞した、乗鞍の頂上は御嶽と等しく火山岩より成る幾つかの峰が屹立し、所々に舊噴火口が在る、我々は今我々の目指した頂上に着いた、こゝに青屋口から登る道が左から來て合さる、然るに我々の頭上には最南端の一峯が赭色を呈して居るではないか、我々の登山は爰で終點に達したと思ひ地圖も亦之を示して居るのに、峯を廻つて見ると更に高い峯が現はれる、峯又峯を廻り一時間半を経てやつと絶頂の小屋に着くことが出來た、峠を發してから殆ど七時間を費した、然るに強力達は未だ遙か下にあるらしい、俄かに暗夜が襲ひ來たので小屋の主人に説いて提灯を持たして迎を出した、暫くして到着した彼等は困憊の極に達して居たのである。

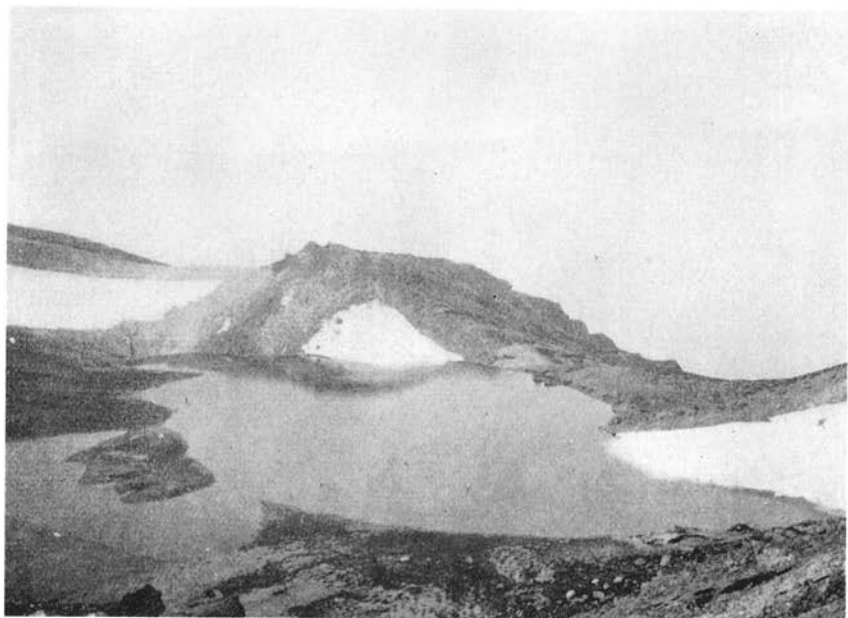
此小さな小屋を今占領して居るものは二十人である、其中には東京の醫者と七十になる老婦が居る、此老婦は願果しの爲其娘と共に登つて來たものであつた、古稀の高齡者が一萬呎の高山を跳ひ廻るなど、云ふことは西洋に於ては未曾有のことである。

頂上には三つの社がある、二つは神道のもので一つは佛教のものであるが何れも餘り古いものではない、此山は岐阜縣と長野縣とに跨つて居るので、岐阜縣の當局者は其祭神に天御中主命を選み頂上の一區劃を中央政府から借入れたことを揭示して居る、然るに長野縣の方では未だ其本尊を定めて居らぬ、佛殿は大日如來を奉安し八月八日を其祭日として居る。

前日の我々の困苦は次の日の日出の光景を以て十二分に償はれたのである、余は屢々日本の諸の山（勿論富士をも含む）で「御來光」を見たが乗鞍の絶景に比すべきものはない、萬籟寂として聲なく、眼下は白雲層々として大海原の觀を呈し、東方の一角太陽未だ浮ばずして僅に金色を漂はし、北方には



峰一の稜山南岳鞍乗



池現權の上頂岳鞍乗
影撮氏ントルオウ

笠、立山、槍、穂高の諸嶽が一群の黒き島となつて現はれ、東の方には南アルプス、駒、北又は間、鹽見、東、荒川、赤石、聖等、余の曾遊の山々が其雄姿を浮かめ、富士は群峯の後ろからこちらを覗いて居る、南方には御嶽が居然として鎮まり返へり、遙か西の方には白山の連峯が見られる、余は始めて日本に於ける一萬呎以上の諸山を一望に集めたのであつた、やゝあつて金縁の波は擴大し、遂に日輪は其莊嚴なる沈黙を以て我々の前に現出した、老婦は拍手を打つて禮拜した、我々も既に敬虔の念に満たされて居たのである、見る見る光景は變化した。雲は動いて一嶺を隠し他峯を現はし、中央アルプス山脈は漸次其姿を露はし來り、諸山を蔽ふた雲も漸く其影を收め、遂に我々は新しき日を迎へたのである。

○乗鞍を下る

小屋に歸つて朝食を取り結束して八時頃こゝを發つた、東方に向つて尾根を下りモア嶽の麓に第二の小屋を過ぎる、道の左に雪で縁とつた權現池を見、峽路を出ると東に向つた山の表である、一大雪溪を経て森林中に入つた、我々は地圖に示してある道路と異つた道を取つたのであつたが後に至りて地圖上の道は年々多少の相違を生ずることを聞いた、尾根を下つて一時間半許りで硫黄氣の強い鑛泉に出會つた、揭示に據れば腦病、胃病、婦人病、切傷、齒痛の一切に利くもので冷きこと水の百倍である、幾つかの溪谷を下り尾根を越え甚だ樂な道を辿る、或る地點で番所原村への岐れ路があつた外は一本筋の道である、約四時間を下つて對岸に白骨温泉を見得る所に出た、近道と見えただけに尾根の表を急降したところ思ひ掛けぬ奇勝に當面したのである、溪流が狭まつて僅かに通ずる原始的の懸橋を渡ることゝ豫想して居たのに、そこは巨大な自然的の堰となつて水は其下をトンネルとなつて流れて居るのである、此れは大方恐ろしき山崩れの結果であらう。

今日の白骨温泉はウエストーン氏の紹介した當時とは全く一變して居る、今は温泉宿が五六軒あつて

自動車の通ずる道から十哩も距つて居るが尙多數の來遊者を引き付け得るのである、我々は柳川と云ふ宿に入り、溪流を見下ろす三階の立派な室に通された、宿屋には設備の整ふた浴場がある外に二つの湯瀧があつて別の興味を興へて居る。

○電 力

翌朝は早く白骨を出發し檜峠を越ゆる道を取つた、此道は平易で且活火山たる燒岳の壯觀を眺めることが出来る、この景色は上高地よりの眺に遙に優るのである、上高地の如く隣峯に妨げらるゝことがないのである、煙は各噴火口より噴出し頗る氣味悪き光景を呈して居る、穂高の頂上の隠見する尾根を北方に進むだ。

峠を越えて大野川村に下る道で水力電氣の建設工事に出會つた、これは乗鞍の水力を以て松本に電光を供する工事である、朝鮮の工夫の働いて居るのを見た、茲に地圖に見えぬ思ひ設けぬ岐れ路があつて大野川村迄の距離を短縮することが出来た、梓川の溪谷に近づいた時に再び水道を過ぎた、此れは二哩のトンネルから噴き出して山側を直瀉し、數百呎下の發電所に落ちるものである、此邊で山崩に對する施設を始めて見た、山側の軟土が年々大雨で崩れ、山の道を削り取つて仕舞ふので雪除のやうな物を造り岩石の山道に落下するのを防ぐ工夫である。

○慄然たる險道

梓川に沿うた道は數ヶ所の發電所に導く鐵道を敷設してある立派な道であつた、白骨から三時間半にして我々の徒行の終點たる奈川渡に達した、此村は梓川の溪流と乗鞍に上る時に通つた溪流との合流點に在る、モツスは東京の同氏の工場に於ける製品を用ゐた發電工事を見ていとど満足の體であつた。

奈川渡と北アルプスの本門である島々との間は乗合自動車が通つて居る、併し此道は他所で見られ

ぬ危険な場所を通過するのである、川は段々低くなり路は段々高くなつて行き、遂に兩者の差が六百呎許となる、呼吸が切迫し身體が緊張し、揖を搦り損なはぬやうにと只管祈念するのみである、蓋し大旅行の大團圓としては相應しきものであらう。

登山家の立場からは御嶽乗鞍登りは他と比して興味は少しく劣るのである、歩行が多くて登攀が少ないからである、尤も山其物は興味に富むで居る、各個に一兩日を費やせば大に有効であつたが不幸にして前者では天候に妨げられ、後者では道に迷ふて時間を空費した、併し假令山岳的の興趣は他に及ばなくとも人間的の面白さは明かに多かつた、御嶽に於ける行者團、其行や會話、様々の傳説を有つた社などは研究家に無限の材料を供するものである、茲に記述したものは問題の一端に過ぎないが此一文が此等の靈山に對する興味を幾分にも刺戟することを得、日本に於ける近代的都市の喧騒氣分を地方の閑寂美に依りて癒す計畫の實行を促す一助ともならば記者の本懐之に過ぐるものはない。就中山嶺の簡素な社祠に依りて超自然の何者かが暗示され、之との交渉に時と力とを費すべきことを命ぜられ居ることを此物質的な時代の中に思ひ起させることを得たら、御嶽乗鞍登山も決して無益でなかつたと言ひ得るのである。

一月の熊野湯附近と澁峠白根越え

吉 澤 一 郎

まへがき

二年前の三月岩菅山にスキーでの登攀を試みてから自分は附近にある笠岳や横手山、白根等をスキーで登つて見たい慾望にかられてゐた。澁峠越えは屢試みられてゐるが之に白根を加へたらさぞ面白い旅が出来るだらうと想像をしてゐた。本年（昭和二年）の一月實際に行つて見て白根から草津までは餘り感心しなかつたが他に於いては充分過ぎる程の満足を得られたのであつた。野澤や關、赤倉等にてカチ／＼雪に惱まされた人は一度この熊野湯附近に遊んだ時必ず満足せらるゝ事と思ふ。熊野湯へ冬行く爲には豫め其の主人山本順次郎に一報せらるゝ必要がある。宛名は長野縣下高井郡平穩村杓野佐藤方でいゝ。

十二月から一月にかけてのスキーの合宿を切上げて矢作氏と共に澁に來り、尙一日湯の主人の家に厄介になつて附近の變つた様子に驚き、一月八日遂に希望に満ちた熊野湯に向つた。

熊野湯附近

一月八日 熊野湯へ。

此の日はいよ／＼熊野湯へ登るので朝も可なり早くから仕度をして居たのであるが、主人のスキーが中々間に合はなかつたので出發は遂に午前十時過ぎに成つてしまつた。

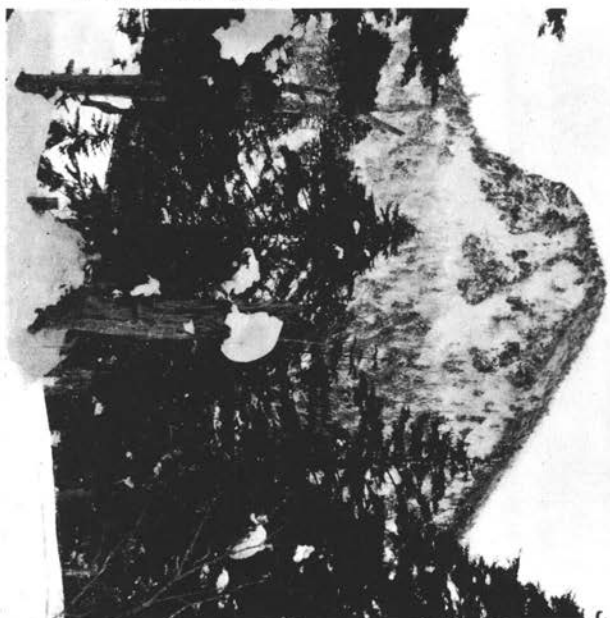
岩菅に登つた當時から見ると此の邊も随分變つたものだ。波坂には物凄い水力の鐵管が眞直に立て



笠ヶ岳窓岩（冬期に於ける登路）

吉澤一郎氏撮影

一月の笠ヶ岳東面



矢作太郎氏撮影

かけられてある。十二澤の曲り角には會社の事務所まで出来てしまつた。沓打の茶屋まで休み乍ら來たので二時間ばかりも要してしまつた。雪の良かつた此の前の時に比べると今日は亦飛んでもない悪雪だ。てんで遊ぶ氣にも成れない、後立山の連峯の後に白銀の劔を見たのも其の時であつたが今は何んと云ふ事だ。近くの山さへも怪げな雲の中に有る、其れでも熊野湯主人の歩き振りと食料運びの人夫の輪標の爲に暫くは此處で待たなければならぬ。一寸の間天氣が良く成つたので懐しい寺小屋や焼額の方が見えて來た。朝日山の西から北へ溜池の上を通つて琵琶池の北端水力の水番小屋に着いたのは午後一時廿分であつた。珍しくも僕を名指して來る人が居た、誰かと思ひきや去る岩菅登山の際發哺まで一緒に行つて炊事の方をやつて呉れた佐藤千歳君であつた。水番の暇に常に滑つてゐると見え顔は例に依り自分等以上の黒さである。自分等と共に來た人と千歳君とを取りかへて熊野湯へ行く事に成つた。大部腹もへつて居るので持つて來た餅をやいてたらふく食ふ。食つてしまへば最早用はない。直ぐ出かけるのも惜しいのでつい近くの急斜面で大いに二、三日溜まつて居た氣分をさらけ出す。此の斜面は丁度朝日山の東北に面してゐるもので、やがてはシャンプエを造り度いと思つてた位面白い所である。すてつべんから眞直に飛び出すと途中では何が何んだかわからなく成つてしまふ。可なりな速力だ。下へ降りて得意に成つてストップしやうと思つた時木株に引つかゝつて見事に棄身をやつたのば實に癢に觸つたが、一寸も一度登りなほしてやる元氣はなかつた。雪質は相變らず悪い。

三時廿五分小屋を出て琵琶池に降る。池は凍つて居るが水の取入口の近くは氷が壊してあるので一寸した所を旨く湖上に出なければならなかつた、下手すると一あび洗禮される恐れがある。湖上を眞直に南へと進む。どうも餘り氣持のいゝものでは無い。其れにスキで湖上を渡るのは自分に取つてはじめての経験であるから尙更であつた。沼の東に出て暫く休む。順次郎はスキの方は餘り達者でない上に、可なり荷をよくばつて背負つて居るため、ストップする時は必ず一度は引くりかへらなけ

れば氣が濟まない様子であつた。此の邊りを池ノ平と云ふ。此れからずつと前橋街道を辿るわけだ。天狗岩（幕岩の對岸附近の曲り角）の附近には嫌なヶ所が二、三度あつた。雪崩の危険も可なり多いしおまけに道がカンカンでスキ一の幅だけもない様な急斜面を横切る所がある。幕岩には見事な太い氷柱が幾筋となくかゝつて居た。幕岩の頭といふのを順次郎は指差して教えて呉れたが多分坊平三角點の南の岩峯の事であらうと思ふ。澤尻（岩倉澤の落ちる附近）に來た時は一面に濃霧につままれてしまつた。最早四時半であるから四邊は相當暗い。

橋を渡つて二度キツクターンをして登つた所から平床の原は始まる。固いクラストの上をキシキシいふ音をさせながら先頭の者はガスの中に消えて行く。實際一寸離れるともう姿は見えなく成るので、僅につけられたスプールを辿らなければ成らない。霧の中から可なりな地藏様が出て來た、之を平床の大地藏と云ふ。雪さへ良かつたら此の邊はスケーターチングの享樂にはもつて來いの場所である。ついで來た犬も嬉しげにあつち此つちと雪の中を馳けめぐつて居る。

濃霧を透して朧の月が見え出した頃、自分等は前橋街道と熊野湯への途との分岐點に立つ白ペンキの案内柱を望み得る様に成つて居た。やがて右へと降る。角間川を渡れば直ぐ前に屋體骨は可なり大きな湯の宿が控えて居る。時に五時十七分。

入口は例に依り持つて來たシャベルで雪を除かなければ成らない。二三十分後中へ入る事が出來たが一時は眞暗で何もわからなかつた。何はともあれ欲しいのは火と水だ。濡物を取つて自分等はほとんど荷物物の整理にかゝる。約一週間は滞在する積りであるから安氣なものである。

客室に炬燵の用意も出來たので、臺所の圍爐裏を引上げて皆同じ所に集りスキイの話に耽る。岩菅に登つた時の想ひ出、それからそれへと盡さず、床に入つたのは十二時近かつた。海拔千六百八十米突の一月は矢張り温い布団にも沁み込んで來るのだ。

附記。天狗岩通過は一月、二月は大概大丈夫であるが、三月頃は危険性が多く成るので、一尾根東の窪を南に登る相である。次に前橋街道から別れて熊野湯へ降る附近は横笹と云ふ小字がついて居る。

一月九日。

夜中に可なり寒い様な気がしたがやはり吹雪であつた。眼がさめて見ると目張りをした戸の隙間から細い粉雪が舞ひ込んで居て、小さな土手を造つてあつた。午前八時頃起きた事は起きたが、どうも面倒なので顔は昨日宿を出る時に洗つたのだから今日は止めにする。矢作が炬燵の中で安曇ぶしをはじめ出した。得意になつてやつてる内が可愛らしい。外は風が馬鹿にひど相なので漸く十時頃にスキーをつけて出かけて見た。完全なスキー場の様に乾燥場のない悲しさに、スキーのビンディングも靴も何もかも皆カチン／＼に凍つて居る。

横笹の棒杭の所へ登つて見た、此處は風當りの強過ぎるためか、所々に粉雪が吹き溜つてゐたが、具合が悪いから止めて裏の赤樺の斜面へ行つて見る。中々グレンデとしては面白い所だけれど、未だほんの降りたてのため雪がしまつてないので下のクラストに觸り、餘り氣持ちよくなかつたが昨日よりは遙かにいゝ。笠の頭が一寸樹林を通して覗へる。午後は再び此處へ来て遅くまで滑つて居た。例に依り無鐵砲をしてスキーを木にはさんでしまひ足の關節を挫いてしまつた。少しずきん／＼痛んだけれども翌日には大した事も無くなつた。

寝る時にふと臨時便所から空を見上げると山の端に三日月がかゝつて居た。然し少し曇り具合が氣に入らなかつた。

一緒に来た犬はエスといふので中々可愛い。障子を閉めて中でガヤ／＼馬鹿話をして居ると、前足で引手の所をこすつて障子をあげ、皆の間に割り込んで来て手をなめたりして御世辭を振りまいて居る。身體こそ大きいが淋しがりやだ。多少の藝も出来る。グレンデへもよく一緒に来て一緒に轉び

乍ら遊んだ。

附記。今度の滞在中に知り得た附近の地名に就いて一言する。

センノ澤 熊野湯の湯の記號のある所へ南から来る小澤を云ひ、赤棒のゲレンデは此の左岸の斜面である。

湯澤 其の東の澤。

河原澤 又其の東の澤で湯澤と合して角間川に注ぐ。

松尾根 横手山と笠岳とを結ぶ尾根。

四ツ角 前橋街道が硯川を過ぎると新舊兩道に別れる、次に又兩道が合した所。

手マヘカラホリ 岩管圖幅で角間川とある角の字と間の字の間に入る澤。

向カラホリ 其の南の澤。

湯坂 向カラホリの澤に架る橋から上、松尾根分岐點までの間。

硯川 草津峠道の北側にある澤。

鉢ノ池 草津峠の西北にある二〇四〇米突の圍の山は即ち鉢ノ山であるが、此の頂上にとても大きな池がある。水は何の位あるか雪

の爲に解らなかつたが、地圖には矢印を入れてもいいと思ふ。

澁池 地圖に硯川とある川の字の五分ばかり北に一八〇〇米突の等高線によつてはさまれた鞍部があるが、此の邊にある一寸した池

である。

モンクチノ澤 志賀山と鉢の間にあり、西に向ふ澤。

ガランノ谷 草津峠の東で東流する大きな澤は草ノ奥澤と聞いたが、草津大坂屋の主人はガランノ谷と云つてゐる。

機手の機ツツリ 松尾根分岐點と澁峠との間の難所なり。

一月十日 赤石山へ。

此の日最初の計劃では、草津峠から鉢ノ山の東面を捲いて、尾根傳ひに赤石に登り、歸りに向志賀、メーデ志賀を経て、平床の大地藏邊に降る積りであつたが、時間の都合上志賀だけを殘してしまつた。無理に行けば目的は完全に達せられた事と思ふ。然しメーデ志賀の三角點から西へ降る尾根は中



む望を岳ヶ笠りよ點岐分根尾松山手横



む望を（景遠右）岳飯御び及（景近左）山手横りよ頂山石赤
影撮氏郎太作矢

々難しい相である。矢作氏は一晩中蚤にせめられて四時頃まで寝られなかつたらしい。一日中寝てもいつも寝呆けた様な顔をしてゐる彼であるから、現状を見ない人でも思ひ半ばに過ぐるものがある。斯くいふ自分も昨日の亂暴がたゞつて足がもろに痛んだ。でも歩いてゐる間にはどうにかなるだらうと思つて出發の仕度にとりかゝる。いつの間にか十時を過ぎてしまつた。案内者は千歳君だつたがいつも大概後からついて來た様だつた。午前十時廿五分湯を出て硯川の茶屋跡に登り、舊道を通つて四ツ角から前橋街道を辿る。然し道どほりに行く必要はない。氣持ちのいゝ廣い所を撰り乍ら進む。約五十分で鉢ノ山と草津峠の北の突起との間に來てしまつた。此の道を滑降して行つたら面白いターンの痛快さを味へる事だろう。鉢ノ山の東斜面で一度腰を据えて煙草を吸ふ。梅の木の疎林だ。緩い大きな雪の斜面に濃い翠の梅の枝、東面は深く遠く、いつか北大のスキーマンを呑んだ薄氣味悪いガランノ谷へ向つて落ちてゐる。目指す赤石の山頂は一つの岩壁を此方に向けて磨く様子をしてゐる。ふと眼を落ちつければ會遊の岩菅が樹林の間に白銀の頭を輝かしてゐる。白砂も遠く上州の雄を誇つてゐた。さすがに其の頂も他の群山を壓して、スキーマウンテナリーの心をそゝるが如くである。小憩の後、尾根筋通りに東北に向ふ。痛快とまでは行かないけれども、まづ愉快位の程度の滑降が味へた。いつか志賀への分岐點も通り越してしまふ。志賀山も此の方面から見るとベツトリとなすくつた大きな雪の壁を見せるので立派である。これから先は只尾根筋さへはずさなければいゝのであるが思ふ様な斜面もない。地圖の上では簡單であるが實際あんなものではなかつた。登つたり降つたり、ひっくりかへつたり轉んだり、頭をぶつかけたり、ガリ／＼で手から血を出したり大騒ぎであつた。それでも一時間半ばかりで赤石山の西直下の岩の根元へ來てしまつた。此處でスキートを脱いでストックだけをもち梅の矮樹をくゞり、ガレの様な所を登つて山頂に達したのは午後十二時四十五分であつた。大沼池がすつかり雪に覆はれて眼下に横はる。志賀は近く、坊平は其の尾根を遠く澁温泉の方へ

落してゐる。岩菅から裏岩菅、笠帽子に續く屏風の如き尾根は眞白であつて、此處からものゝ二時間もかゝらずに達せられさうだ。苗場は何處までも廣く雄大な感じを與へる山である。奥上州の山々が其の右に連らなる。最も大きな横手の左手には富士が霞み、赤城榛名は兄弟の様に立並ぶ。白根は煙のみ見せ、萬座には雲がからんでゐた。日本アルプスの連嶺は之また實に言語に絶して素晴らしく、果てからはてまでと云へば充分であらう。少し風が出て寒くもなつたので岩陰にひそみ、腹こしらへをしてから最後に寫眞をとり、一時廿分山頂に惜しき展望を残してスキーデポットに戻り、往路を其の儘歸路とする、自分達の轉んだ跡にぶつかると皆は人事の様にアハハと笑つて喜んでゐる。頗る暢氣だ。宿を出るのが遅かつた爲志賀廻りは斷念して鉢の頂上に向ふ。千歳君は途中で凍傷を起したので矢作氏が自分の靴下を貸してやつた。鉢の山頂に着いたのは二時三十五分。前にも一寸述べた様に中央に餘り大きな窪みがあるのでびつくりしてしまつた。此處で又食料を平げ、池の周りの高みを半周して眼前に据はる笠の突峯を目標としてドンノステムボーゲンをやる。またゝく間に澁池に出てしまつた。時に三時五分、此處で二人を一寸待ち、一緒に横笹のガリガリの急斜面を横滑りで降り、湯に着いたのは三時十五分であつた。エスが嬉し相に尾を振つて迎へて呉れた。約五時間で往復した事になる。赤石の頂へ出るにはやはり地圖を見ればわかる様に南面から東部へ出て行けばスキーを脱がずに済む事と思ふ。此の日歸つてからすぐ慶應の人が二人熊野湯へやつて來た。

一月十一日 笠岳。

普通の笠への登り道は北面からするものらしいが自分は之を避けて南壁を登つて見た。北面はスキーの登行には少し無理な程度に木が立込んでゐる。何しろ山は二千米突を出てゐるけれども根據地たる熊野湯が近いのと、村界尾根から見た所では大した事もないらしいので、ゆつくり出かける事にした。山頂で晝飯を食べる積りにして出發は十一時であつた。例により温泉を出て赤樺の斜面に一寸し

た峠を登り、村界尾根に出てから松尾根の方へ針ノ木澤の面を捲いて笠の東鞍部の小屋場と稱する所に出る。此の邊も可なり愉快なゲレンデを提供して呉れる。殊に急斜面をおそれる初歩者にとつては適當の斜面及び木立を有してゐる。はじめは夏徑に従つて山頂にとりつかふと思つたけれども、鞍部から四五十米突も小さなキックタインを續けて登つた時に、右側即ち北面に比べて南面即ち左側は明るく非常に愉快相に見える。此處で自分は斷然南面よりの進路をえらんだ。山頂はもう見えな。約百米突下部の所に丁度屋根のない門の如く岩塊が突立つてゐる。右側の岩は笠岳の根の露れであるが、左側の一本獨立してゐたと記憶してゐる。自分はこれを兩方合して窓岩と假稱して置く。こゝから上は全體に於いて比較的急傾斜であつて幅もせまく、従つて自由にキックタインによつて高度を増す事は困難である事を感じる。二三十米突登つた時に梅の頭部の出でゐる下に一寸したクボがあつたので暫く後の二人を待つてゐた。其の内に千歳君がやつて来て、「矢作さんはスキ前金が折れたので歸つた」との事であつたので、二人して山頂を目指す事にした。それからまだ五十米突ある。暫く二人して段階登りにより高度をました。やがて約十米突程の下に來た時スキーは取はづさなければならなかつた。かくして何も外に用意をして來なかつた自分は、表面のクラストになつてゐる所をストックの金具で足場をつくりながらアイゼンなしに登るより外なかつた。午後十二時四十五分遂に山頂に達する事を得た。夏の山頂の有様を知らないけれどももう大半雪に被はれてしまつてゐる。大きな岩塊があつて其の中に何かと祠つてあつた。周りの展望は又赤石よりも尙いゝと云つても差支へあるまい。殊にいゝのは其の山頂が赤石に比べて高山氣分のする點である。南面松川の谷は深く横手山の腰に喰込んでゐた。日本アルプスの眺めは赤石と殆ど同じ程度であつたが、松川の谷を距て、南に並ぶ尤物は殊によかつた。眼を松尾根にやつてそれを辿ると幾つかの起伏の後やがて横手山の腹にせり上つて行く。其處は湯坂の頂上である。夏道に樹林が帶の様に其處だけ明いてゐるので明瞭にわかる。横手

山の所謂横ツツリは凄さうに見える。然し本當のすごい場所は尾根の向側の見えない所にあるのである。風の關係で木が斜面全體に一本もなく、眞冬といふに雪さへまばらで赭茶けた地肌をあらはしてゐた。澁峠は此處からは見えぬ。山田峠との間にある無名の黒い山、そして眞白な白根の前山との間には松川の本當の上流とも云ふべき所に一つの面白い天狗の臍の様な突起がある。何とか名前があるらしいが順次郎も知らなかつた。白根の噴煙が風になびいて盛に左の方に吹いてゐる。尙右に眼を移して行くと萬座山、黒湯山、それに黒い御飯岳の直ぐ後ろに、これに殆んどくつついて直ぐ右に吾妻山が特徴ある頭を並べる。一度其れがくびれて再び持上つたのは猫岳である。いつもスキ場に向ふ時豊野附近で五色ヶ原の様だと憧憬れてゐる廣い斜面は猫岳の直ぐ左にある。其の左手は宛も苗場山の東面の如く削ぎとつた様である。淺間は黒湯山の丁度後に大きく、そして煙はかすかに上る。眼を北に轉ずると先づ心を惹くものは岩菅の二峯であらう。東面だけが白い所が嬉しい。志賀山は其の直ぐ右下に之も二つのこぶを並べる。赤石山には例の岩がしよんぼり見えた。東館と焼額との間の高天原の上には鳥甲が行儀良く鎮座してゐる。懐しい發哺温泉が西館の右下にチヨコンと上下二個立つてゐるのを發見した。全く發見の程度である。白砂方面の見えた事は云ふまでもない。わづらはしい展望の説明はこれ位にして置かふ。岩陰で冷めたい晝飯も終へたので正一時頂を辭する事にした。登りにはスキのキャンテンが殆ど利かぬ程困つたが歸りにはポコ／＼一尺位ももぐるので具合が良かった。之がもし往きの様に固かつたらスキ靴だけでは餘程な危険を伴ふわけである。スキデポットに忽ち着いてしまひ、スキを肩にして尙暫くは注意し乍らも愉快にドン／＼窓岩の所まで降つてしまつた。落ちれば松川まで行かぬまでも可なり停るまでの距離が長くて急であるから要心は必要であらう。窓岩からはスキを着けて、一目散に小屋場まで直滑降する。小屋場から村界尾根を捲く時に一寸迷つたが暫くでそれも見當がつき往路とは違つた谷間を滑り、センノ澤と湯の澤の間の小尾根

を滑つて湯に着いたのは一時五十分であつた。休みも迷ひもしなければ三十分で充分笠から降りて此處まで來られる事と思ふ。茲に注意し度い事は三月頃は頂上は可なり固く凍結してゐるかも知れないから、アイゼンとピッケルだけは必要品だと思ふ。全く窓岩から上は一寸面白いと思ふ。少しばかり冬の間へ來たといふ感じが出る所である。

夕方になつてから澁池に登り、それから平床原へ出て歸つて來た。此處にも一寸面白い所がある。外にまだ色々考へれば一日、半日のコースはあるかも知れないが湯坂を登つて澁峠に出で其れから横手山に登り、天下の眺望を擅にして長い尾根を注意して草津峠に降り、更に西に愉快なボーデンを味ひ乍ら湯に歸へるのは殊にいゝと思ふ。残念乍ら今度はやれなかつたが何れ機會のあり次第試み様と思つてゐる。

附記。熊野湯は本當は湯澤温泉關の湯といふ方が正しいとの事である。此處の湯の花だかが紀州熊野にある温泉と同じ様だといふ旅人があつて、それ以來熊野湯といふのだ相だが、随分おせつかいな旅人もあるものだ。

澁峠白根地藏岳を経て草津へ

一月十三日 快晴。

熊野湯より澁峠、芳ヶ平を経て草津へのコースは可なり今までにも試みられた方もある様であるが、白根を迂廻された人は割に少ない事と思ふ。こゝいふとささも豪さうに聞えるがスキーにのれる程度の人なら誰でもが出来る事なのである。

今日は前日の吹雪とはまるで相違の晴天白日の如き天氣である。未だ朝の陽は横手の影にかくれてゐる。六さんの天下無類の嘯の爲に寐不足ではあつたが六時に起きた。幸運に恵まれた二人はいよいよ今日は草津に越える事が出来るのだと思ふと何とも云へず嬉しくなる。少し亂暴とは思つたが案内

者は連れぬ事にして午前正八時に懐しき熊野湯を後にする。小橋を渡り小さな段を松の木の根元に登るともう平となる。此處で順次郎、六さん、千歳君及び愛嬌者のエヌ君に別れを告げて、自分等のスキは草津への一步を踏み出した。暫らくは平地行進で硯川の橋を渡るとそろ／＼登りにかゝる。

前日の吹雪中を湯坂の頂まで行つた二人のスプールは跡かたもない。前橋街道の新舊兩道に分れる四つ角を過ぎ、手マヘカラホリ、向カラホリに架る小橋を渡るともう本當の登りとなる。前日の吹雪のお影で雪は實に理想的である。忽ちの内に湯坂の頂上まで來てしまつた。九時五分である。眺望は實にもすごいものであつた。

まづ横手からはじまると澁峠の南突起は黒木に覆れながら山田峠に低下してゐる。白根の噴煙は其の影に棚引く。押出しの後右には白根地藏岳が据り、山田峠を中心として附近には一つの黒點をも見出し得ぬ程純白なものである。もう後二時間もすればあの雪を……と思ふと矢も楯もたまらぬ位であつた。山田峠の西峯の右に淺間が見た眼には同じ高さに並んでゐる。それから續いて八ヶ岳・立科・駒があり、四阿・猫・御飯の右手には乗鞍が霞んでゐながらも尙それとわかる位である。北アルプスの山々は云ふも更なり、松尾根に續く笠は小さく尖り北押ししは其の右下にかしこまる。笠と同じ高さには黒姫・飯繩・妙高が連綿としてゐる。全く赤裸な眺望とでも云へるであらう。

矢作氏がスキの故障で一度宿へ歸つたので暫く待つたが、中々來ないので澁峠でまつ事に決めて一人先へ行く事にした。此の松尾根の分岐點は常に風向の關係から南面して大きな雪庇が出來てゐる。一月はまだ樂であるが、三月となるとこの破壊に相當骨が折れるらしい。此の雪庇を踏み壊して夏道の通りに歩く。これから所謂横ツツリと稱する苦手な所にぶつかるわけである。何しろ風當りが馬鹿にひどい爲、そして又木のない爲に地肌が全く露出してゐる所が多い。夏道は明らかにわかるのであるが僅かにつけてあるといふに過ぎないから、其の上に吹き溜つた雪はたゞきつけられて凍つて

しまひ、スキートのカンテンがさつぱり思ふ様に利かぬ。落ちた所が下の方はやはり雪であるから生命には別状ないとしても落ちてしまふまで落ち度くないと思ふからやはり多少恐ろしい。エンサウンサと渾身の力をこめてスキートの角を氷にぶつけるつらさ。地圖に横手山とある山の字の右左にある記號の上部である。それから小尾根を通り越すと嫌な所もあつたが大體に於て容易に澁峠まで来てしまつた（九時四十五分）。峠といつても二千七百七十二米突あれば可なり高い方の部類に入る。だから此處の雪質のいゝのも當然と云へば當然であらう。矢作氏の來るまでと一寸の間甘栗をたべながらスケイチングをやつて見る。芳ヶ平へ降る方に道通りに唐草模様の様なスプールをつけて一人悦に入つて居た。粉雪の上でのスケイチングは全く愉快なものである。暫くは一人で又なき雪を享樂してゐたが餘り來ないので横手の頂まで行つて見る事にした。

梅の森林の中をさるでお伽噺の中でも歩いてゐる様な氣持ちで、枝もたはゝに積つてゐる粉雪をストックで時々拂ひ乍ら登つて行く。二千米突以上の所を歩いてゐる様な氣持ちは更にしない。約百米突も登ると俄然西方のながめが開けて來る。木がないのだ。従つてウインドクラストを形成してゐる所が時々ある。凡そ十五分の後横手山の頂上に立つ事を得た。頂上附近は美事な樹氷に飾られてゐた。これほど立派なのは全くはじめての様な氣がする。頂上の祠は屋根だけを出してゐた。

まづ四方八方青空である事を見極めてからおもむろにスキートを脱ぎ、それに腰を下ろしてバットに火をつける。今日は風もない。太陽は具合よく身體を温めてくれる。全く直ぐ見えては勿體ない様な眺望なのである。後で草津の大坂屋の主人に話した所が全くこんな事は珍らしいとの事であつた。

此處は松尾根分岐點よりも尙更いゝ事は勿論であるが一つ二つは隠れたのもあつた様に記憶してゐる。今自分の書きとめた當時のノートを見ると乗鞍が載つてないで御岳が出てゐる。赤石山頂の眺めに又南方を遮ぎるものゝない今は秩父全部を我がものにする事を得た。赤城榛名の右にピヨコンと出

てゐるのは確かに武甲に違ひない。金峯・朝日と思はれる所は其處だけ白く光つてゐる。其の上に富士の靈峯を拜する事を得た。日光の男體・白根の見えたのはとも角として、一番嬉しかつたのは八岳の右に北岳仙丈を發見した事である。此の遠い上信の國境より北岳の白銀を見やうとは全然思つても居なかつた事であるから。

かくして身に餘つた展望を得て後澁峠に再び戻る。約五分間ではあつたが森林滑降の快味は充分過ぎる程味はへた。程經てから熊野湯に自分等より後から來て二日ばかり一緒に居た慶應の人が二人やつて來て一足先へ白根へ行つた。矢作氏は暫く後にあらはれる。まづ少し早いが握飯を一つたべて彼は横手へ行つた。自分は其の間又附近を滑りまはつてゐた。澁峠の上州分の所を「池ノ塔」といふ相である。

十一時三十五分二人は結束して澁峠に別れて南へと進む、少しばかりの登りで後は山田峠まですつかり降りである。いよゝ粉雪の愉快さも之で終りにならうとは思はなかつた。森林中はいゝが草地の所は變なバリ／＼で、實際ボーゲンも思ふ様に出來ず不愉快であつた。四十分で山田峠の地藏様に辿りつく。こゝは東から西へ風が通ると見え地藏の東側には面白く雪が凍りついて居た。藏王の刈田と熊野の間では少しこれよりは大きな同じ様なものを見た事がある。

峠からは少しばかり夏道よりは上をまき、一つ南の鞍部に出で之から白根地藏岳へは殆ど村界に沿つて登りつめた。枯れた木ばかりが立つてゐて、全く荒涼たる姿である。白根一帯は風が強く案に相違して至る所バリ／＼雪ばかりで非常につまらなかつた。こんな事なら澁峠道を正直に芳ヶ平に降れば良かったと思つても後の祭りであるに合はない。

地藏岳頂上まで山田峠より三十分。頂上より少し南に降つた所から見た湯釜は實に凄慘其ものであつた。頂上は岩石が露出して居てスキーで歩く様な所ではない。不愉快な滑降を續けて正一時弓池に



(點地るす要を意注は央中) リツッ横の手横



側西の岳藏地根白

影撮氏耶太作矢

出た。弓池の附近には無人の小屋が二三あつた。本白根へ行く豫定を變更して直ちにこゝから草津道に出る事にしてしまつた。はじめは等高線の數字ある尾根（其の南は入道澤、北は毒水ノ川といふ。）を降る積りであつたが、岩や枯木がむき出しでどうにもならず、芳ヶ平の方へ出る事にした。

毒水ノ川の北に一八八〇米の圈を有する峯があるが、其れから東に出てゐる尾根の突端へ出てしまつたので、スキ―を脱いで降る積りであつたが地圖では一寸思ひつかぬ程急で、下がおまけにしぼんでゐるので又戻る事にした。殊に矢作氏が十間ばかりスキ―をかついだ儘流されてから急におぢ氣がついてしまつたわけである。尾根の東下に家が一軒あつたがそれは香草ノ湯といふ相である。人は居なかつた。前記の峯の西側までスキ―を擔ぎあげ、ひどいウインドクラストの上を尻餅をつき乍ら芳ヶ平の手前に出で櫻清水を通り、五郎清水、戸渡り、谷澤橋を経て草津の神社の裏手に出で、大坂屋に着いたのは四時半であつた。降路で面白かつたのは谷澤原だけで、あとは少しも面白くなかつた。新雪でもあれば又非常に愉快であらうと思ふ。

附記。本白根に草津から登るには丁度中ほどに殺生小屋といふのがある相である。武具脱池は地圖よりは三百米突位下方で、一五二
三米の獨立標高點の北西々にあつて、小屋は其の上の方にあるとの事である。

アイガー東山稜の登攀（日記より）

渡邊 八郎

此の夏七月頃の新聞紙上に、在英國の松方三郎君と浦松佐美太郎君とが山案内者エミールとアラバンドの二人をつれて、瑞西のアイガー東尾根を「ホルンリー」を越えて登攀した記事が外國電報として載つてゐた。次で僕の手許にも一英人から之に關する瑞西新

聞の切抜が届けられた。僕にとつては實に感じの深い知せだ。と云ふのは丁度一年前の此頃横有恒君、松方君と共に、同じ山稜を試みて爲し遂げ得なかつた、残り惜しい、懐かしい記憶が尙鮮かに残つてゐるから。て、早速に當時の日記を取り出して繙いてみた。……どこからとなしに、閑かに群れて歩む牧牛の鈴の音がきこえて来るやうに感じられる。室の窓を開けば、疵らに雪を戴いたアイガーの雄姿が、すゞ眼の前に現はれてゐるやうに思ふ……

此の日記は、たゞ自分獨りの思ひ出として書いたものにすぎない。しかし、あのアイガーの東山稜を初めて登り開いたその横君が五年後の昨年、同じ路を——而かも其後まだ何人にも踏み汚されずに残されてゐた——を再び訪づれたことを知る人は少なからうし、又松方、浦松の二君による此夏の登攀が、斯く傳へられた事情を審にせぬ人もあるかも知れない。すれば之を公けにすることが特殊の人に多少の興味を興へぬとも限らぬ。ともかくも自分には忘れ難い経験だ。しばしその思ひ出に耽るを許し且つは僕を山へ導いて下さつた方々にお禮の心を致す機会を興へてもらいたい。(昭和二年九月上旬)

一

九月九日の朝。秩父宮殿下のツェルマット御出發を御見送りした僕等は、翌朝そこを引きあげて、ピスプでジュネーブに向ふ松本君と別れ、再びグリンデルワルドに戻つてきた。實にそれは十二日目だ。そして横、松方の兩君は住みなれた「ホテル・アドラー」へ、僕は一人「ホテル、テルミヌス」に宿る。それから今日(二十一日)まで、毎日秋の朗かな天候が続いた。眼のさきに聳えてゐる高峯は、朝夕僕に登行を誘ふ。けれど種々の事情に妨げられて果さず、やう／＼三人の都合がついて、メンヒをグギグライトから登り、次で宿の娘二人をつれて三度フィンスターアールホルンを訪づれることが出来たものの、之で此の夏の、否僕にとつては恐らく永久の、瑞西登山の終焉とするには、尙物足らぬものがあつた。

ところが昨日(二十日)、アマッターのすゝめる一言が、俄然二十二日からアイガー全山稜の登行を決定せしめることになつたのだ。

アイガー東山稜の再登攀！横君にとつては實に感慨の深いものがあらう。五年前の山案内者達はそ

れだけの齡を重ねこそすれ皆健在で元氣だ。そしてその初登攀を記念したミッテルレギーの山小屋は、彼等の手によつて今や完備したときく。のみならずその山稜の險阻な岩壁に綱をかけようとの企てが、恰かも楨君のグリンデルワルドへ來た此の夏に實現される運びとなつて、つい數日前に完了し、その登行路が一般に開かれながら、まだ此の土地の者以外には何人によつても試みられてゐない。登るは此の時期。幸に九月も中旬をすぎながらまだ天候の變らない此の數日に。

こみ上げる胸の轟きを静めようと、獨りソフアーの上に横はりながら、楨君の著「山行」の一節を讀みかへす。あゝ余にとつても大きな試みだ。此の夏に初めて行ふた登山の生活の、蓋し最終の企てとして淺からぬ意義をもつ。アイガー山稜の東端、ウンター・グレッチャの側に聳立するホルンリーの岩壁から登り出して、ミッテルレギーの小屋に一泊し、その翌日アイガー東尾根の難險を直ちに頂上へと向ひ、一氣にアイガー・グレッチャへと降る行程は、たとへ新たに繩がかけられたとは云へ、決して容易な登行ぢやない。自分の心身には或は大きすぎるものだらう。しかし自分の氣分は勇んでゐる。欣んで此の難き試練をうけてみようとの心がまゑが出來た。

起き直つて机に向ふと、室の窓枠をそのまゝに額縁としてアイガーの端麗な姿が一ばいに目のさきに見られてゐる。明日、否明後日にはそこに立つことが出来るのだ。一月末から此の山村に入り來る毎に、朝夕ながめ親んでゐるアイガー。住みなれた此の宿の室からは叫べは答へるかと思はるゝアイガー。希くは此の微弱なからだを爾の頂きに抱き上げてくれ。しばし爾の雄偉な體軀の上に氣まゝに跳ね歩く余を許してくれ。

アイガーの頂は、煙のように白雲を吐いてゐる。(大正十五年九月二十一日(火))

二

二十二日。

午前二時に扉をたゞかれる。その前に既に目はさめてゐた。

宿の娘二人が起きてゐて出發前の用意をしてくれる。

コーヒとパン。それに今朝は卵が一つ加はつてゐた。いそいでそれをのみ込んでホテルを出る。月の牙を渡つた夜。寂まりかへつた山里の一本路を只獨り歩いて行く。夜氣がジツト身に沁みて氣持がよゝ。

三時前に「ホテル・アドラー」につく。既にアマッターは玄關に立つてゐた。横君等は食事中である。外庭のベンチに腰かけて月に見入る。フキツシャーヴンドの雪壁がクッキリと隈どられ、音なくして流れる氷河の上に月光が輝く。

やがてブラバンドもエミールもフリッツも集まつて來た。各自のリュック、サックに食糧品の分配をやつてゐる。間もなく横君、松方君も出て來る。

三時半頃、「では、出かけようか」の挨拶に、ウンター・グレッツチャーへの路を下る。かつてブラバンドと横君とにつれられて、松本君と共に初めて、岩登りの稽古をさせられたシュルフトの岩壁の前を通る。雨にぬれた岩の面に、初めて試みた靴の裏の鋌の觸れ具合の氣味悪かつたことが思ひ起される。

ウンター・グレッツチャーの右側をからみて登る。ホルンリーとはそこに聳える數個の尖頭を持つ岩山に名づけられたもので、それがアイガーの長い東尾根の最後の端をなしてゐる。これだけでは高さも餘り高からず且つ相當に登攀も容易でないためか、今まであまり登り手がない。同行の案内者連中で

はアマッター一人が一度経験したときいた。

樹の下路をぬけ出た頃には、夜は全く明けた。岩角に憩ふて朝食をとる。少し登り出して鋸の山靴を岩登靴クライミングシューズにはき更る。繩を結び合ふ。僕は第一の組に入る。先登がアマッター、次がエミール、最後が僕。第二組はフリッツと松方君。第三組はブラバンドと横君。エミールはアマッターの登攀を助けるためと云ふ。

石灰岩の脆いそしてすべり易い岩質。可なり難儀だ。登るにつれてグリンデルワルドの村がすぐ足の下に見える。こんなに近く人里を眼下に見たことはない。人の家々をあまり近く見下すのは、一層高さの感じを鋭くさせるためか氣持のよいものぢやない。

十時三十分、一の鞍部についた。するとグリンデルワルドの驛附近からピカリと光が来る。きつとホテル・テルミヌスの娘等が大鏡を持ち出して太陽に向けて合圖してゐるのに相違ない。双眼鏡で見ると、郵便局の隣、強度の望遠鏡の備をつけてあるとおぼしい場所に人が集まつてゐる。自分等も帽子や手巾を振ふ。

珍らしくもアマッターがコツヘルを取り出して茶を沸すと云ふ。ではその間にスタインマンを建てて来ようと云ふので、他の者は更に東端へと山稜を傳ふて行く。今日は大分のびた登山だ。今まで登山の中途にコツヘルを使用したことは一度もなかつた。フューラー達は強の者をろい。一行の中で一番弱い自分も、此の夏の経験で、今のところは先づ他と伍して行かれるだけに鍛えられてゐる。目的はアイガーの全山稜。今宵はフューラー達が自分等の別荘のように大切にしているミツテルレギーの小屋宿り。そして頂上への山稜には、つい數日前に彼等の手で太繩を數本かけ終つたところ。日夕なごめ親めるアイガーと共に永久に忘れ難い楨君を再びつかまえて、五年前の初登攀を思ひ出しながら行こうと云ふ彼等の計畫では、たしかにのびざるを得まい。

鞍部で一時間半も休んだ。前途には尙二つ高い岩の峯がのこつてゐる。それを越せばなだらかな尾根傳ひにすぐミツテルレギーの小屋へ達す。三時間位もあれば十分とフェーラー達は考へてゐるらしい。しかし一人もまだ此の路を小屋へ行つた者はないのだ。

一ツ峯を越した。ホルンリー中で一番高いホルンだ。そして可なり深い岩山の切れ目に下つた。そこから今一度岩壁を攀ぢ上ると最後のホルンに立つ。それから比較的なだらかな尾根傳ひとなる。

すると先登に行くアマッターは前に直立する岩壁を見上げてためらうた。手がゝりが全くない。續くエミールが、では俺がやつてみようかと先きへ出る。彼は細い岩の割目にしがみついて遮二無二に二三間登る。がその先きが全く動けなくなる。彼は一旦降つて此度は別の割目を斜に登り出した。殆んど手懸りも足懸りもない所を、彼一流の技術と大膽さで登つて行つて姿が見えなくなる。アマッターはその繩をとつてゐる。やがて彼は大聲に叫び出した。大丈夫此の路が上れると言ふのだ。けれど他の連中は容易に同意しない。殊に直前の岩壁をまだ降りさらないでゐたフリッツは、エミールの主張に強く反對する。蓋し彼の位置からはエミールの状態が能く見えるらしい。エミールの登りついた場所は、只彼れにして初めて可能を認め得るほどの確實性しかないものと思はれる。

時が徒らにすぎた。とうとうエミールも我を折つて、辛じて登つた岩の面を再び降つてきた。何故に後から登つて來ないのかと不平顔してゐる。ブラバンドが更に今一度、エミールの最初に試みた岩壁にかぢり附く。が、矢張二三間さきで手がゝりを失ふてしまふ。もしこゝに二三本の釘を持ち合せてゐたら……と残念がる。

フリッツの主張で、とうとう此の最後の峯を右にからみてアイガーの尾根へ出ることになつた。それが爲めには大分下らなければならぬ。もう斯うなつては豫期のようにホルンリーの全山稜を越えてアイガーへ出たとは云へなくなる。グリンデルワルド第一流の強の者、四人も打ち揃ふての此の失

態は、たしかに彼等に大きな癩の種だ。けれど時刻がもう大分経過した。たとへエミールの主張を行ひ得るとしても、今となつてはミッテルレギー小屋へ達するには夜に入つて仕舞ふ。さては鞍部での一時間半の呑氣さがチト長すぎた様だ。

下り出すと俄かに霧がかゝつて來た。しかも傾斜の急と岩質の悪さは、一行の行動を甚しく遅々たらしめる。そしてよう／＼のことで左へからめようとする邊に達した頃は、後に續く組が見えぬまでに霧が濃くなつた。もはや此の裡を小屋への登攀は不可能だと云ふ事になる。と云つて此の邊で一夜を明かすには、用意が出來てゐない。執るべき途は此のまゝ、一氣にアルビグレンまで下つて、その人家に一泊し、明朝晴天ならばアルビグレンから直ちにアイガーのグリンデルワルドに向ふ雪と岩の面をミッテルレギーの小屋をめがけて登つて行くより外にない。

晴れ渡つた蒼天の下、グリンデルワルドの里を直下に見て、沸したこの熱い紅茶に鼻歌うとうてゐた頃には、吾等の頭裡にホルンリーの登攀などは問題でなかつた。ミッテルレギーの小屋に初めて横君を迎ふる今宵の期待で充滿してゐた。九時を期してグリンデルワルドとアイガーとで合圖し合ふ火花がフューラー達のリュックサックには用意されてゐたのだ。クレッテルシュューを鉄靴にかへて、更に岩角を下りはじめ。日は暮れた。山提灯に辛じて足場をてらして下る危険さ。こうなると一時に疲れが出てくるやうに感じる。

よう／＼岩壁を下りきると左へ折れて、雜草と樹木の中をひたすらにアルビグレンへと進む。僕にとつてはかゝる山路が却つて苦しい。急激に足が左右へくゞるのが、一番僕の足の痛み——魚の目——にこたえる。

もはや互の繩は解いてゐた。エミールが常に僕の後からついて來て氣をつけてくれる。「ゆつくりお歩きなさい」と屢々慰めてくれる。いつの間にか僕とエミールとが遙かに後にのこされた。一行の燈

火は遠くさきの樹の間に隠見してゐる。今までの山登りで、恐らく此の時ほど汗を流した経験はなかつたと思ふ。胸部のボタン―上衣も、チョッキも、シャツも―のすべてをはづして、夜風に膚をあてながら歩いてゐても、尙汗が雨滴のように全身に流れてゐる。

アルピグレンの小さいホテルへ着いたのは八時頃で、皆相應に勞れてゐた。下着をかへ、食事をつてはじめて我にかへる。

霧はいつしか霽れた。明日は晴天らしい。しかしアルピグレンからするミッテルレギーへの登行は取りやめて、アイスマヤールを廻ることにきまる。

ホルンリーから急に村へ降り出したことが、夜に入つてから、我等の燈火によつてグリンデルワルドの人々に知れ、何か急變が出來たものと案じられたらしい。アマッターの家のと、ブラバンドの関係者とが、その夜、アルピグレンまで見舞に來たと、後で聞いた。

三

二十三日。

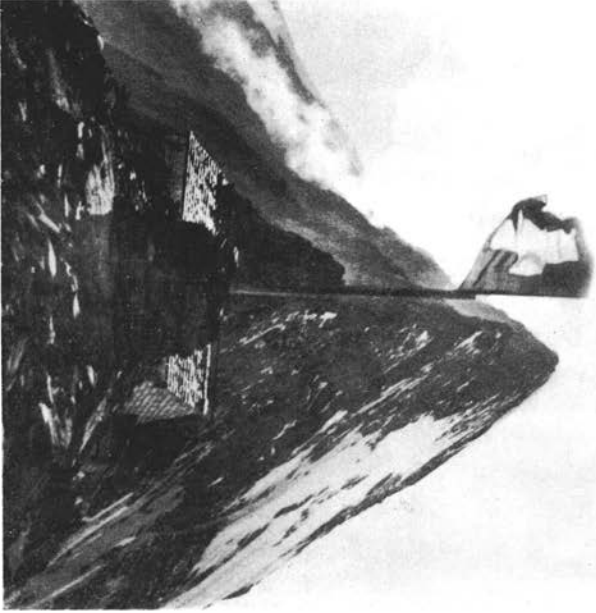
グッスリ寝込んで全く元氣は回復した。家の外へ出てみると、エミールは殘念そうな顔付きで、ホルンリーの峯を仰いでゐる。口惜しいであらう。彼の優れた山登りの技能にかけては、一度び志ざして爲し遂げ得なかつた経験はなかつたらうに。

十時半頃アルピグレンを通る電車に乗る。アイスマヤールから、ミッテルレギーへの行路をとる。それは氷河を越えてアイガーの腹にとりつけば、ミッテルレギーの小屋へは極めて容易に達することが出来る。

三時頃にその小屋についた。楨君の初登山を紀念して、グリンデルワルドの山案内者の組合が建て



アイガール山ミツチルレギ・フモツにて（權及松方の二氏）



ミツチルレギ・フモツより見たるアイガール山

たもので、小さいが格好よく整つてゐる。アイガールの鋭い尾根によくも建てられたものだ。前面は辛じて通路とするだけの餘地しかなく、裏側に取りつけられた便所は、グリンデルワルドへの絶壁の上にはり出されてゐる。

内部に入ると、直に楨君の寫眞の引き伸しが目につく。山繩の圓い束ねとビッケル二本とを浮かしに彫りぬいた木製の額縁に、楨君の半身姿がおさめられてある。五年前の楨君は若い。しかもそれはアイガールの登行に成功して正にグリンデルワルドへ戻りついた時にカメラにおさめられたその顔だ。自分は之をながめた眼をそのまゝに、現に傍に立つ楨君に移さずにはゐられなかつたが、此の場所、五年前の己の姿を見せつけられた楨君の胸の裡には、定めし人に語り得ない感想の切ないものがあつたことと思ふ。

一通り荷物をならべ終ると、フリッツはリュックサックの中から瑞西の國旗をとり出して小屋を出て行つた。何をするかと従つて出てみると、小屋から二間ばかり離れた所の山稜に建てられてあつた高い棒の上にその國旗を結びつけた。聞けばそれは今日のために彼の細君が心をこめて調製したものと云ふ。グリンデルワルドの望遠鏡に果して此の旗が映じたらうか。

小屋での生活は、いつも同じ心のどけさがあるが、今日は又此の小屋がフューラー達自身の手で成つたものであり、彼等は皆かつて楨君を擁してアイガー東山稜の初登攀をやつた者であり、而かも更に明日の登行は、彼等の手によつてかけられた太繩の初試みでもあるところから、フューラー達の気分は自から晴れやかに活々してゐた。お茶がすむとアマッターとエミールとは、昨日登りなやんだホルンリーの岩壁を調査に出かける。後にのこつた者はその間に小屋の内外を整理し、夕の支度をとゝのへる。さては徒然のまゝにトランプなどはじめる。

僕等は小屋の入口の傍に腰をおろし、小屋で風を防ぎながら、傾きかける夕陽の光を浴びて語る。

眼の前にはアイスマヤーをへだて、幾多の雪の高峯が靜かに展開してゐる。右へ眼を移すと、アイガーの頂への山稜からは盛んに雪雲が吹き上がつた。その北面はグリンデルワルドの里へと直立する恐ろしい斷崖を現はしながら、又のような山稜を境界として南側に物すさまじく雲がわき返つてゐる。眞に奇觀だ。

夜九時、里の人との約束通りに山稜で花火を擧げてみたが、グリンデルワルドの谷は霧に埋められて里人には見えぬらしい。更に十時近くに小屋を出てみると、里の燈火がちらほらと見え出した。試みに今一度花火に點火する。やがてそれが認められたか、里からすつと火の玉が上つて遙かに低い空中で消える。丁度ホテル・テルミス附近だ。次で又一つ。それはアマッターの家かららしい。此方も此等に應じて持ち來つた花火の悉くに點火する。するとそれが燃えつきる頃、下の方からかすかに爆音が上つて來る。

幾多の高峯と其間に横はる氷河が朧月の夜を靜かに眠つてゐる。

四

二十四日。

六時半に小屋を出る。快晴。

一ヶ月に亘つての晴天つゞきで、山稜の雪がとけ去る、岩登靴で行く。こんな瑞西の山に雪の少なくなつたのは、十年ぶりだとアマッターは云ふ。

最初の一步から眞に鋭い尾根だ。又のように細まつてゐる山稜を、やゝ南側よりに進む。五年の昔、横君の一行が此の山稜にとりついた地點は此の邊と示されたのが、小屋を出て二十分ばかり登つた時だつた。やがてその一行が露營した場所へ來る。アマッターは得意氣に先頭に進み、僕に一休み

せよと示した場所は、アイスマヤーに面した二疊敷位の廣さある岩のかけで、それはアイスマヤーにかゝる絶壁の上が、寄せ集められた岩石でやゝ平かに築かれてあり、北側—グリンデルワルド側—は山稜が自然の屏風となつて風を防いでゐる。その當時榎君が頭を岩の窪みにさし込んで横はつた此の所、他のフューラー達が交る／＼腰かけて假眠の夢を結んだのはあの邊と、アマッターが教へてくれる。

一行はこゝで食事をとる。側の岩の間から太い釘が二本見出される。古い新聞紙の一片が出て来る。釘は當時使用残りのものらしく、新聞紙は榎君が携へた「ロンドンタイムス」の紙片とわかる。よい記念だ。釘の一本を僕は貰ひうけた。

此の地點を出ると、山稜は愈々急峻になる。新らしく懸けた太繩をたよりに、滑り易い岩の面に注意深く足を運ぶ。所謂ジャンダルムの難険は、或はマッターホルンの伊太利側よりも登り難いように思ふ。只クレッテルシュエーのお蔭で何の不安なしに足が動かせる。或は北側の面を攀ぢ、或時は山稜の刃の上を渡る。一行は物を言はないで、黙々として只管に登つて行くアマッターの後に従ふ。小さい石塊が一つ落ちてきて僕の頭にあつた。手でふれると血が流れてゐる。すると之を見つけた松方君が急いで近よつて、手拭でシカと包んでくれた。かつてはグギーの小屋へ行く途中、松方君のピッケルの尖端があつて頭の左側から激しく出血したが、此度は右だ。二度の不時の出血に、血にも大分なれた。

所謂ジャンダルムの前後に太い綱が四五本かけられてゐた。もし岩の面に雪が凍つてゐたら、たとへ此の綱の助けがあつても、登攀は極めて困難となつたであらう。

頂上に近づくとも山稜の南側即グリンデルワルドの側に、雪の壁が出来てゐる。最後のパーティーのブラバンドは、その雪の壁にピッケルで大穴をあけ、頸をそれにさし込み、グリンデルワルドを見下

ろして何か大聲で叫んでゐた。彼も當年の回想に氣が浮々としてゐるのだらう。が、彼が雪の窓から引込めた顔を見ると、鼻さきが切れて血が出てゐる。その窓枠に觸れたとみえる。觸ればすぐに傷つけられるほど雪の壁は堅く凍つてゐるのだ。

頂上に達したのは九時卅分。綱の助けありクレツテルシュエを用ひたとはいへ、可なり早い登りだとフューラー達は云つてゐる。一行の氣合がびたと一つになつてゐた故か。而かも之が實にアイガー東山稜の第二回目の登行でもあつたからだ。

頂上に少憩。時々通り過る雲が霞のやうな雪を降らす。そしてそれが次第に烈しくなつてくる。靴を鉄付の山靴にはき更へると、一氣にアイガーグレッツチャーの驛を目がけて下り出した。天候は次第に悪くなつてくる。雪が間斷なしに飛んでくる。アイガーグレッツチャーの驛から見上げた毎に、さまざまで難險とも考へなかつた此の岩壁の下りが、急いだ割に時間がかゝつた。午後二時頃につく。

驛で少憩の後、更にクライネシャイデツクまで下る。そしてそこで電車の發車をまつ間、もう閉鎖しかけてゐたそのホテルで食事する。此の年の二月、偶然に集まつた日本人七名が紀元節を祝ふて、當時ミュレンに御滞在の 秩父宮殿下に奉呈の一文に連署し、日の丸の國旗を室の一隅に掲げシャープンの杯を舉げたことを憶ひ出す。しかも今、食卓についてゐる此の室こそ正にそれであつた。

五時、電車はグリンデルワルドへ着いた。横君、松方君、それからフューラー達四人と各々堅い握手を交はせて、ホテルへ入る。

五

久々に雨の音をさく。起きて窓を開くと、ホルンリイが直ぐ眼の前に聳えてゐる。一行が登りなやんだ露の岩壁が見える。残念な氣がする。

もう、アイガーの登行で僕の登山も一段落となつた。天候も亦昨日をもつて一變し出した。と共に寒さが急に感じられる。普通服は夏衣の地薄のものしか持ち合せがない。愈々グリンデルワルドを引き上げるべき時が来た。

昨夕、山から歸ると、故國からの書信が數通届いてゐた。今一度それ等を讀みかへし、遙かに家郷の上を偲んでペンを走らせた。

無心の子供等が、僕の音づれに或は新聞の記事に、父の登山の事を知つて喜び勇むその影に、獨り心を痛めてゐるその兒の母あるを常に忘れることは出来なかつた。しかし齡四十に達して初めて試みた登山、而かも一夏に前後十數回に亘つて高峰への體験は、彼等の情愛に答ふるに足る何ものかを收め得なかつたとはせぬ。殆んど二ヶ月に亘つたグリンデルワルドでの滞在を顧みて、心に何の悔みの影も見出し得ないのみならず、有がたく懐かしの念を抱いて此の地を引きあげようとしてゐるのだ。手の甲の無数の擦り傷と、頭の兩側の微かの出血のほかには、何の傷害も受けることなしに堪え得た此のからだは、「なほ用ふるに足る」との一味の自信と氣強さの湧き來るを覺えた。あゝ、此の心持、此のからだの、山から來たそのまゝを、直ちにわが愛する者等の上に分ち得るならば……

好んで山へ入りながら、又里への歸りを急ぐ人々の心持を懷ふ。(大正十五年九月廿五日)

雜 錄

○臺灣登山界の概観

沼井鐵太郎

壯麗、深邃、寂寞、閑古、種々の貴い味ひを持つた本土の幾つかの溪山を見捨て、六花の恵みをも打ちやつて此地に南下して來たのはつらい事ではあつたが、高山國の名にし負ふ此の美麗島にあるてふ事は又兼てから望みの一つでもあつた。當分私は此島にあつて、機會ある毎に大小の山岳溪谷を經めぐり、旁臺灣山岳の資料をまとめて見たいと思ふ。そのはしがきとして臺灣登山界近況の概略を茲にお傳へして置かうといふのである。

既に臺灣の山岳に關しては「山岳」十年一號（大正四年九月）に野呂寧氏の講演筆記あり。之と前後して、阿里山、新高山、能高越、南湖大山等

の記事あり、其他若干の雜錄雜報等によつて臺灣の山岳が如何なるものであるかは大體了知されるのであるが、一般登山者の爲には隔靴搔痒の感があり、又現今の事情は理蕃事業の進歩に従つて非常に違つて來てゐるのである。

第一現今に於ては蕃人は殆ど全く歸順し、出草（首狩り）の危険がある箇所は新高山の南部より關山（一二一〇〇尺）附近迄の間と、次高山（シルグイヤ山）の西南なる大雪山（一一八八〇尺）方面位であるといはれてゐる。然も前者には近く測量隊が出發する様に報道されてゐるし、又後者の蕃社も極く最近には歸順せざりし事を後悔してゐるといふ。出草は元來高砂族（蕃人の總稱、新稱）の風習の一つで、今日其の危険が全然ないとは斷言出來ないかも知れぬ。其處で恐らく此危険率を少くしやうといふ目的であらう、總督府は大正十五年度に於て各地の蕃社から所持の鐵砲を取り上げ、彼等をして狩獵生活から農耕生活に入らしめんとする計畫が實施された。此計畫の詳細は茲に述ぶるを得ないが、兎に角、入山者（蕃地に入

る者)に多大の安心を與へる様になつた。

又、理蕃事業中最も力を盡してゐるのは道路開鑿であつて、その立派な事は内地から來る人々が大抵びつくりする程である。此の道には又、警察官吏駐在所を増設して行つた。其處で蕃害も豫防出來るし、又蕃人自身道路の有難さを感じて益々歸順して來るのである。登山者の側からいへば、山には入り易くなるし、又宿泊地(根據地)も増して來るのである。

以上の二つが野呂氏の時代と違つて登山者に便利になつた二大要素であるが、尙其他に忘れてならない一大要素がある。其は日本帝國一般に旅行特に登山が流行して來た事情に鑑みてか、官憲の旅行並に登山に對する理解が深くなり、大抵の所は入蕃を許可する様になつて來た事である。實際今日臺灣にあつて高嶺に登る事の快を説く人は頗る多いが、蕃山の恐るべきを語る人は殆どないのである。

斯くして大正十年頃から蕃界の行政や事業上の事には素人なる登山家が追々入蕃する様になつ

た。八通關越えの新道路が大正十一年頃に完成さ

れてから新高登山も餘程らくになり、従つて登山以外に目的のない入山者の數も増加して來た。大正十二年夏には臺南新聞社主催で新高登山の催しがあり、實に新高山始まつて以來の趣味的登山團體の始まりであつた。此の行には本會々員であつた關口泰氏や志村島嶺氏も同行されてゐる。なほ此の登山會は趣味的登山としてのエボツクを作つたと共に、其内の有志より成る一隊は主山から西山、鹿林山等を経て阿里山迄密林峻崖の難所を越えて行つた記録を残してゐる。此年は八通關から上は矢張り老濃溪を遡つて一晩の露營をしなければならなかつたが、大正十三年夏迄には既に八通關主山間の道路が開鑿されて登山は頗る容易となり、新高山登山者の數も二百六十一名の多きに達した。

大正十四年夏の新高山は蕃情が一寸不安だつたので登山者は百七十一名(或は云ふ百八十八名)に減じてゐるが、所謂登山熱は高くなり出して、婦女子の團體登山(彰化高女)迄行はれるに至つ

た。此年は本島登山界が賑はひ始めた年で、既に前年大橋捨三郎氏（現在臺灣山岳會幹事）が探られた次高山（一二九七二尺）にも團體登山（臺北一中）が行はれる様になつた。勿論能高越（舊道の最高點三三〇七・〇八米（陸測）、新道は之よりも低所を越ゆ）や、ピヤナン鞍部（六三三〇尺）を越えて松嶺（八六〇〇尺）經由霧社行又は大甲溪下り等は普通容易に行はれるし、荒海と嶮崖、峽谷の美に名高き花宜道路（花蓮港・宜蘭間）又一名蘇花道路も新鑿せられて樂に歩ける様になつた。大武山（一〇六六五尺）や、秀姑巒山（一二六五〇尺）も、趣味的登山家の集まりによつて既に探られてゐた。能高越では又、附近の能高山（一〇七三二尺）や、蕎菜主南峰（一一〇〇五尺）、蕎菜主山（一一六九五尺）などが登られてゐる。

昨年（大正十五年）は更に登山界が賑はひ、いはゞ臺灣登山界の劃時代的な年であつた。新高山へは男女の組多數で、其登山者數は八月末迄四百五十名（同年度計五百六十三名）と算せられてゐる。其登山は益々民衆化して、たとへば臺北の安

岡徳之助氏の如きは家族連れで登られ、其内には八歳の男兒があつたとて新聞紙上で喧傳したものである。臺北第一及第二高女の登山隊が臺灣日々新報社の後援で新高山に登り、臺北に歸つてから登山實況の活動寫真映寫と共に、一行中の女學生が交るゝ朱唇を綻ばし登山の感想を述べる會が開かれるなど、新參の私、臺灣の現況を知らざりし私にとつては全く驚くべき事だつた。

この新高山登山は多くは海拔一三〇三五尺（陸測、換算）なる主山の登頂を目的とし、下山は往路を戻るのであつたが、中には東海岸の玉里へ下る組もあつた。此他に變つた探行をした人々もある。即ち會員北田正三氏は一行三人で内地より來臺し、主山の他北山、東山等にも登攀し、タータカ鞍部より陳有蘭溪に下る行をも敢てしたといふ。又上海の英人ジャクソン氏は八通關に一週間も滞在中、陳有蘭溪源流の金門峒といふ絶勝を探り、その歸途別の方面から登つて崩石の危険甚だしい岩登りを敢行した。

阿里山と新高山を結ぶ稜線（尾根）道路の開鑿

は十一月に完成したので、從來の怪しげな蕃路を
 通り、密林と峻崖に悩まされた苦行は再び重ねざ
 るも可なる様になつたし、又阿里山から少しらく
 に行かうとすれば、一旦ホサ溪を経て陳有蘭溪に
 下り再び登り直して八通關に到り登頂するといふ
 迂廻をしないですむ様になつた。之には道路開鑿
 の當事者たる臺南街の喜多知事の一行が先づ登つ
 て八通關を經、集々シツケに下つた。知事は轎で通したと
 いふから先づ其道の立派(?)な事も推察される。

新高山へ集々シツケ口からマラン登山が計畫された
 のも此年の夏であつたが、此は暴風雨の爲に失敗
 に歸した。女でも登るなら一つ時間記録を破つて
 見せるとて二水ニミヅの在郷軍人會員の一隊が強行した
 のは三面記事的に痛快だつたかも知れないが、か
 うした蹶足的登山や宣傳的登山や其他種々の低級
 趣味の行爲が現れる様になつては、流石の新高山
 も俗化したといふ感を識者に抱かせ憂はしむるに
 至つたのは事實である。

昨年夏の登山者の數からいふと新高山以外は問
 題とするに足りないが、能高越やピヤナン鞍部越

の旅も相當に行はれた様だつた。山形高校山岳部
 の一行が遙々來臺して東側から能高越をやり次で
 阿里山及新高山を訪ねた行程は、別に目新しくも
 なかつたが、一行中の安齋教授の觀察は新聞紙上
 に連載されて本島在住の人々に多少の刺戟を與へ
 たのである。

其他の山で注意すべき行は、次高山へ臺北高校
 生の一組(會員鹿野忠雄氏の一行)が既知のシカ
 ヤウ溪からの道(蕃路)を登降した事、臺北一中
 職員生徒並びに生駒高常氏(現在臺灣山岳會代表
 者)の一行がエキジウ溪から南湖大山(一二五三
 一尺)へ團體登山をなし野營三夜にして相當苦心
 の後ピヤナン鞍部に出た事(以上七月)、總督府殖
 産局山林課の伊藤技師が森林調査中新高主山及東
 山、秀姑巒山、マボラス山(一二五六〇尺)、東郡
 大山(一一八九五尺)等を踏破した事(九月)、臺
 灣日日新報社の一行、中曾根武多氏(現在臺灣山
 岳會幹事)等が活動寫真隊と共に檜の美林及び其
 の伐採事業地として名高き八仙山ハクセンザンに登つて尾根傳
 ひに白姑大山(一一〇五二尺)の頂近く迄進んだ

事(十月)及び臺北州蕃地産業調査隊の一行がエ
キジウ溪から南湖大山に登り下山は人跡未踏と稱
するムルロワフに出るコースを探つて成功した事
(十一月)等である。

斯くの如く一般人の登山が盛になり且つ新しい
方面にも向ふ組が出る様になつては、「臺灣山岳
會」の設立といふ記念すべきエポックが現出する
に至つたのも無理はない。此會は見方によつては
嘗て在つた「臺灣登山會」(「山岳」十二年二號(大
正五年十二月)雜錄參照)の復活である。發起人
の趣旨は高山大澤の探行、之が紹介及び登山の奨
勵といふ以外に、近郊登山(週末などの小登山)
を奨勵して飽き易い臺灣生活に清新なる享樂を一
般に與へんとすると共に、問はず答らずの間に山
岳に對する徳義的方面、知識的方面、趣味的方面
及びスポーツとしての方面に正しい見解と興味
と登山の實行を期待したのであつた。會の設立に
は生駒高常氏、杉本良氏(日本山岳會々員)、小林
光政氏、中曾根武多氏等が盡力された。私も杉本
氏の紹介を得て諸氏と知己になり、臺灣山岳會の

設立に助力するやうにとす、められたが、其目的
と眞意を知るに及んで、發起人並に幹事たる事を
快諾した。但、此には一應高頭氏始め日本山岳會
の幹部の方々の御了解を得たのである。臺灣は内
地と事情を異にする事は言ふ迄もない、故に地理
的・人文的の種々の相違を考慮に入れる時は、日本
山岳會の支部として存するよりも獨立の臺灣山岳
會なるものにした方が臺灣在住者(本島人並びに
内地人)の幸福の爲には便利である。其の意味の
強さは内地に於ける地方山岳會の意味以上なもの
がある、又我國の領土として本島人が人口の大部
分を占めてゐる臺灣では總ての社會世相の様式が
特別なる如く、會の維持形式等にも獨特の考慮を
要する次第である。大體こんなわけで私は會の出
生と成長を助けた。

斯くて會は十一月八日總督府文書課長室で創立
し、會則及び設立趣意書を公告して會員の募集に
つとめた。十二月五日には臺北市北郊の觀音山頂
に於て發會式を擧げた。爾後今日迄會務として、
或は講演會を開き、或は登山會を催うし、又會員

中の有志は殆ど毎日曜日には近郊の既知未知の山々を歩き廻つた。機關雜誌「臺灣山岳」も未だ理想的のものではないが兎に角創刊號を去四月に出し、この九月には第二號をも發行した。此間本島内各地に支部設立の機運が熟し來つて、先づ新竹支部が四月に生れ、次で花蓮港支部が八月初旬に成立した。高雄、嘉義等にも近い内に各支部が生れる筈である。兎に角臺灣山岳會は創立の賑やかさと混雜さ(正言すれば)を以て成長しつゝある。そして今の所會員及び世人一般が餘りに會に依頼し過ぎてゐる傾向は明かに見へるが、私どもは之を過渡期の現象と見做し、やがては私共の努力により確實なる歩みを會員自らが歩むべき事を信じて疑はない。臺灣山岳會規則第二條「本會ハ山岳ノ愛護、山岳ニ關スル一切の調査研究及ヒ本島登山界の善導ヲナスヲ以テ目的トス」とある事を内地岳友諸氏にもお傳へして置きたい。

現在臺灣山岳會の組織は會長が後藤總務長官、副會長は木下交通局總長(故井村臺灣日日新報社長も副會長だつた)、幹事は本會の代表者生駒高常

氏他、淺野安吉、船曳實雄、石川欽一郎、市川雄一、蒲田丈夫、小林光政、見元了、中曾根武多、中田秀造、新沼佐助、尾崎秀眞、大石浩、大橋捨三郎、大橋準一郎、齋藤齋、佐々木舜一、鹽月善吉、杉本良、田中七三郎、若槻道隆の諸氏及び私の二十二名。幹事が此様に多數なのは創立當時として止むを得ない事情があつたからである。會員は現在二百名餘に及んでゐる。會の事務所は當分の内總督府文書課内に置く事にした。

大分臺灣山岳會の手前味噌ばかりで貴重なる紙面を汚し、肝心の話が切れてしまつた。

昭和年度になつてからの大きな登山は諒閣中とて何もなかつたが、今年の三月には山林課大石技師(現在臺灣山岳會幹事)の一行が森林調査の目的で南澳蕃ビヤハウ社の側から入つて積雪を踏み南湖大山の頂を極めた。又、鹿野忠雄氏(日本山岳會々員、臺北高校生)は三月末より五月にかけて専門の動物分布調査並に蕃族研究の意を含んで單獨出發し、大武山の周圍を廻り、登頂は果さなかつたが貴重な參考資料を得られ、次で海岸山脈

越え、能高越、霧社より松嶺行、大甲溪下り、新高登山など多大の收獲を擧げられた。此他私の知つた限りでは、二月頃、卑南主山（一〇九〇五尺）に登つたらしい組があつた位である。

今夏は又昨夏にもまして山行は盛な事であつた。新高山の表口ともいふべき集々には昨年にもまして登山申込者殺到し限りある宿泊設備を以てしては、たとへ今年新たに八通關其他に新しき宿舍竣成したとはいへ、登山者は順番を待つの外はなかつた。阿里山口の新道を利用する登山者も當然増して、臺南州當局は明かに狼狽の色を示した。臺灣山岳會の新高登山隊四班は集々口、阿里山口兩方面から分れて入る豫定であつたが、申込順により時機がおくられて暴風雨にあひ、第三及第四班は大分苦しめられた。七月中新高登山諸團體中異色をはなつたのは臺北第三高女の登山隊である、此の學校は本島人子女を主にしてゐる丈、其成功は本島登山界否一般の社會に或る衝動を與へた。新高山に次で能高越も毎年の如く行はれた。其他次高山や南湖大山なども臺北高校旅行

部の計畫にはあつたがどうも實行されなかつたらしい。前人未踏と稱する大霸尖山の銳峯が臺灣山岳會有志及び臺北高校旅行部の一班に目がけられたが、七月中旬にチンシボ方面から登つた高校の組（西尾、森脇、國分三氏）は天候不良、用意不充分、其他の事情で登頂は果さなかつた。七月三十一日から八日間の豫定で臺北を出發した臺灣山岳會の生駒、中曾根、古平、瀨古、永田の諸氏及び私の六人は新竹州竹東郡大湖郡の郡境方面から登つて、八月四日に大霸尖山の初登攀を成就した。登つたコースは絶巔直立三百餘尺の岩山の東南の尾根で、北麓より西側を経て此尾根の中腹に到り、綱で結び合つて其處の極めて急なる七十尺の悪場（最下部はオーヴァーハングせり）を登り越えたのである。一行六人の他に警部補の綿引氏も一緒だつたが、此の登攀は實際警官の人々の助けも、善人の助けもかりない純然たるクライマーの行ひであつた。但、私の意外に思つたのはこの東南の尾根は意外にピッチが短かつた事である。大霸尖山初登攀の記事はいづれ本誌に掲げたいと

思つてゐるが、兎に角此の成功は本島内に異常な
センセーションを起したものである。

尙八月中旬より臺北一中の登山隊は阿里山口か
ら新高山主山に進み、東山に往復、北山に到つて
其尾根より八通關に下り、次で大水窟山、秀姑巒
山に登つてマボラス山に行かうとしたが、天候不
良の爲引返し、八通關から東埔に下つて臺北に歸
つた。此行は今夏最も多人數だつた注意すべき縦
走旅行である。

今迄私は自然科学者の臺灣山岳に於ける活躍振
りは殆ど述べなかつたが、此は私の寡聞なる爲の
みではないらしい、實際此方面の探究は惠まれた
る臺灣にありながら寂寞たるものである。殊に北
部の高山地帯に於ては、佐々木舜一氏の南湖大山
に於ける植物學的調査、高橋春吉氏或は鹿野忠雄
氏の次高山に於ける地質學的又は生物學的觀察位
に過ぎない様である。今夏鹿野氏は新高山、霧社
附近及び紅頭嶼を精査されて少からざる收獲があ
つたと聞く。又、今年は總督府及び海軍省の稍々
大規模なる油田調査に従つて、臺灣島の地質構造

も大分明るくなつて來たらしい。兎に角眞面目な
る研究者が蕃地——山に入る事は最も望ましき事
である。

今年はや、東日・大毎の日本新八景を眞似てか、
臺灣日日新報社では臺灣八景の投票を募集し、其
結果審査委員會を開いて臺灣八景（八仙山、鷲巒
鼻、太魯閣峽、淡水、壽山、阿里山、基隆旭ヶ岡、
日月潭）、その別格として神城臺灣神社、靈峰新高
山、及び臺灣十二勝（八卦山、草山北投、角板山、
太平山、大里簡、大溪、霧社、虎頭埤、五指山、
旗山、獅頭山、新店碧潭）を決定した。之を見れ
ば内地の風景に比して如何にも淋しいものであ
り、又臺灣山岳としての特色を發揮した景が乏し
い様に見えて、我々の興を惹く事は少いが、兎に
角情眼を貪れる本島在住の人々——自らの郷土よ
り他に樂園なきが如く考ふる狭量なる人々に對し
て、我が居る國の景勝に注意せしめ、臺灣を愛す
る氣持にならしめた事は非常な成功であらう。

それよりも、目下臺北州で開鑿中の羅東からビ
ヤナン鞍部迄の道路、及びそれから豫定の南湖大

山への道路が完成されたなら、第二の新高山として旅行者の愛賞を賑やかに受ける事だらう。私どもは且つ恐れ且つ喜びつゝ、その成果如何を待つて居る。訪ねたる人のひとしく邦内無双の壯麗なる大山として激賞する南湖大山登山口こそは、最も感じよき施設を願ふのである。尙、花蓮港蘇澳間の道路は今年から三年計畫で之を改修してモータウエイにせんとしつゝある。かくて交通の便を得れば、海に臨み嶮崖八千尺の清水山、新稱タロコ峽の美を以て鳴るタツキリ溪。そして其方面よりの中央山脈入りは遠からずして登攀者の活躍舞臺となるであらう。北部のボンボン山(五六七四尺)越や、南部の浸水越(六二六八尺の大樹林山の北東側を越えるもの)は登高者の興味を惹かないかも知れないが、最近に出来た高雄・臺東間道路(卑南主山の中腹を縫つて凡七千八百尺なる中央山脈上の地點を過る所謂サクサク道路)や、領臺當時軍用道路として最初の中央山脈横斷道路なりし合歡山(一一二〇〇尺)越えの道(今は蕃路として存するのみ)などは、直ちに以て中央山脈の

高峰探勝の緒となる注意すべき道である。

以上が臺灣登山界近況の概略であるが、靜かに今日の情勢を觀ずれば、遺憾ながら臺灣登山界一般を支配する精神は未だ朦朧たるものであり、其の登山振りたるや未だ幼稚と稱せざるを得ないのである。但、臺灣の人々は今や自らの山岳溪谷を知り初めた。郷土は此等恵まれたる大自然の内に存する事を悟つて來た。内地高嶺の山頂は悉く踏みじられ、尾根の上に銀座通りが出来るやうになつたに反して、自らの島は小さくとも、萬尺の雄渾なる連峰は未だ皮想なる文化に禍ひせられずして原始の姿を持せることを幸福に思ひ始めたのである。

私は茲に臺灣山岳觀を述べやうとはしない。但、恐ろしさ生蕃が棲み、毒蛇がのたうちまはる暑熱の地獄の様に誤解されて居た臺灣、少くとも官憲が頑迷で移住せる民も理解なかつたと思はれた臺灣の登山界が、最近に於て以上の如き著しい變化をして、黎明期を過ぎ去つたといふ事を、此の序でに内地の諸兄にお傳へしたいのである。

若し諸兄が臺灣山岳を味はひたいとて南下せられたならば、我々島のマウンテンニアは快く諸兄を迎へ、助言と便宜を與へるに吝かでないであらう。私個人としても日本山岳會員其他の立派な愛山家、登山家がこの光の王國に來られて、高峻なる緑の大塊に攀ぢ、事實源流は美しい溪谷と森林とに遊ばれて、臺灣山岳の眞髓を掴み且つは臺灣山岳界の爲に御指導を賜らん事を希望する。

最後に臺灣山岳の地圖其他に就て附記して置く。臺灣の山岳に關しては、差し當り、「山岳」十年一號の地圖（野呂寧氏作）を先づ參照せられたい。なほ詳しい圖は臺灣總督府で作つて臺北市榮町四丁目三十二番地臺灣日々新報社で賣つてゐる五萬分一蕃地々形圖、二萬分一堡圖、三十萬分一臺灣圖、六十萬分一臺灣圖、三十萬分一臺灣地質鑛產地圖等を見られたらよい。又陸測の二萬五千分一地形圖は目下北部海岸地方が十數枚出來た丈である。以上の内堡圖は間違ひが多くて信用出來ない。蕃地々形圖は之よりも正確である。此の兩圖並に臺灣で測量した圖は總て長さ（高さ）の單

位が尺になつてゐるから、陸測圖に慣れた者に見にくい。最も信頼すべき陸測の圖は昭和十年年度で全島完成の豫定であるといふ。

臺灣に於ける山の文獻はまとまつたものが甚だ少いし、又たとへあつた所で現狀が書かれてないから注意を要する。本年から發刊になつた雜誌「臺灣山岳」は雜報の蒐集に力を入れてゐる故、此點で充分參考になる事と信ずる。

臺灣で登山の時はいつでもよいが、餘裕の少い人に對しては雨期に就て考へていたゞきたい。即ち大體に於て臺灣の北部は冬が雨期で、夏は乾燥期である。中南部は之と逆になつてゐる。一年中を通じて全島の無難な時は十月から十一月ださうで、林學士大石浩氏の談によれば此月なら氣候といひ天候といひ、そして紅葉の美觀といひ、山上の展望といひ、臺灣で最も好い登山期ださうだ。然し又三月から五月にかけての山も殘雪と石南の花の美があり、天候もさ程悪くないといふ。學生の暑中休暇に利用するならば北部は問題はないが、新高山などは七月上旬丈が好天氣で、其後

は毎日雷雨があるといふ。然し昨年夏などは七・八
 兩月とも好天氣續きだつた。内地と違つて天候激
 變し易く、又一度低氣壓が起ると中々去らなかつ
 たりして、どうも臺灣の天氣は此迄長年の經驗者
 でも一定の規律を見出す事が困難ださうである。

現在臺灣の東部地方は衛生状態が悪くてマラリ
 ヤ等も注意を要するが、中央山脈入りには殆んど
 其の心配はない、たとへアノフェレスがゐても、
 マラリヤ患者が居なければ絶體に安全なものださ
 うだ。それよりもアメーバ赤痢や、或地方に居る
 恙虫の方が恐い。毒蛇は海拔六千尺又は稀に八千
 尺位迄居る事があるさうだが、元來臺灣の蛇は北
 海道熊と同じく話の方が大きい。臺北附近の三
 四千尺級又は其以下の山や谷間の陰濕地には随分
 ゐる筈だが、私はこの一年間二十數回の山行に毒
 蛇を三匹、ハブを一匹、其の他無毒蛇を二匹位、
 それも他人の注意で目撃したに過ぎなかつた。

臺灣で寧ろ恐いのは暑熱の國ながら短時間内に
 氣温の變化が激しい事である。ひどい時には平地
 でも一日の内に華氏の三十度も違ふ事がある。

此點は内地から來た人の最も注意すべき事柄であ
 る。然し何んといつても内地よりは暖いし濕氣も
 多い故、其の覺悟で來て身體を慣らすべきである。
 臺灣山岳に就てもう少し氣のきいた概論や各論や
 案内等はいづれも材料を整へ見聞を廣めてからお
 話する機會がある事を信じ、茲に擱筆する次第で
 ある。

(昭和二年九月十五日臺北市にて)

○奥羽の三湖に絡まる説話

山本徳三郎

十和田湖、八郎湖、田澤湖を奥羽の三湖と言ひた
 い。各湖ともそれ／＼の説話を持つて居るが、釣
 絲で結んだ様に、皆連絡のあるのは妙である。相
 當の距離にある此等の三湖が説話で結ばれてゐる
 のは偶然か必然か其處に興味をひくものがある。
 十和田湖と八郎湖とを結んだ説話に二つある。便
 宜上其の内の古いのを第一説話、後の方を第二説
 話とする。第一説話と云ふのは陸奥の龍飛崎に棲

んでゐた黒神と、羽後の男鹿半島に居を占むる赤神との、十和田湖の女神を中心とする争奪戦である。此の戦争を八百萬の神が、陸奥の岩木山上で、見物したなどは、如何にも豪壯な所である。こうなれば愈々晴れの戦争で、戦たけなはなるに及んで陸奥の黒神は龍を使ひ、男鹿の赤神は鹿を用ゐたが、最後決戦で赤神の敗になり、彼は男鹿の岩屋に隠れたが、十和田の女神は必ずしも勝者になひかす、却つて敗軍の將赤神に同情して、其の後を慕ひ彼の岩屋に同居し、黒神の鼻をあかしたといふ如き豪快で劇的のものがある。斯くして十和田湖の主であつた女神は赤神のものと走り、當分十和田湖は空屋同然になつた。其の後に第二説話が始まる譯である。

往古鹿角郡の草木村に、久内と云ふ者の子に八郎太郎と呼ぶ男があつた。身の丈七尺に餘り、怪力非凡、人を驚かし、常に奥山岳山にはいつて、樺の皮を剥ぎ又鳥獸を捕へては町に賣り、其の日の暮しを立ててゐた。或る日仲間の人と三人、來滿峠、小國山を越え、奥瀬の十和田の剝小

屋に泊つた。八郎が飯炊きの當番をしてゐた時、水を汲みに桶を持つて谷川に下つた。其處に大きなイハナが三尾居るのを見た。それを捕つて小屋に歸り三人の夕食の菜にしようとして、先其の一尾を串に刺し、蒲焼にしたら、其の香ひが何とにも言ひしれぬ程、ブン／＼する。それで二人の歸るのを待てずに、其の中の一尾を頬張つた。處が頤がもげる程、おいしいのでたまりかね、二人に残さうとした分までペロリとたいらげた。其の時遽に喉が渴き出し、小屋にあつた水を飲んだが、其れでは足らず、谷川に下りて匍ひ伏さつて飲み續けに飲んだ。そうしてふと水鏡に映る我が姿を見ると、こはそも如何に龍身に變つてゐる。谷を傾むける様にして飲んでも飲み足らず、其の渴きは依然として止まない。其處にも元からも湖水をなして居つたかも知れぬが更に山を割き、岩を開いて水を堰止み、一大湖として、心ゆくまでに飲まうとしたのか、遂に湖中に棲む身の上となつた。これ十和田湖の第二世の主が出来た譯である。第一世の主であつた女神は赤神と男鹿の岩屋に同居

してゐる。

其の後清和天皇の御代、藤原是真卿は、其の子行卿夫妻と三人、讒言に逢ひ、三戸郡斗賀權現堂の別當藤原式部に身を寄せた。熊野神社に祈願をこめ、一子を擧げ之を熊之進と名付けて寵愛した。これが永福寺の月體和尚の門に入り、南祖坊と名を改めた。之れが抑々第二説話の主役をなすものである。南祖坊は諸國行脚の途に上り、紀州熊野神社に參詣すること三十三回、千歳萬代死を免れしめ給へと大願をかけた。然るに或る夜、熊野權現の神靈夢に現はれ給ひ、『此の山の麓に草鞋がある、それを履いて諸國を巡り、草鞋の切れた所を永久の住み家とせよ、ゆめ疑ふ勿れ』とあつた。山をおりたら果して草鞋があつた。しかも金の鞋である。南祖坊は、之れを履いて諸國を巡錫して、十和田湖畔に來た時、ブツツリと其の緒が切れた、それで其の地を永住の地とせんものと、身を龍身に換えて飛び込んだ。先取特權の湖の主八郎太郎、ビックリして怒るまいことか、大に憤つて互に鎬を削り、南祖坊は、これまで續んだ

經文の文字が悉く口となつて咬みつくると云ふ騒ぎで、八郎太郎も負けては居られず、曾つて人の世に居つた時に身に着けた蓑の編み目が一つ／＼口となつて、相譲らずに戦つた。双方千變萬化の秘術を盡し、七日七夜の戦闘で遂に八郎太郎は力盡きて敗走した。其の途次、毛馬内に立寄り、普門山を脊負つて米代川を堰き止め、鹿角全土を湖水たらしめて、我が棲み家にしやうとしたが、鹿角四十三ヶ所の鎮守稻荷大湯、關神等これではならぬと、近所の宮に大評定を開いて各方面から石を投げつけ、一大修羅の巷と化した。遂に八郎太郎は郡外に追ひ出され、鹿角は安全地帯となつて今日に及んでるが、毛馬内の町端れに散らばる石塊は當時の投げ石であると傳へられ、相當の石合戦があつたらしい。八郎太郎は七座の狹隘部を堰き留めやうとしたが、鼠に妨げられて其の事ならず、詮方なく今の八郎湖を造つて永住し、田澤湖の辰子と相思の仲となり、鴛鴦の契りも淺からず、南祖坊の羨む所となり、戦に敗れても辰子姫との戀には勝つたと傳えられてゐた。さてもこの

田澤湖の辰子姫とはそもどんな女性であるか。

昔々其のむかし、仙北郡院内村の神成澤に三之丞といふ家があつた。一人娘の辰子と母と唯二人寂しく暮らしてゐた。娘は生れつき見目美しく、容姿花よりもかえりなく、人知れず胸を焦した村の若う人もあつたらしい。餘りの美しさに天女の舞ひ下つたのではないかとも噂せられた。若い乙女の共通な心理でもあらうか、辰子は未永く、其の艶な姿を保ちたいと希ふ様になつた。毎夜遅くなつてから、窈かに床を出て、氏神大藏山に參籠し、年を取つても、何時までも二八の姿でありたいと、法外な祈願をかけた。百ヶ夜の熱心に神も感應やしたりけむ。満願の日に神の御告げがあつた。此の山を北に越ゆると清い岩清水の湧く所がある。其の水を呑めば日頃の願望成就する、ゆめ疑ふ勿れとあつた。辰子は不思議に思ひながらも、母にも知らせずに秘してゐた。或る日近所の娘と一緒に蕨狩に出掛け、院内嶽を越え、七ツ森の麓を過ぎ、行く途々で蕨を折りながら高鉢森に着いた。其の時は既に晝時分であつた。辰子は晝

飯の用意にと水を汲みに行つた。コン／＼とした一と條の流れに奇妙な魚がゐる。悦んで其の五六尾をすくひ捕つて、友達に歸るのを待つて共に賞味しやうものをと、先づ其れを炙ることにした。

處が其の佳い香がブンブンと鼻を打ち喉から手が出さうである。それで先づこらえかねて其の一尾をたべてみた。處がおいしくてたまらず、思はずしらず、有りたけをたべてしまつた。處が俄に喉が渴いてたまらず、清水を求めて谷間にたつた、丁度其處には青苔の蒸した岩の間から清水がコン／＼と流れてゐる。優しい手を伸ばして、何程すくふて飲んでも、益々渴くばかりで、終には匍ひ伏つて、花の唇を白い沫につけて、源泉も涸れよとばかりに飲んだ。處が身體に異常を感じ、花の姿が變じて見る／＼大蛇となり、静かな春の日も、忽ちに眞つくら闇、光る、鳴る、大豪雨と云ふ物凄い光景で、山を崩し谷を埋め、漫々たる湖水が出来て、辰子は其の湖の主となつた。

斯様な有様に他の乙女等は慄えて歸つて、斯く／＼と辰子の母親に告げた、母は今までの事から

判断してどうしても其れを信ぜられず、捨て、は置けずと下男を連れて、辰子の行衛を探しに出掛けた。爐の中に燃えてる薪木を振りかざし、山を越え谷を涉つて行つたが、山の姿も、谷の状も、皆原とは變つて、マン／＼とした湖水のほとりに出た。岩打つ波の響きに雨風さへ加はり、物凄しい光景である。母は哀れにも悲しい情に堪えかねて、やよ辰子よ、辰子よと聲も哀れに呼んだ。是れ迄母が尋ねて來たのに、なぜに姿を見せぬかと愁歎もした。すると沖の波間に龍が浮んだ。母は今更ながら打ち驚させめて一目でも、元の辰子の姿を見たいと泣き悲んだ、すると龍は波に隠れ、今度は懐しい辰子となつて現はれ、妾は法外の大願を懐いて人知れず、觀音菩薩に不老不死を願つたら、幾千歳變らぬ姿となつたが、母上に孝養をつくさず、其の罪は深い、之れも宿世の縁であらう。其の代りに妾の神通力で、母上に何時でも鮮しい魚を贈り、聊か恩に酬んと言ひ終つて、間もなく波間に姿を消した。母は情けないことよと、燃え残りの薪を湖中に投げ込んだ。其れが不

思議や、見る間に魚となつて遊び廻つた。後の世の人、此の魚が鱒に似て色が黒いので、木の尻鱒と稱え、今は特産の意味でか國鱒とも言つてゐる。辰子の母も仕方なくあきらめて家に歸つたが、其の後來客の度毎、求むる魚が小屋の槽の中に、はねてゐたと傳えられる。此の辰子こそは、敗軍の將八郎に同情し、終に戀に變じ、深い契り結び、毎年彼岸までは辰子の所に八郎がゐるので、田澤湖は寒中でも水は凍らず、八郎湖は寒中主の居らぬ間は堅い氷を鎖さし、八郎が彼岸に歸れば、堅い氷も一夜で解けると傳えられる。田澤湖は實際氷を張らぬらしく、田澤湖を地元ではタツコガタ（田子潟、辰子潟）とも呼んでゐる。田澤湖の辰子は、八郎の敵である南祖坊を忌み、其の鐵杖や鐵の鞋をも嫌ふ關係でか、此の湖に鐵氣を含むものが、はいれば風波、湖岸を打つと云ふので舟は金具を使はない獨木船（まる木ぶね）で、よく／＼南祖坊を嫌ひらしい。坊主にくめば何までもかにかまでも。

以上は奥羽の三湖に絡まる説話であるが之れを

捉えて吾人は何を思ふべきか。

第一、十和田湖の第一説話で男鹿の赤神が敗軍の將となつたに拘らず、十和田の女神は男鹿に走つて、陸奥の黒神に勝利の悲しみを感ぜさせ、第二説話に於ては、八郎は戦ひに敗けて、自分の住み家まで南祖坊に渡し、八郎湖に落ち延びても、田澤湖の辰子との戀に勝利を得たことになる。奥羽の女性は、必ずしも武名赫々たる勇將になびかず、寧ろ敗殘不遇の將に同情して、それに一身を捧げやうとする共通性を見出せる様である。

第二、南祖坊は不老不死、辰子は何時までも若い様にと、何れも法外の望みを掛けて、共に龍になつた。これも民族思想傾向に關係するかも知れぬ。

第三、八郎も辰子も喉が渴いて大水を飲む前に、山中の珍魚を焼いてたべ、何れも同輩に残さうとした分までも、おいしいに任せて、皆頰張つたと云ふ點も、人情の機微から出た共通點である。利己主義の處がほの見える。田澤湖の成因に就ては、火山作用の最も簡單な破裂孔(マール)に

よるものであると言はれてる。地の底に鬱積した水蒸氣の爆發によつて出來たもので、火山とならぬのは、引き續き熔岩や凝灰岩を出さず、最初にツブぬけただけであるからである。此のマールは多くの場合、水が溜つて湖水になる。陸前の鳴子附近の瀉沼も成因を同うするものである。山鳴ること七日の後、山岳崩壊して鳴子の瀉が出來たとあるが、矢張り一種の破裂で、成層火山の場合の如く、引き續き噴出物を出さぬ簡單な火山作用によるものである。傳説にある天地晦冥、奔雷轟き、紫電閃くと云ふのは、此の爆破の光景で、火山の爆發には往々豪雨夕立を續發するものである。十和田湖の成因なども、或は此のマールではないかと思はるるも、専門家の調査を待たねば判らぬ。田澤湖の傳説などは、此の破裂孔の出來た際、山遊びに行つて居つた小女達の一人が行衛不明になつたことから起つたのではあるまいか、何れにしても、十和田湖の第一説話は、女童を中心としての勇壯活潑な大活劇、其の第二説話は永住の住家の争ひで何れも豪快な所を見せ、民族の趣

味思想の現はれと見ることが出来る。之等に配した女性も、民族の理想とする所であるかも知れぬ。其の間法外な望みを抱くことを暗に戒めて居る様にもほの見える。之等を奥羽の三湖に絡まる説話の特徴と考へたい。

○大岳から御前山への新道

高畑棟材

十二月三日(昭和二年)。奥多摩保勝會の肝煎にて大岳から御前山を経て小河内方面へかけ、素晴らしい新道が完成されたと聞き一遊を試み度、今宵折からの月明を頼りに御岳からアクタバの溪を経て大岳の小屋に到り、獨り留守居してゐた吉野老婦が心盡しの夜具にくるまつて暖かい夢路を辿る。

十二月四日。午前正二時半、戸外の人聲に圓らかな夢を破られたので起出てみると夫は意外にも會員の大熊保夫、木村久太郎、山田多市の三氏で

あつたので、此偶然の邂逅を心から祝福し合つた。夜道を辿つて來た三氏が爐邊で一睡を試みてゐる間に、自分は洗顔朝食を済まし、麩て三氏と共に結束して小屋を發つたのが六時四十七分、霜を踏んで大岳山頂に登り少憩の後、尾根通し若宮ノ頭を目がけてボサを搔分けた。中岩山を経て大和田に着いたのが八時廿七分、同卅五分に發足して鞘口山への登りにかゝる。つひ先頃までは體をかゞめ汗だくになつて喘ぎ／＼登らせられた鞘口山への直上路も今は電光形の新鑿道の御蔭により、鼻唄交りの氣樂さで登ることを得たのは難有り。鞘口山頂着が九時廿三分、第二回の朝食を攝りつゝ少憩する。氷川の村外れの丘上に奥多摩隨一の大建築物なりといふ氷川小學校の新校舎がピカリと光つてゐるのは人目を惹く。

一鞍部に下り右側の窪に新設された炭焼小屋を瞰下し乍ら愈々中尾根の一部に取付く、十時少し前、此邊から御前の頂上へかけて、前二回の遊行の際には藪潜りのために豪く時間を費したものであるが、今回は新道の御蔭で全く暢氣にすらすら

と歩いて行かれた。天下の足弱黨は大いに快哉を叶ふならむも、我こそその藪潜り黨は聊か落膽せざるを得まい。途中で盛に道草したので陸測五萬圖の朽寄への小徑の分岐點に達したのが十時卅五分。

折よく居合せた一人の炭焼夫に向ひ、東京からも良く見える例の御前の右肩の小瘤には何とか名が附いてゐはしまいかと思つて尋ねてみたら、あれはサブ澤の上に在る故、サブ澤の頭（氷川村稱呼）といふ由を教へてくれた。此炭焼夫は元來が親切心に富んでゐるとみえ、且那方若しアクタで出来てゐる味噌桶岩といふのを御存知なければ案内してあげますべえ、とて鉋や鋸を放り出して先に立つたので一行もその後を逐つた。夫は朽寄への小徑をほんの少許り下り、唯有る水涸れ小澤を過ると直ぐ眼の前の斜面に在つた。正にアクタ（石灰石）で出来た桶状のものではあるが、其一部が缺損してゐるのは洵に惜しいことである。桶底からの目測高サ約八九尺口徑三尺あまり、よく此邊の農家などで見かけるところの味噌桶に似てゐ

ると言はれ、ば成程と合點もできる。此炭焼夫が自分用として此附近に水場を作つた由故、御前山では一滴の水すら得られぬと啣つ人には何よりの福音であらう。夫は此岩の下の水涸れ小澤を澤に隨いて少し上つた所に在ると言てゐた。先刻の分岐點に戻つて炭焼夫と別れ、藪潜りの御難は今昔の語り草、一行は何の苦もなく御前山頂に達するを得た、時に十一時五分。新道は三角標石の傍らを通じて更に小河内方面へと走つてゐる。三角點を中心とする新道の兩側には不相變例のボサが叢生してゐるが、まめに動けば眺望や撮影などには從前のやうな不自由を少しも感じないで済む。美晴に恵まれ姿を眺望に恵まれた一行は嬉々として思ひ／＼の撮影を試みる。大熊さんは手札型のアルペンカメラを活躍させて左は三頭山邊りから右は高水山邊りにかけてのバナラマ寫真を作ると頻りに苦心してゐた。

十一時四十五分に頂上を發ち、木下路の日蔭に散積る氷花（是は去月廿九、卅の兩日にできたものらしい。自分は今日一日に大岳山頂の西裏で美

事な氷花を飽くことなく觀賞した)の碎片を拾つてしやぶり乍ら暫く往路を逆走し、鞆口山を見上げつゝ新道と別れ、中尾根の小徑を辿つて山ノ神社(祭神大山祇命)の傍らに到り、更に水ノ戸澤沿ひの小徑を拾つて神戸岩への分岐點に達した。時に午後二時。一行のうち神戸岩を知らぬ方もあるので神戸岩を見物し、神戸村に入つてから川苔を購ひ鐘乳洞へと足を運ぶ。是は終日の山あるきなどで疲れを覺えてゐる際にはわざ／＼立寄つて見るべき程の代物でもあるまいと思ふ。

例の長たらしい街道には毎も乍ら閉口する。六時に五日市驛着。拜島驛にて歸京の三氏と別れ、自分は唯ひとり奥多摩川畔の旅舎に立戻つてきた。

因に自分は里人を真似て新道といふ字を用ひたが、大岳から御前方面へと走てゐる此道は、大體は今迄ボサの生ふるに任せきつてあつた從來の徑を立派に改修したものであつて、全く新たに開鑿された箇所も多いには違ひないが、里人の所謂新道なるものは實は此改修路に他ならぬと思つてゐる。

て大過はない。

兎に角大岳御前間に之曲する平均三尺幅の立派な道を、曾てのやうな藪潜りを一回も味ふことなくしに三時間乃至四時間位で樂々と歩けるのは、その縦走に要する時間の經濟上から云つても喜ぶべきことではないかと思ふ。(昭和二年十二月五日)

○昭和二年十月婆かり觀楓旅行しけるときによめる

田口虎之助

信濃國木曾山にて

もみぢ葉のにほふみ山にとなみ張り鶴捕ららしをとり飼ふ見ゆ

となみはり鶴かりする大木會や小きその紅葉いまだ盛りなり

霞澤にて

山姫のおれる錦か山祇の御衣のあやかもこの紅葉

はや
瀧川の水にうつらふもみち葉を畫工すらも得こそ
寫さね
山川に流るゝ紅葉せきとめて簞なから見むよしも
かな
奥山にかよふ杣路を開かむと岩うち碎き人騒くな
り
中の湯温泉にて
いはか根のこゝしき山路ふみならし尋ねそ來つる
中の湯や
このみ湯は山路ひらかむ人皆の宿りなれやも賑ひ
にけり
浴みしてちりひち清め窓により山の紅葉を見れば
樂しも
奈川渡と嶋々との間の山路を自動車に
乗りて行ける時
小車の走るほき路のかしこさに手足わなゝき胸と
とろきぬ
つゝみ無く山路こえしは手向せし神の守りの有れ
婆なるらむ

中房温泉にて
中房の山の温泉の雨となり降來る見れはいや珍し
も
み湯の雨降注ぐなる板床にひた伏し居れば汗あえ
にけり
黒髪の亂れやせむと處女らか盥かつけるみ湯の雨
はも
更科にて
さらしなや月の名所つきのみか山の紅葉もはえま
さりけり
秋行かむ旅は信濃路しなのちは月に紅葉によろし
き處
輕井澤より電車に乗りて
上野國草津へ行く途中にて
煙立つ淺間の山の高き名の押出し岩を見すて悔し
も
みやこ人夏のおつさをさけむとや裾野の原に家造
りせる
草津人からくつくりし眞金路をおほに念思ひそ通
ふ旅人

まがね路の開けし時はをとりあかり喜びにけむ草津里人

草津温泉にて

温泉わく草津の里にうちかをる湯の香ゆかしみ旅ねしにけり

夜晝に煙りにけふり音たてゝ岩間にたさるみ湯のかしこさ

わきと沸く温泉をあつみ男子らも八度かさませ浴みしぬらむ

薬師らも及はぬ病これの湯に癒るを見れば神のわざかも

神わざと仰くもうへな此里の奇しき温泉のたくひ無ければ

このみ湯のくしきしるしを語りつき聞きつく人や集ひ來にけむ

白根山しら雲かゝり淺間やまあさ霧はれて見らくよろしも

よそにては見難からむと里人の誇る紅葉は時過にけり

此處なる旅宿望雲館の玄關の扁額に福

羽美静翁の歌「見れ婆それ雲うつ高し此宿の榮を添へてのほるなるらむ」と

ありけれ婆 おのれまた

打仰く大空たかく立雲は名に負ふ宿のさちや見すらむ

みちすがら

年のはに紅葉かりして楽しけく遊ひ暮さなもみちかりして

有笠山の麓にて

旅人の笠も照るかに有笠の山の紅葉は今盛りなり

ありかさのこゝしき山のやまかけの若かき紅葉いやめつらしも

澤渡温泉にて

そのかみは賑ひにけむ此み湯の湯守も今は晝いしにけり

このみ湯のおとろへぬるは風流士のめつらしみする山川を無み

四萬温泉の入口にて里の名を問けるに

文化村と云ふと答へければ

塵の世のよそなる里も名を聞け婆睡しつへく思ほゆるかな

來て見れば住まほしき山里にあさましき名を誰おほせけむ

四萬温泉にて

小車の通はくよしと都人もみち見かてら浴しに來る

四萬の湯と人めてはやすうへなく、吾もたゝへむ山川をよみ

人さには宿すやとりの有ればこそ四萬の温泉は名に聞えけれ

やまかはの瀬のとを高め打向ひ言問ふ人の聲もさこえす

四萬より越後國南魚沼郡へ越る山路の國境あたりにて

五百重やま山深からし塵たてゝ走る車の音も聞えす

このあたり山を高めかみち葉の過にし見れ婆霜深みかも

穴こもり籠り後れし蛇なれや日影を戀ひてもこよ

ひ居るも

越後國三國街道の淺貝の宿にて

旅人の往來もたえて此里の昔の盛り面影も無し
棟木くち軒端かたふき雨露のもるにまかする家も有けり

山人のやす打振りて谷川に捕りし岩魚の味のよろしさ

金城山の麓なる雲洞庵に宿りて

上田なる山の紅葉を見まほしみ去年のしをりの跡間にけり

去年の秋やとりし吾の面知りてよく來ませりといたはりにけり

山寺のかつらの紅葉入相のかねのひゝきに散もこそすれ

あすゆかむ路しるへする山人と小夜更るまで物語しつ

金城山にて

うちわたす高嶺のもみち惜けくもあはれ盛りの過にけむかも

今はもよ盛りすきぬと人は云へとみ山の紅葉見ら

くよろしも
 みわたせ婆此むかつをのみち葉は色とり／＼に
 なほ匂ひけり
 いかさまに思ほしめせか山祇の奇しきいはやは造
 りましけむ
 頂のいはやの中にほくら立て御酒さへ供へ神そま
 つれる
 廣らなる是のいはやはうらやすく百の人等も宿り
 しぬらむ

○名古屋の西方の山

黒 田 正 夫

鑄物の煙と煤とに濛々としてゐる工場で、一日
 仕事してゐるものにとつては、夕方先を争つて門
 の外に飛び出すことがどれ程の喜びであらう。

埋立地の片隅に建てられた工場の周囲にはまだ
 他の建造物は一つもなく、放り出された草野は、
 江西の月の照るにまかせ、鶺鴒徒らに飛ぶのみで

あつた。しかし、その荒野は工場に疲れた眼にと
 つて限りない喜びを與へた。更に夕陽に輝やく伊
 勢灣や、夕空に聳える山にはどんなにか憧憬の心
 をそそつたことであらう。

しかし僕にとつて、その時代は餘りに短かく、
 憧憬の地であるこれらの山にはいる機會は、僅か
 に二回しか與へられなかつた。即ち最もとつとき
 よい藤原岳と、龍ヶ岳と。しかも徒弟であつた自
 分にとつては長い休暇はなく、いづれも日歸りで
 あつたため、兩回とも頂上を知るを得ず、その美
 しい谷を遡つたまでであつた。

その紀行はこゝに記すには餘りに貧しい。貧
 しい労働者の生活と共に獨り自分たちにとつての
 みの楽しい回顧ではあるが、語るには餘りに貧し
 い。

その憧憬の地、そして唯憧憬として残つて、近
 き將來にはいつてみる機會もなくなつたそれらの
 地は永い將來にも亦憧憬として残ることであら
 う。朝夕憧憬の眼を以て眺め遂にはたゞ見るには
 あきたらず、教てくれる人もなきまゝ、地圖からそ

の山の形をかきなほして、自らそれらの山の名を索めて、鬱々たる心を慰めてゐた。その時の圖が近頃片づけものしてゐた時出て來たので清書してみた。若し之を「山岳」に投じて、誰か之等にいつてみる人やその紀行におめにかゝれる機會を得たならばと、古い憧憬の心が再び眼覺めて來た。小學校の地理のときから妙に印象に深い山に三つある。赤石山脈が一つである。關東地方の地圖をみてゐて三國山とあるに眼がとまつたときどんな奥山であらうと、今の崑崙にも増して幼心に沁みわたつた。多分、甲武信か、雲取のことであらう。此の二つは、既になつかしい友となつてゐる。最後のものが鈴鹿の山である。お嘶の中の山のやうにして知つた。今時の子なら、フォレ、ノワールとか、フィヨルドとか、さてはモンバルナスとでも教はるのであらう。日本武尊、今だになつかしい御名である。二千年の昔眞草をかきわけ筑紫からゑぞまでお歩きになつた尊が、おかくれになつた山として深く印象されてゐた。その鈴鹿の山を朝夕みて、再び新しい印象を得た。しかもそれは尙

憧憬の域である。尙なつかしい友となし得ずに、再び遠くわかれて了つた。その憧憬の友のたよりを得たいものとかくはこの原稿を投じてみるのである。(スケッチは都合により遺憾ながら省略した。編輯者識)

雜 報

○秩父宮雪中御登山

秩父宮にはいよ／＼二十四日手稻山（一〇二五）朝里岳（一二一八〇）等の雪峰に御登はんされることとなつた。山中二泊の豫定で第一日は手稻の頂を極めバラダイスヒユツタに泊られ二十五日は山峰傳ひにユウトビヤのスロープを経てヘルベチャヒユツタに入らせられ、途中尾根の上で御煮飯をとられぞく／＼としげるタシネンの森を縫うて壯快なる山岳スキを遊ばされるはずである、殿下を迎へる山々は二十三日夜から新雪を装ひ光榮に輝いてゐる（二月二十四日）

【札幌電話】秩父宮殿下には二十四日午前九時十五分輕川驛御出發、午後零時十分バラダイスヒユツタに御到着、こゝで御煮食折柄降りだした雪を冒して頂上に向はせられた。

【輕川特電】殿下には手ぶくろも召されず氷の様な尾根の緩斜面をたどつて三時五分頂上を極めさせられ、四時三十分無事小屋に歸られ夜は手稻の林の中に御露營、山の第一夜を興多き物語りに過された。

【藤木特派員輕川特電】二十四日吹雪のなかに壯烈な手稻山御登山を遊ばされた秩父宮殿下は午後四時三十分無事小屋に御歸着になり夜通し荒狂ふあらしの夜をストーウの中に學生等と雪の話、

山の話に打興じ給ひ學生の手になる御食事を召上られて十時過ぎ粗末なるわら布團の床にいらせられた、かくて二十五日朝には風も鎮まり手稻山は朝日に輝いた、殿下には午前七時御起床、豫定の如く尾根傳ひに奥手稻に向はせられユートピアを経て雪中木材伐採状況を御視察あらせられヘルベチャヒユツタにいらせられるはず。（二月二十五日）

【藤木特派員札幌發】手稻ヒユツタにて第一夜を明かされた秩父宮殿下には二十五日午前八時三十分バラダイスヒユツタ御出發、二ノ澤一ノ澤を越えて手稻より奥手稻に続く森林帯にジツクザツクを刻み山上に御到着この日は前日の荒れに雪のコンデイションは却つて好く日本海の波たうおよび石狩平野から遠くは噴煙立ち上る椋前山を御興深く御覽になり、えぞ松と白かばの混合樹林を縫うて壯快な滑走を続けさせられ零時半奥手稻下の鞍部に着れ御煮食を召されリユツクサクツを下ろされて更に奥手稻山の頂上を極めさせられ附近で暫く自由自在に壯快な山岳スキを興ぜられたが折悪くえぞ松下の凍る雪にスキの先を突き立てられ左のデンドの所からスキがボツキリと折れたので直に北大生等が應急修理を施し引續き一時十分奥手稻發ユートピアのスロープに御着きになりこゝでも暫くスキ御練習、針葉樹が直々と立ち雪を頂いてクリスマスツリーの如く美しい中を縦横自在に御滑走あつたがこの附近スロープはユートピアの名に恥ず山の神祕をさ／＼やくかの如き場面をしのげせる。かくて奥手稻山のヘルベチャヒユツタに御下降あらせられたのは暮れ易い山の陽は既に傾いて薄暗に然も小雪の降りしきる中を午後五時ヒユツタに御到着。すこ

ぶる御元氣で御休憩の間もなくそのまゝ御料林伐木状況を御視察のため薄暗の中を谷深く進ませられ木材のやぶだしからそりに積まれ馬が引だす状況を御覽になり午後六時ヒユツテにお歸りになつた。(二月二十六日)

【藤木特派員二十六日札幌發】奥手稻からヘルベチャヒユツテにいらせられた秩父宮殿下には吹雪の一夜をこゝに明され二十六日午前七時十分降りしきる吹雪を突いて御出發大野木、原兩博士、渡邊御用係、松川、中野兩氏を従へられ白樺の原生林を縫ひ白井澤をさかのぼり二ノ俣に出て左手ノ澤に沿うてコースに出られた。夜來の降雪この山の斜面は三、四寸の軽い新雪におほはれスキーのコンデイションは絶好である殿下には連日の御奮闘も少しの御疲勞の御氣色もなく益御元氣にて一氣に朝里岳(一二八〇メートル)の頂上から續く尾根にと着かれた、かくて殿下には四時間にわたり吹雪と戦はせられ十二時過ぎ一旦ヒユツテに歸らせられ簡單な御素食をとられ御休憩のおんこともなく一時半小屋御出發、三日三晩にわたるスキー登はんを無事に終へさせられ、小樽内川の本流に沿ひ石狩、後志の國境線なる時に出てさせられ、急坂に沿ひ日本海の波打際まで一氣にすべり下り錢函驛に御到着、先着の前田事務官、北大總長等の出迎へを受けさせられ、すこぶる御元氣で五時十分發の列車で札幌に御歸還遊ばされた。(二月二十七日)

【北海道昆布藤木特派員發】手稻山を中心として第一次のスキー踏破を終へさせられた秩父宮殿下には更に帶廣、釧路方面の御視察をなされ一日小樽を経て第二次のスキー御登はんのため青山温

泉を根據地とするニセコアンヌプリ、チセヌプリ等の諸峰御登行的ため午後四時四十三分昆布驛に御着、旅の御疲れもなく用意した馬ソリにも召されずスキーを召して廣くたる雪原のダラ／＼登りを御發行あり、折柄知別川を隔て、そびゆるエゾ富士、端麗なる姿を夕焼けのアルペンクロの桃色に染めて山の宮を奉迎しさらにニセコアンヌプリ、チセヌプリの連峰は夕やみの中に夢の如く浮ぶ、かくて夕やみ迫る六時半雪に埋まる青山温泉に御到着遊ばされた、二日は午前八時御出發ニセコアンヌプリのしゅん隘を登らせらるゝはず。(二月二十九日)

【二日後志國昆布にて藤木特派員發電】昆布驛青山温泉に一夜を明された秩父宮には二日午前八時半御出發、ニセコアンヌプリの左岸臺にてスキーを召され、狩太スキー團その他の奉送の中を廣くたる雪原の上にそびゆるニセコアンヌプリ(一三〇八メートル)の峻峰を指して御登はん遊ばれた、この日風強く嚴寒富士はじめ付近の山々には八百メートル位を境に暗たんたる雲深く鎖して山容を見せずその間を殿下一行は物ともせず南に伸びたテレーズに取りつき白かばの疎林を縫ひてみれば急に急坂をよぢさせられつゝ進んだが間もなく霧の中に入るや寒氣にはかに加はり殿下にはスキー帽の垂れを下して目深にかぶらせられたが深林帯を過ぐる頃から烈風ます／＼吹き荒み、積雪をさらつてつづての如く人々の顔や手を撃つ、氣温正に零下十九度六分、今日までの御登はんになき烈風と寒氣である。

かくて千百メートル附近に達すれば雪面はガラスの如く、僅にはひ松に積もれる凍雪は風のため櫛の齒をならべたやうてこの世

ては見られぬグロテスクな世界と化し、たゞ眼に見るものは二間の周囲のみにて正に世界のはて、極地平原の一端に立てるが如き壯觀といふより物すごい景観である、最早スキ一の登行を許す極限となつたので御一行は頂上を見棄て十一時下降の途につき、林中の狭いテレーヌで魔法瓶をかけた温かい飲料で粗末な晝飯を済ませ、更に一直線に岩壁登の裾に下降し、こゝにて狩太、南後別所村のスキー會場に立寄られ四時青山温泉に御歸還遊ばされたが、この日の御登はんは實に殿下として北海道におけるもつとも御印象深きものである、三日はチセヌプリに御登はん、同夜の臨時列車で御返道御歸京の途につかせられるはずである(三月三日)

【三日後志國昆布にて藤本特派員登】秩父宮殿下の北海道スキー行の最後の日である、三日は早朝暴風警報あり、今にも暴れだしさうな混とんたる空模様であつたので、人々は御豫定變更の上チセヌプリの御登はんは御中止されるものゝ如く傳へる者があつたが御勇壯の殿下には八時二十分青山温泉出發、ニセコアンベツ川の右岸をさかのぼり宮川温泉より小泉農場の臺地に出てられ、折柄の降雪とガスをを銜いて爪先上りにチセヌプリ(一名千歳富士)に向つて進ませられた、然るに山麓の森林帯に入る頃より突如天候悪化しすさまじき暴風雪が襲來した、樹々のこずゑをゆする轟々たる物音すさまじく降る雪は烈風のため地上の積雪を拂つて吹雪と混じり天地は暗く恐ろしい有様となつた。この壯烈な暴風雪の中にも殿下には例の如く手ぶくろをも召されず平然たる御様子で却てお伴の學生達をいたはらせられ、僅に樹の間から立上る馬場温泉の源泉地の湯氣を頼りに十一時馬場温泉に御到着遊ばされ

た、この温泉は周囲三町餘あり丈餘の積雪をうがつて底知れぬ地底からこん／＼とゆう出し湿度は雪の中で尙六十五度を示し白煙十數丈の高さに上つて壯觀を呈してゐる、殿下には御少憩の後更に白樺の原生林を縫ひ益暴れ狂ふ暴風雪を銜いてチセヌプリ御登はんを決心され、御伴の人々も今更ながら殿下の勇敢なる御行動に感激せぬ者なく四時過ぎ一旦温泉の不老園に御歸館になつた、尙殿下には四日御歸京の御豫定を御變更の上三日午後八時十分、青山温泉御旅館御出發、同九時三十分昆布驛御到着、同十時同驛御發京函館に向はせられた(三月四日)(以上東京朝日新聞)

○淺間山大噴火

【高崎電話】二十三日午後四時四十七分轟音物ぞく淺間山噴火し黒煙は入を暗くした、その音は大地震の如く高崎地方は建物を揺がしたので市民は屋外に飛だし折柄開會中の高崎市會は議事半ばに議員總立となり休憩となつた、尙噴火のため高崎輕井澤線および高崎東京線(二回線)電話線は故障となつた、近頃見ない噴火である。

【長野電話】淺間山爆發のため黒煙もう／＼と群馬方面に流れ一尺四方位の燒石が落下し交通危險のため草津行電鐵は運轉を休止した、同地方では大正九年以來の爆發であるといふが長野測候所では四時四十六分から約一分間長野地方でも人體に感ぜざる程度の震動であつたといつてゐる。

【前橋電話】淺間山は二十三日午後四時四十八分大鳴動と共に黒煙天にち／＼し前橋方面でも戸障子が外れる騒ぎにて人々屋外に飛

びだした、黒煙は東方に流れ碓井、群馬、前橋、勢多、利根方面に降灰があり澁川、草津方面には焼石が降つた。

【長野電話】淺間山は二三年の間煙を見なかつたが昨年四月新に噴煙がありその後山頂に近い湖候所では人體には感じないが一日數回機械に微動を感じたことがしばしばある、九月の末から本式に活動し十月十二日午前八時噴火し可なりひどい音がして山麓の追分の湖候所では約三十分震動を感じて埼玉、栃木、茨城、群馬方面に灰が降つたことがあり、その後は噴煙を見ず十二月七日の晩少しく近縣に降灰したことがある、その後十二月三十日から翌一月に草津白根が幾分噴火したがどの邊だか雪のため見ることが出来ない、次いで今度の淺間の噴火は追分の湖候所では午後四時四十五分に噴火したもので被害はないとの報告であつた（二月二十四日）

【前橋電話】淺間山大爆發のため群馬縣吾妻郡長野原地方にはこぶし大の焼石落下し來り長野原町大字 應桑土屋吉五郎方は焼石から發火して一棟焼失した、同地方は積雪七尺に達し居るため焼石が落ちて比較的被害は少いが他にも相當被害ある見込で調査中である。（二月二十五日）

【前橋電話】淺間山爆發による降石の被害は總選舉のため各警察署の報告遅れてゐたが二十七日碓氷郡松井田警察署から縣に達した報告によると碓氷郡烏溝小學校でガラス窓十七枚を破壊し、同村地方は百五十枚の焼石が落下し同村字川浦岡田吹三（三〇）は頸部に重傷を負ひその他五名の負傷者をだした。（二月二十七日）

【長野電話】淺間山は十二日午後七時頃から今朝六時にかけて又も噴煙をなし音響はないが砂に近い大粒の灰が間斷なく降り山麓一帶は忽ち灰色の世界と變じ戸障子の隙間から屋内に吹込む灰は五六分に達したところもあり、道ゆく人は眼を開けることが出来ず四顧暗たん物すき有様を呈したが七時頃から漸くやんで明るくなった、右について梶間長野湖候所長は語る。

『今度の噴煙はまだ報告はないが昨年十二月七日に噴煙のあつた時に群馬の方に灰が降つたが灰の降る方面はいつても同じではなく今度は山麓に多かつたものと見える。（三月十三日）（以上東京朝日新聞）』

○慶大山岳部員遭難

【松本電話】北アルプスのしゆん隘嶺、穂高のスキー踏破のため十七日朝飯田町から松本に來た慶應山岳部大島亮吉氏をリーダーとする一行四名は、同日島々口から登山し高地でスキー練習の上、二十四日天候の晴間を見て上高地を出發穂高をスキー踏破中、同岳の岩小屋を距る程遠からぬ北尾根の岩壁から一行のリーダーたる大島氏は過つて千丈の谷間に墜落行方不明となつた、一行は直に島々口の京濱電力會社その他地元青年團の應援を求め搜索をなすと共に急を慶應大學當局に報じ、二十五日朝同山岳部の青木孝二氏外七名の應援を求め搜索中だが、二十六日夜に至るも所在不明である、尙二十六日の夜行つて昨年夏秩父宮殿下のアルプス御登山の際御伴申あげた慶應山岳部の先輩早川種三氏をリーダーとする一行が松本着直にアルプスに登山搜索に着手するはずであ

る。大島氏は横、早川、大島といはれ山岳部のオーソリチーである。來授した青木氏の一行は二十七日朝到着する早川氏一行と松本で打合せをして善後策を講ずるはずである。

穂高スキー踏破中遭難行方不明になつた慶大山岳部のリーター大島亮吉(三〇)氏の搜索隊は、二十六日午後松本に急行した早川種三、佐藤久一郎兩氏指揮の下に二十七日は未明より前穂高北尾根の遭難現場に出動し、強力なる人夫七人及び同大學山岳部員五名を中心に極力搜索を行つてゐるが、同朝八時早川氏から芝區西久保櫻川町の大島氏宅に達した電文には二十六日夜搜索隊は大島氏の身柄を發見し若小舎で手當中であるとあつたが續いて右の情報は全然誤聞であつたと打消しの電報がきたのみで、その後同正午までには何等の情報も入らず依然不明のままになつてゐる、一方遭難當時の様相について搜索隊からもたらされた情報によると、大島氏は雪崩の落下する時間的測定を行ふため同氏がリーターとなり本郷常幸、齊藤長壽郎、楳弘の四氏の一行は廿五日朝未明に唐澤の若小舎を出發した、そして午前九時頃前穂高の北尾根にさしかゝつた際濃霧に襲はれ危険とみて小舎に一行は引返すことになりさびすをかへして下山する途中殿りをしてゐた同氏の姿が突然消え失せてゐるのに氣づいた三名は驚いてその付近を探し回つたが深い谷間に墜落した模様なので、内一名は若小舎に驅け下り小舎に居た人夫を急使として東京に走らせた、ところがその夜その人夫は徳木峠で宿泊したため東京への情報は遅れたが廿六日朝岩魚止に居た同大學の學生六名がこのことを聞き東京へ急報する一方現場へ救助に向つたのであつた。

【松本電話】北アルプス前穂高北尾根から墜落した慶應山岳部リーター大島亮吉氏の二回目の捜査情報が廿七日午後八時捜査本部たる松本市飯田屋旅館に、同山岳部第二班の望月および伊東甲南高等學校生の手でもたらされた。それによると大島氏は一行の先頭齊藤氏の次になつて進み北尾根の第四ヒークの絶頂を究むべく登はん(登はんの際はロープを使用しなかつた)絶頂より四間下の斷崖から誤つて足を踏み滑らし岩塊と共に潤澤谷へ墜落したもので約五六百間下の懸がいに引懸つた。一行は直に捜査にかかつたが手袋財布などが途中の岩壁に發見されたのみで天候險悪のために遂に引揚げを斷念し二十六日は天候は回復したが谷へ下るロープの不足から引揚げ不可能となり二十七日早朝から再び引揚げにかゝつたが正午までには引揚げが出来なかつた、大島氏は墜落と同時に重傷を負ひ二晝夜みぞれにたゞかれ苦悶しながら慘死したことが漸く判明した。

大島氏は慶應大學山岳部の先輩であるばかりでなく我山岳界の一權威であつた、大正十三年同大學商工部を経て經濟學部を卒業し外國語學校に入學ドイツ語を専攻中同年秋麻布三聯隊に一年志願兵として入隊少尉になつて除隊した、商工部在學中から登山に熱中し全國の峻岳を片つばしから踏破し名ある山岳で同氏の足跡を止めないものはほとんどない位である。大正十三年五月秩父宮殿下が越中立山にスキー登山を遊ばされた折には横氏等と共に御伴申上げ、その後も輕井澤やその他のスキー場等では、殿下に拜謁を許され少からず面目を施したのであつた。

大島氏の嚴父善太郎(七五)翁は、亮吉は三男ですが四人あつた

子供のうち當人を残して他の三人は失くなつてしまつたので現在ではたつた一人のせがれなのです、それだけに餘り山の方に熱中して、もし間違ひがあつてはと心配し少し控へてくれるやうにいつておましたが『好きなことをしてゐてそのために死ねば満足です』といつて勝手に山登りしてゐたやうな有様です、と老の眼に涙を浮かべながら語つた。

【松本電話】北アルプス前穂高北尾根登山は山中墜落した慶應山岳部第一班リーダー大島亮吉氏の死體は一度発見引揚げを報道されたが右は現場より搜索本部への報告の誤りにて二十七日も遂に所在発見されなかつたことが二十八日午後三時榎尾谷の捜査根據地から上高地に下山した人夫の報告により確められた、これによると北尾根第四ヒークの谷底五六百間下の断崖の上に望見され大島氏と認められたものは廿七日ロープ俵ひにおいて見た結果同氏が顛落の際モギ取られた防寒用の皮の上着とリュックサツクで所々血痕が付着して居る痛ましい遺物であつて、大島氏の所在は遂に発見されず千俵の谷底深く落込んだものらしい、二十五日の豪雨のため潤澤谷一帯の雪が緩み雪崩が頻發してなり二十七日現場捜査隊は谷の險阻と雪崩の危険なため現場と思はれる箇所までも到達し得ず、二十八日引續き捜査を續けて居るがあるひは雪崩のため埋没されては居ないかと氣遣はれて居る。

【松本電話】北アルプスの前穂高で墜落行方不明となつた慶應山岳部大島亮吉氏の死體捜査は二十九日も引續き早川、楳氏等により北尾根第四ヒークの絶壁から一本のロープ俵ひに危険を冒して行はれたるが午前中には遂に所在さへ発見されず、午後からは天

候急變して雪模様となり密雲深く捜査隊の行動にも危険を感ずるに至つたので午後二時遂に作業を中止した、遭難當時より五日間にわたる現場捜査により大島氏は第四ヒークから墜落し谷底たる潤澤谷カール雪溪までは轉落せず雪溪近くの岩塊の間にはさまつて惨死を遂げて居るため所在発見が困難であることが推斷されるに至つた。一流山岳家である大島氏が不慮の死を遂げた原因について地元山岳家は北アルプスの冬山の人跡未踏の地は麓のヒークといはれる遭難現場たる無名の第四ヒークで昨年一月早大山岳部の先輩船田、藤田兩氏が新記録を作るため前後一週間にわたり踏破に苦心したが遂に成らず引あげた事實があり今回慶應山岳部が新レコードを作り同ヒークの名付親たらんとして踏破の途中遭難したものとといひ兩大學の山岳部間に互に記録を作らんとする對抗氣分のみなきつて居るを遺憾として居る。

【松本電話】北アルプス前穂高で遭難行方不明となつた慶應山岳部大島亮吉氏の死體捜査隊は埋没地點と思はれる潤澤谷の雪溪發掘にかゝつたが頻々雪崩が襲ふので危険のため作業困難の上に三十日午後から降りだした雪が三十一日もやまないのて遂に發掘を中止し、三十一日正午捜査隊は監視のため人夫數名を遭難現場の岩小屋に止め捜査根據地から上高地清水屋旅館に引揚げた當分休養の上四月十五六日頃再發掘にかゝるはずだが同時期は雪崩が起る危険があり發掘は雪解まで不能らしい。

【松本電話】前穂高北尾根で墜死した大島亮吉氏の死體捜査のため根據地に活動してゐた早川種三氏外慶應山岳部員十餘名は、一日午後六時松本の捜査本部に引揚げ午後八時半早川氏から去

月二十五日から三十日までの發掘作業の経過を左の如く發表した。大島氏の遭難は去月二十五日午前十一時五十分頃前穂高北尾根第四ピークから墜落し、遭難箇所から百五十メートル位下に大きな岩ありそれに當つて死んだものらしく、その下五百メートル位のところに上衣とリュックサックがあつたが死體は發見されなかつた、二十六日は雪のため雪崩があり、獵夫の話により、雪溪で獲物があつた場合雪崩があると雪溪の下まで獲物を持つて行つてしまふと聞き、梓川發電所からシャベルやその他の道具を借り入れたが雪が降つたので作業が出来ず、雪溪から上の方を双眼鏡で見ながら見當らなかつた、二十七日は一行のうち本郷氏が五百メートルのザイルで岩から下りたが死體らしいものは見當らなかつた、二十八日に引續き捜査の結果岩から左の方へ外れたらしく雪溪に筋がついてゐるので、二十九日はそれを頼りに搜索したが猛烈な大吹雪で困難を極め依然何も見當らない、三十日はデブリーを掘つて見たがやはり何もなく山は荒れて来たので中止し小金に引上た。(昭和三年三月二十六日—四月二日 東京朝日新聞)

○早大山岳部發掘準備

【松本電話】北アルプス針ノ木に雪崩のため埋没されてゐる早大生四名の死體發掘準備調査のため本月十三日來入山してゐた早大山岳部第一班はリーダーの近藤正君を残して有田、遠藤、二世川の三君は天候回復を待つて二十七日夕刻信濃大町へ下山の上松本驛前飯田屋旅館の奥廬山岳部の遭難者捜査本部を見舞つた上同夜十時五分發列車で歸京した一行は語る、遭難地は積雪一丈數尺に

達ししげく雪崩が襲來したと見え埋没地點は不明となつてゐる數日前埋没地點と思はれる個所の第二回試掘をしたが一丈五尺までは漸く掘返したが下は氷の層をなし手の下し様があつた、數日前も小さな雪崩があり今後暖氣と共に頻發の恐れがあるので最初の發掘預定たる四月二十日前後の發掘は到底不可能である、來月十日は遭難百ヶ日に相當するので當時の生き残りをはしめ山岳部員が大舉登山し現場で盛大な百ヶ日祭を執行する豫定で、歸京の上大學當局と發掘時期について相談するはずだが恐らく五月下旬にならなければ發掘の段取はつくまい。

【松本電話】北アルプス針ノ木峠で遭難した早大生四名の死體發掘準備のため去月二十二日入山した森田勝彦君をリーダーとする第二回調査隊は引續き氣象、雪質、雪解状態の調査を續けて居るが來る六日をもつて調査を打ちり下山歸京することゝなつた。この調査の結果により四月中の發掘は不可能と分つたので更に雪質研究のため理化學研究所の黒田正夫氏を伴つた藤田一行の第三回調査隊が四月一日登山するとの情報が信濃大町對山館に入った。第三回の調査結果に基き發掘にかかるは六月上旬となる模様である。(四月一日東京朝日新聞)

○ヒマラーヤだより

會員岡田喜一氏の親友長谷川傳次郎氏は、ヒマラーヤ及び印度の各地を旅行する目的にて、先年颯然として印度に渡航されたのであつたが、四年後の昨年ヒマラーヤから西藏へ旅行されたといふ消息が本年一月になつて岡田氏の許に達した。参考に供す可き



近附（呎〇五七六一）峠クレブリ上途のヘトツベテ



（紅淡色花 呎〇〇五一—拔海）シロドンデドーロ
影撮氏 郎次 傳 川谷長

ものがあるので、岡田氏の同意を得て次に書信の一部を掲載する。

(前略)ヒマラヤからチベットへかけての四ヶ月の旅は實に思ひ出が深い。あの大きな焚うれりも前山をひかへた、總ての變化を合せ持つヒマラヤ、その雪に接した時、驟風に鮮な緑のしとれ、寶石をまき散した様な草本帯にまどろむた時、何度か君の居なかつた事が物足りなかつたらう。(中略)。こんど僕の歩んだのは、ネパールの西側からリユプレック峠によつてチベットに入った。印度の最後の部落でチベットへの入夫を雇はうとしたが、僕をスパイと見做して案内を拒絶した、部落こそつて反對した。つひにブータン人の羊毛商人の夫人の助言によつて漸く出發することが出来た。然し寫眞を撮り地圖を作る事はせぬ約束であつた。けれど寫眞も完全ではないが參考になるのが出来た。

西洋人は眼の色が違ふので一寸行かれないが、日本人は比較的樂だ。(中略)。チベットまで行かなくても、ヒマラヤの旅でも登山にでも來ませんか。五月の始めにカルカッタに着けば遅くはない。僕の行つた様な極的の旅なら二人二ヶ月で五百ルピー位で行けると思ふ、登山なら倍位かゝりさうに思ふ、費用は主として入夫賃だから。(下略)。

長谷川氏の通過した路は詳報がないので判然しないが、推察するにナイニタル若しくはアルモラから東北に向ひて所謂ガール・ヒマラヤ地方に入りて、カリ河に沿うたる貿易路を東北進して、アビ(二三三九九呎)ナムバ(二二一六二呎)の双兒峯を右手に眺めつゝ、大ヒマラヤ山脈の支脈たるザスカール山脈の南部を

リプレック峠によりて横斷し、正面に世界第三十八位の高峯ガアラ・マンダータ(二五三五五呎)の雄姿を眺めつゝ、カーナリー河上流の地域に下り、聖池マナサローワール即ち阿耨達池又は無熱池の畔に出て、傳教徒の尊崇措かざる靈山カン・リンボチエ即ちカイラス山の麓に至り、或は多くの巡禮者のやうに之を一周したる後、再び前路を取りて印度に歸られしものならんか、ブータン人の羊毛商人とあるは、ガール北方のポート人のことであらう。插入の寫眞中、リプレック峠附近とあるものは、裏に、二年七月十六日、チベットへの道リプレック・パス(一六七五〇呎)にさしかゝる、午後四時頃西西南に面してヒマラヤをかへりみる、とありて、峠にさしかゝりてそれを寫したものが、かへり見てヒマラヤを寫したものが、明瞭でないが、千九百五年にロンゲスタツフ氏と共に同じ峠を論じたチャールズ・シャーリング氏の著書「西部西藏と國境地方」と題するものに殆ど同じ寫眞が載せてあり、夫によると峠に面して撮影したものであることが判る。峠は右の端の方にあるらしい。シャクナギの方は、裏に、二年六月廿九日、東經八十度二分一、北緯三十度四分一、海拔一萬一千五百呎、とあるからリプレック峠よりは手前の大ヒマラヤ山脈中のものである。

○會員通信

△半月餘りの長崎滞在に大分飽が來ましたので、今朝の快晴を幸ひ雲仙へ遊びに參りました、先づ新湯に落つき、矢岳へ登り温

泉に一浴、一杯を傾けた處です。長崎と違ひ流石に寒冷を覺えませんが。明朝は普賢岳に登り歸長致します（十二月三日雲仙新湯ホテルにて神谷恭）

△初冬とはいへ毎日の美晴にすつかり恐悦いたし席の温まる違も無之諸方の山谷をほつき歩いて居ります。大岳御前から小河内方面へかけて素派らしい新道が出来たさうだといふ里人の噂を確める爲去る三日月御岳から大岳の小屋に赴いて假寝の夢を結びました。四日の午前二時半戸外の人聲に起き出して見るに意外にも會員の大熊・木村（久）・山田（多）の三氏であつたので大に歡び合ひました。四日の一行（四名）の行程は、大岳―御前―中尾根―水戸澤―神戸岩。鐘乳洞―五日市でありました。（十二月六日 日向和田萬年屋にて高畑棟材）

△拜啓。先般は大に失禮。扱赴任の砌山麓を過り候まゝテヨット敬意を表する爲途中下車して伊吹山に登り候。折柄山頂は霧深くして風強く候様見受けられ候へ共春照の測候所に立寄て尋候候處によれば、九時頃には晴る可しとの事に勢を得、萬一を僥倖して望遠レンズ・バンクロー等を携へて山に向ひ候上野より急な坂路を上り一合目とかのスキー場に到ればトタン張りのパラック小屋並列してそゝろに震災當時の東京を思ひ起し候、當地の人々かそれ共スキーをやる人々か又は双方共かは知らざれどとに角こゝに来る人達は審美的觀念の發達せざるものと驚き入り候。三四五六と各合にも小屋あれど何れも低級なパラックには胸を悪く致し候、それと共に山腹の樹叢灌木の類は皆山麓の住民が糞を背負ひ上げて伐採の上運搬し去る爲めどこもかもイガ栗坊主となり、水は湧

かず斜面は乾き山は瀕死の病人とても申す可き有様實に哀れなる次第に候、此山の名物イブキジャカウサウはハケ岳その他の山々にあるのとは違ふ由その道の大家の御説故「目皿」にして搜索致せしも深山は見當り申さず、然も外の山に生ぜる所謂イハジヤカウサウと暫見異らざるには稍失望を感じ候。全身汗にまみれてひる頃山頂に達し測候所にて休憩、四方の展望をと存じ候ところ西南の風吹き候爲めか霧は散じ候もヘイズ濃厚となり竹生島さへ極めてゴンヤリせる有様に落膽して寫眞は一枚も寫さずに下山致し候。高さも、地質も、面白さもツマラナサも武甲山に伯仲せる位の事を知りたるが唯一の得物とは吾乍ら笑止に候。過日はまた當大學演習林に參り丹波アルプスとても申しそんな地方を數日歩き候アナ帯の原生林にてスギの野生多く又ヒメコマツや稀にカウヤマキも自生致し居り候、野豬等盛に出沒致し候やにて熊に皮をはがれたる杉少なからず候、それより若狭に越へ、越前に入り北陸線にて歸洛、途中七木槍の賤ヶ岳に登り琵琶湖の大觀を享樂し又餘語湖を下瞰して愉快なる旅の結末と致し候。去る土曜から日曜にかけては叡山に登り山中諸所を巡遊しモミヤスギの天然生の状態を研究致候、この邊から比良にかけてはスギの野生も少なからざる様にて面白く存じ候。又已に御耳に入れ候やもと存じ候へ共、鈴鹿山脈にも野生のスギ有之候へば伊吹あたりにも昔は自生のものありたるなる可しと存じ候。丹波高原から白山立山の麓にかけ北は秋田迄杉の分布區域に候。又鈴鹿の連山より伊勢大廟地の奥大杉谷から紀伊の一部、飛んては土佐にも杉の天然生を見る可く、野生の杉は随分方々に見られ候。その他御承知の丹澤山塊

や天城・猫越山脈等にも見受け候が、秩父等の關東になきは不思議に候。(十二月一日 京大農學部林學教室にて、武田久吉)

△合歡山登山通信 昭和二年十二月二十八日夜行列車に没し妻子とも四名にて出かけ、二十九日二水驛下車、外車塚まで輕便、それより定期の臺車にて埤里街に到り同所日月館に一泊、三十日、臺車にて眉溪に到り、霧社(約三七〇〇尺)に上り、櫻旅館に一泊、三十一日午後より、小生一人、霧社警察分室の警手と共にロードフ牧場を経て立鷹駐在所(七三三四尺)に上り、次て三角峰駐在所(七八三四尺)に到りて宿泊す、昭和三年元旦且は三角峰よりトロッコ駐在所の巡查部長板橋氏、三角峰駐在所の高井巡查、霧社分室の喜納警手(以上三名は所謂搜索隊として警備隊の最小人員なり)並にトロッコ社蕃人八名と共に十時近き頃出發、追分に到り、之より蕃界道路を離れてタロコ討伐の折に開鑿せられし軍用道路(今は廢道)を進み、午後二時半頃海拔一萬尺近き地點、蕃名「リツシ」と呼ぶ針葉樹林中の蕃人狩獵小屋に野營す、此日歩行中は天候無難なりしも野營地に着くや否や霞の降るあり(氣温攝氏五度)次て突と化し遂に雨となる、夜は多くは雨、時々突を混え、豫期はしたるもさながら東北地方山岳の晩秋初雪の頃の如き感あり、かくて一夜を明かし二日の午前八時四十分霧雨をついて出發なほも討伐道路を進めば海拔一萬尺程の所に小池あり、此處に野營の跡あり、附近には此山行初めて殘雪現はる、一萬五百尺のあたりよりは積雪漸く打ち續き流石に冬景色なり、蕃人は素足なる故、之より下し、足袋きやはんを穿てる只一人の蕃人警丁のみを連れ行く、積雪平均約二寸、雪温攝氏零度附近、氣温三

度。九時五十分道路の最高所近き所に達し、左折して合歡山に向ふ、此邊一帶は積雪の外に小灌木笹等に霧氷凍りつき美觀いはん方なし、十時二十分合歡山頂上海拔一萬一千二百尺(標高は總て蕃地地圖による)に到る、山頂は緩傾斜の一大雪原と化せり、風強き爲須臾にして下山、十時五十八分池畔に到り之より少しく下方にて焚火をなして中食を了し十一時半出發、馬力をかけて殆ど不休にて午後一時半三角峰に歸着、之より又喜納警手並に荷持の蕃人一名と共に往路を戻り午後七時頃霧社に歸る。翌三日眉溪、埤里、大林を経て徒歩日月潭に到り舟行、有名なる水社化蕃の杵音と吟聲を聞き水社の涵碧樓に泊、四日、五城迄歩き又々臺車に投じ、順路を臺北に歸り申候。

霧社は評判の如く面白き所にて眺望もよろしく候へども、之に到る道の左右山林の次第に荒され行くは惜しきものに候、成程此れ丈なら凡山凡水といはるゝも仕方なし、三十一日の朝は蒔菜主南峰附近の積雪を望み候、立鷹までの道は山の行者には更にうれしく、立鷹にて新高山の意外に遠く小さく次高山の意外に近く大なるにおどろき申候、此處のアーベントグレイニーは熱帶山岳獨特の華やかなるものあり忘れ難き印象を残し候。

合歡山登山の案外簡單なる事と、かくの如き簡單なるにも拘らず今迄所謂登山家の登らざりし事にも驚き候全く此の山が内地にてもあるなら案内人夫も不要なるべし、此方面はトロッコ蕃、タロコ蕃、マレット蕃の狩獵地争ひの度々ある所、各蕃社は互に敵視し居る故、此度の山行にも蕃人にはすべて鐵砲を持たせ候、盛に狩獵すると見え、山を燒きたる所少からず、然しこの山行中に

は不幸にして其狩獵は見るを得ざりし。

霧社にては赤い櫻と桃、梅、ツツジ、スミレなどの類開花致居り、まだ多く臺灣化せぬ身には異様に感ぜられ候。

臺灣山岳會の有志一行は私と同じ頃大武山に登り、南大武山迄縦走、天氣もよく痛快を極め候由、其他には熊高越が流行したる機見受けられ候、いづれ又臺灣登山界近況の第二回報告として申上ぐべく候。(昭和三年正月 臺北にて 沼井鐵太郎)

△十二月は十七日東京發て關温泉に參り三十日迄スキーをして居りました、そして同行者の都合にて遺憾乍ら鷺見岳に行くのを止め大晦日に歸京し四年振りにて東京で正月を迎へました、然し正月も別段面白い事もないので三日夜行で水會御岳に向ひました、四日は福島でゆつくりして黒澤泊、五日は正小屋泊、六日六合目の中小屋に至り七、八日は滞在、九日遂に頂上まで參りました、スキーは八合目まで履きました、所要時間は上り約六時間半、下りは三時間許りでした。(一月十四日 田中晉雄)

△其後御無沙汰申しました。昨夜札幌を發す、好運にもオホツク海にて流氷の壯觀を眺め今日北見留邊を經て武華温根湯に泊りて居ります。明日より約十日間の豫定でイトムカ川を上り武利岳に登る積りです、約八日間雪中露營、心は頂へと飛んで居ります。春期に於ける中央高地の登山は今回の武利岳及び他の斑のニベソツ山で第一級の山は登りつくされることになりました。(三月十七日 原忠平)

△御無沙汰申上候。馬來半島には山登の機會も餘り無之、只ヤョホール王國一の山と云ても、四千百何呎のマウント・オフイアの頂

きに一晚安眠仕候。名物の虎にも出つくわさず、猿とコホロギの聲を聞きしのみは御座候。只今は甲谷院在住の身。目下は毎日日本晴れの好天氣續き、空益高く、トンビが始終ヒーヒョロ／＼と鳴き居り候。カンチンヤンガ見物の日を氣永に待つて居る次第に御座候。(昭和三年元旦 於印度 三田幸夫)

△拜啓一月三日夜行にて會員川崎吉藏君と大月に至り、谷村より細野に出て御正體に登山仕候、山頂は樹木切拂ひし爲眺望殊の外に有之候、正午過出發栗ノ木タツマより白井平へ出て同夜は水越勝次郎氏宅へ一泊、五日は川崎君のみ同氏を案内に城尾峠より畦丸へ登山し再び同氏宅へ一泊、六日は池ノ原より室久保澤(宛字)に沿ひ大日本鉱石會社經營にかゝる大石精製工場に至り同所より東へ尾根薄ひにて加入道に登山仕候、同工場は只今休業狀態にて留守番藤間某のみ居住致居候、大理石採掘場は加入道山頂より西方二三十米突下にて登路も比較的完全に有之候、加入道山頂より直ちに大室山に至り梓澤を下り大椿より馬場を經て室久保へ一泊、七日は竹ノ本より朝日山を越へ無生野へ出てアナシ峠より鞍岳山を往復し鳥深へ出て歸京仕候。(昭和三年一月二十五日 長谷川長次郎)

會 報

○第三十九回小集會記事

昭和三年三月十日午後六時から赤坂區溜池三會堂に於て開催、左の講演があつた。

一月の御岳に就て 田 中 菅 雄氏

本年一月五日スキにて御岳の黒澤口を登り、中ノ小屋を根據地とし、八合目からアイゼンを穿ちて頂上まで往復されたのであるが、氏は前年の四月にはスキを用わずに登られてゐるので、雪量、雪質等に就て比較した詳細な發表があり、殊に御岳の一月登山は最初のことであるから、後遊の人の參考となること多大であり、十數葉の寫真も珍らしいものばかりであつた。

春の後立山

冠 松次郎氏

六月上旬、岩永信雄氏と共に越中方面から黒部川を踰えて、後立山山脈のスバリ岳の北方に上り、赤澤岳に至り、其支脈が黒部川に突き出してゐる末端の峯頭（新稱猫ノ耳）に立ち下下廊下を瞰下ろし、一週日餘を費して附近を跋涉された旅行談で、岩と殘雪と新緑とが織り成りなす美觀に酔ふたのは講演者ばかりではなかつた、殊に大小取り交ぜ百枚に近き鮮麗な寫真はこれまた人をして恍惚たらしむるものであつた。

司會者は冠幹事。

當夜の來會者は、神谷恭、木村久太郎、大熊保夫、吉田竹志、田中菅雄、小島染之助、岡田喜一、吉澤一郎、柳澤悟、佐々保雄、伊藤朝太郎、飯塚篤之助、深山東一郎、長谷川孝一、渡邊漸、岩永信雄、黒田正夫、本多友司、野口末延、笈川一、伊藤一郎、鈴木勇、木暮理太郎、藤島敏男、鳥山悌成、別宮貞俊、冠松次郎の二十七氏にして、他に黒田初子夫人及び會員外五名の出席があつた。

○會務報告

昭和三年二月廿八日午後六時より赤坂三會堂に於て幹事會を開き、左の件に就て協議した。

一、千九百三十年に開かるゝ萬國山岳展覽會へ出品の件。

一、亡くなられた幹部及會員の追悼會舉行の件。

一、入會申込者の詮衡。

出席幹事 藤島、別宮、冠、木暮、鳥山、高頭(委任)、横(委任)。

○交換及寄贈圖書目

ツトリリスト	第十六年第二號	同 第三號	ジヤパン・ツアーリスト、E.チーロー
歩跡	二年二、三號		テクリ會
管見錄	第四年第一、第二號		大阪管見社
キャンピング	二月號		ジヤパン・キヤムフ・クラブ
會報	第五年二月號		サンシヤイン旅行會
會報	第五年第一號		關東山岳會
山行案内	第三年第二、三號		昭和マウンテン・クラブ
旅行	第八年二、三、四月號		東京アルカウ會
山の叫	第二十三號		東京旅行クラブ
霧の旅	第九年二十七號		美登里山岳會
アルカウ趣味	第十五年二、三、四號		霧の旅會 日本アルカウ會

會報	第四年二、三號	東京登山會
山嶺	第七年二、三、四、五月號	東京野歩路會
信濃山岳會報	昭和三年第一號	信濃山岳會
みやま	第一卷	東京山嶺會
旅	第五卷第二、三、四號	日本旅行協會
山とスキー	第七十九號	山とスキーの會
尾瀬地方に於ける保護林と其の景觀		東京營林局
La Montagne, N°206, 207, 208.		
Revue Alpine, Vol. 28 N°4.		
Rivista del Club Alpino Italiano, Vol. XLVI Num 11-12.		
Butlletí Excursionista de Catalunya, Any XX-XVII Num. 339, 390.		
Bird-Lore, Vol. XXX No. 1.		
'The Mountaineer, Vol. XX No. 2, 3.		
Bulletin du Club Alpin Belge, 2 ^e Série Nos 8 et 9.		
Colorado Chautauqua Bulletin, Vol. XVII No. 1.		
The Geographical Journal, Vol. LXX No. 6, Vol. LXXI No. 1, 2.		
The Prairie Club Bulletin, No. 172, 173,		
Trail and Timberline, No. 110, 111, 112.		
Natural History, Vol. XXVII No. 5.		
Die Alpen les Alpes, le Alpi, IV N°1, 2.		

○本會規則拔萃(大正十三年九月改正)

- 第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ
- 第三條 本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キテ一切ノ會務ヲ處理セシム
- 第十條 本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルモノトス
- 第十一條 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所、姓名、年齢及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送付スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス(入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ)
- 第十二條 入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス
- 第十三條 入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルベシ
- 第十四條 正會員ハ會費年金六圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スベキモノトス
- 第十五條 正會員ニシテ一時ニ金百圓以上ヲ納付シタル者ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス
- 現任幹事八名
- | | | |
|-------|---------|---------|
| 別宮 貞俊 | 藤 島 敏 男 | 冠 松 次 郎 |
| 木暮理太郎 | 横 有 恒 | 高頭仁兵衛 |

會 報 ○本會規則拔萃○投稿規定

- | | |
|---------|-------------|
| 鳥山 傳 成 | 沼井 鐵太郎(在臺灣) |
| 評議員十七名 | |
| 小島 久 太 | 武田 久 吉 |
| 近藤 茂 吉 | 中村 清太郎 |
| 辻本 滿 丸 | 田部 重 治 |
| 及現任幹事八名 | 山 川 巖 |

○投稿規定

- 一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと。
 - 一、用紙は半紙半枚大、天地左右をあげ、每紙片面のみに字體明瞭に認め各行二十二字詰とし、每紙同一行數のこと。(但し原稿用紙は事務所へ申込次第直に送ります)
 - 一、一、一、一(一)等は各一字畫宛とし、行を更むる時は一字下げのこと。
 - 一、地名には片假名を振り、漢字不明にして當字をなす時はその旨を括弧内に明記す可きこと。
 - 一、スケッチは複製の際誤記、脱漏等の虞あるを以て豫め本誌面に適せる大きに複製ありたきこと。(但し其儘寫眞版に附し得るものは大さ隨意)
 - 一、原稿は左記宛御送附のこと。
- 東京市本郷區駒込蓬萊町三一 「山岳」編輯所
- 尚ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと。

○挿圖説明

本號の對十六頁及對三十二頁に挿入した圖版は、今岡義夫氏の撮影に係るもので、寫眞の數は七枚。左の如き説明が添えてあつた。但し其中の(二)(五)(七)の三枚は製版の都合上遺憾ながら割愛せざるを得なかつたけれども、猶參考となるものがあるので、本文は其儘にして置いた。

(一) 鹿林山(九四六四尺)より見たる新高、主山(一三〇七五尺)(右)と北山(一二七六〇尺)であります。撮影致しました鹿林山は、阿里山より半日行程の處であり、同處には不完全ながら小屋が設けられてあります。この小屋には夏期は巡査が居り、阿里山と新高下の小屋を繋ぐ電話の交換並に登山者の世話に當り、萬一の際の避難所となつて居ります。同所に至れば、臺灣とは申しながら既に充分溫和な氣候であります。阿里山より鹿林山を経て新高下の小屋に至る登山路は、昨秋開鑿されたばかりで、臺灣特有と申すべきか、(勞働賃銀の廉價なる爲ならん)實

に良き路であります。タリタカ鞍部附近よりは、地形の峻峻に伴ひ多少惡路となりますが、それにしても經驗ある登山者には容易であります。

(二) 南玉山附近の山相(圖版略)は西山(一一六九八尺)を経て新高下の小屋に着く二〇分程前に撮影したもので、同地點は約一萬尺であります。新高下の小屋に至る中間、前山(一〇七〇〇尺)の頂上より少しく下りたる附近に前山避難所があります。内地の南アルプスの小屋に類似の、略完全した小屋であります。同じことは新高下の小屋に就ても云はれます。前山の小屋には番人は居りませぬ。新高下の小屋には前述の通り、電話の設備まであり、この小屋に限り寢具として毛布の備へもあり、米、味噌も貯へてあります。夏期、或る時期に限り、巡査の番人も居る由であります。其の他の時期に於ても、警衛の巡査(これは入蕃證の必要と共に、必ず附せられる)が小屋内の世話萬端に當ります。何れの小屋も水には近く、薪も附近で得ら

れます。

(三) 新高頂上附近の岩壁と南山(一二七六八尺)遠望は、新高下の小屋より頂上に至る登山路の中途より、直接頂上に向つて登山繩を使用せずして登り得べき岩壁を登り、頂上に近き所で撮つたのであります。登山路は圖の右隅下より中央の尾根を左手前へと傳ふて頂上に至るのであります。

(四) 新高下小屋より頂上に至る間の岩壁にて。

(五) 新高主山(一三〇七五尺)頂上。撮影致しました後に、三角櫓があります。新高の岩質は、水成岩でありますから、岩壁として極めて好しいものであります。

(六) 新高頂上直下の岩壁(圖版略)。頂上より下つて八通關方面に至る路の右方に聳立するもの、稀に美事な岩壁であります。

(七) ナマハバンより新高を望む(圖版略)。新高下の小屋を發して頂上に登り、八通關に下る、その途中に東山(一二八一六尺)を真上に仰ぐ地點に東山下避難所があります。これ又、立派な

小屋で、同小屋よりは八通關との間に電話の連絡があります。

八通關(九三七四尺)には巡察の駐在所があります。勿論生蕃に備へるためであります。同所を経て、トンポまで降り。温泉に疲れを休めて宿泊致しました。翌日、同地を發してナマハバンに至り、新高を振り返つて撮影したものであります。圖中、左に高く見ゆるは北山(一二七六〇尺)であり、右に低さが主山であります。

撮影致しました地は、既に暑熱苦しき地であります。内茅埔より臺車で水俣坑に至れば、汽車に塔乗致すことが出來ます。

尙、この登山は昭和二年八月十四日より十七日に掛けて致しました。(十二月九日、今岡義夫)

昭和三年四月二十七日印刷
昭和三年四月三十日發行

【定價金壹圓貳拾錢】

編輯兼發行者

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

印刷者

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島連太郎

發行所

東京市芝區高輪南町三十番地

日本山岳會

振替口座東京四八二九番

印刷所

東京市神田區美土代町二丁目一番地

三秀舍

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXII

1928

No. 3